

# 松田家の歴史

## 「吾妻鏡に登場する一族」

波多野筑後権守遠義、（義通の父、松田有経の曾祖父）

波多野義通、二郎、（松田有経の祖父）

波多野右馬允義常、（松田有経の父）

波多野有経、二郎、（松田家初代松田有経）

松田政基、左衛門尉、松田有経の子、母は波多野義景の娘。有忠の兄。松田郷が本拠。

松田盛高、松田高義の子、母は波多野義景の娘。後に左兵衛尉に任官し、藤原頼経に近侍。

松田義基、松田有経の子、母は波多野義景の娘。政基の弟で有忠の兄。

松田彌三郎常基(経基)、（有経の孫、義基の子）

松田小次郎(政基)、

松田三郎（義基）、

松田五郎、(政泰?)、

松田平三郎、

松田右衛門太郎、

河村三郎義秀、（秀高の子）

河村太郎時秀、義秀の子、母は曾我祐信の娘。秀基・行秀の兄。

河村秀基、義秀の子。母は曾我祐信の娘。時秀の弟、行秀の兄。

河村四郎行秀、母は曾我祐信の娘。時秀・秀基の弟。

河村四郎秀清、(千鶴丸、山城権守秀高の四男))

河村籐四郎、

河村小四郎、

波多野小次郎定経、（宇治氏の系統?）

波多野兵衛次郎定康、（義職—義定—義泰—定康）

波多野五郎義景、（遠義の子、義通の弟）

波多野出雲次郎左衛門尉時光、（義重の子）

波多野出雲五郎左衛門尉宣時、（義重の子）

波多野六郎義泰、（義職—義定—義泰「中嶋太郎義泰」）

波多野六郎左衛門尉、（義職? 又は義重の系統?）

波多野中務次郎経朝、二郎、(忠綱の子) 1182年～1219年頃源頼家・実朝両将軍に仕え、両将軍の近習となった。

1205年～1224年頃第2代執権北条義時から葦毛馬(河洲号)を拝領。

波多野庄が本拠。父(忠綱)と共に和田合戦などで活躍。

1227年、後鳥羽上皇の三宮と称する謀判人の伴党45人を経朝が捕えて、美作に一村を賜った。

嘉祿三年(1227)三月大十九日戊辰。波多野次郎経朝 抽賞 被る。美作國に於て後鳥羽上皇の三宮と称する謀判人の伴党45人を経朝が捕えて、一村を賜はる。

是、忠節を黙止被難き之故也。美作國(岡山県の北東部、西は備中(びっちゅう)、北は因幡(いなば)・伯耆(ほうき)、南は備前(びぜん)に接している)に於て一村を賜はるは、中国地方への波多野一族進出の一步である。

# 松田家の歴史

波多野七郎、

波多野三郎義定、〔義通の孫(宇治氏)〕

波多野義典、(～1219) 義定の子、承久元年二月六日、伊勢神宮からの帰途、矢作宿  
で公暁の事件を知り、自殺。

波多野八郎朝義 (小磯氏)

波多野五郎秀頼 (經朝の子)

波多野三郎盛通、3 卷元暦元年(1184)五月十五日

波多野小次郎宣経 (義重の子の宣時の子孫?)

波多野中務次郎忠綱 (義通の子)、1182 年～1219 年頃源頼家・実朝両将軍に仕えた。

波多野次郎朝定 (朝貞、義定の子、弥次郎、中嶋太郎義泰の兄弟)

母は伊勢神宮外宮の神人荒木田盛長の娘(藤原俊兼の娘とも)。

波多野小六郎、一族であるが、未詳。

廣澤余三(実方、遠義の子)

廣澤左衛門の尉實高 (実方の子)

廣澤三郎左衛門尉(実能、実義、実高の子)

波多野四郎經家 (遠義の子、大友氏)、4 卷元暦二年(1185)四月十四日

大友左近将監能直 (經家の子、義直)

(1172～1223 近藤能成の子?母は波多野經家の娘。中原親能の養子。)

頼朝の寵臣だった。

大友能直の娘、(～1230)、北条朝時の室で、光時・時章らの母。

大友左衛門尉

大友豊前前司

大友大炊助親秀 (能直の子)

沼田小太郎(家基)

沼田佐藤太

沼田太郎 (家信)

## 備前松田家 花押



松田権守元隆  
備前松田家 7 代



松田権守元隆



松田左近将監元成  
備前松田家 8 代



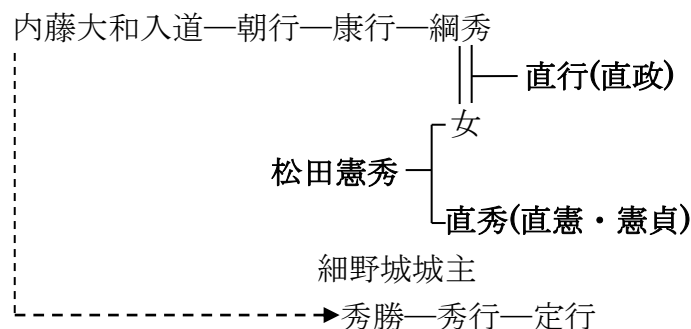
松田左近将監元陸  
備前松田家 10 代

# 松田家の歴史

## 津久井城城主 内藤氏と松田家

内藤氏は津久井城を本拠とし、もと関東管領上杉氏の家臣であった。戦国期の前期には山内上杉氏に属した。内藤氏は大和入道—朝行—康行—綱秀—直行と続いたが、津久井の地域は「敵知行半所務」と呼ばれ、勢力圏が複雑に入り組んでいた。甲州・相州・武蔵と三国の接する要衝で、特に甲斐の武田氏と緊張状態にある時にはその重要性は高まった。永禄12年(1569)、武田信玄は関東に乱入し小田原を囲んだが小田原城を攻めきれず、帰国時には津久井を通っている。これに対し滝山城主北条氏照・鉢形城主北条氏邦を中心とする北条軍が追撃を試みたが、小田原からの後詰めが遅れたこともあって三増峠で大敗を喫した。この時、津久井城は三増峠とはすぐ近く城の南方3kmにあったが、津久井衆は何故か出動していない。元来国境付近にあった津久井では甲州勢に同心する者もあり、対武田戦に団結して出動出来なかったと言われているが、信玄は小幡重貞を津久井城に向かわせて内藤氏の出撃を牽制し、内藤氏は津久井城に釘付けにされ戦いには参加出来なかったとも云われている。朝行以降は北条氏に属したが、北条氏と内藤氏の関係は通常の主従関係とは少し違った様である。天正十二年(1584)北条氏は憲秀配下の山角定勝を津久井城に派遣した。その時に北条氏から山角定勝に出した注意書きが興味深い。「津久井城はあくまで内藤氏の居城なので、内藤氏の言うことを聞くように」と北条氏は山角定勝に繰り返し命じている。内藤氏は独自に津久井領を支配する領主でもあった。内藤氏のことを無視して北条氏の命令だけを聞く様な関係ではなかった様である。北条氏と内藤氏を取り持ったのが松田憲秀である。内藤綱秀に憲秀の娘を嫁がせ、一族となり、憲秀を介して北条氏に属したと思われる。それは小田原城開城後に松田直秀と内藤直行は共に高野山に北条氏直公のお供をし、その後も共に前田氏に仕官(200石)した事を見れば松田家と内藤氏の関係が、密接であった事が分かる。

(津久井城城主)



## 内藤氏略系図 (津久井城城主) 家紋下り藤ノ丸

内藤大和入道—朝行—康行—大和守政之(綱秀)—助右衛門直政(直行)—六郎衛門(不明)—助右衛門直孝—市郎兵衛直将—助右衛門(不明)—九郎衛門直安—久右衛門直定—半蔵良直—四郎兵衛良政—静吾源政忠

## 津久井・城山町一帯が神奈川県では無く、山梨県？

津久井の地域は「敵知行半所務」であり、松田憲秀の娘と内藤綱秀の婚姻によって、内藤氏は北条氏に属したが、婚姻が無ければ内藤氏が武田氏に付いていた可能性も有り、現在の津久井・城山町一帯は神奈川県では無く、山梨県に属していた可能性もあった。

# 松田家の歴史

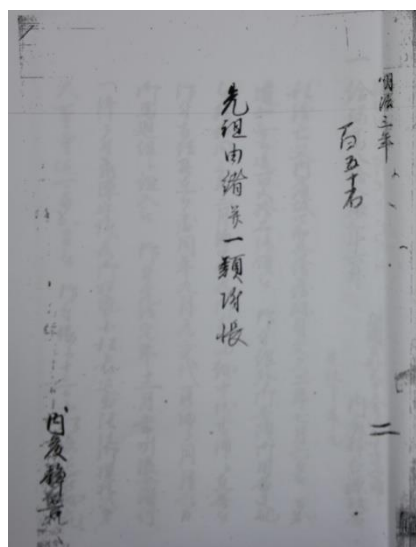
津久井城趾（松田家の屋上にて撮影）



太鼓曲輪南斜面の石垣



飯縄曲輪下堀切



先祖由緒并一類附帳  
(内藤静吾源政忠書)



金沢市 高岸寺(内藤家菩提寺)

# 松田家の歴史

## 大石氏と松田家

大石為重は関東管領・上杉憲顕に仕えた。大石為重は男子が無く、1334年木曾義仲の子孫木曾信重を養子とした。信重は1351年南朝方の新田義宗との笛吹峠の合戦で先陣を勤める等、手柄を立て、1356年武蔵国入間・多摩の両郡に13郷を得て多摩に移住し、二宮(あきる野市)に館を構えた。1384年信重は浄福寺城(八王子市下恩方町)を築城した。応永年間には叔父の大石能重(為重)が武蔵・上野・伊豆各国守護上杉能憲に仕えて守護代を務めた。1458年大石顕重が高月城(八王子市高月町)を築城し、二宮から本拠を移した。大石定重は1521年滝山城(八王子市丹木町)を築城し、高月城から滝山城に本拠を移した。

北条氏が関東に進出し、1546年北条氏康が河越夜戦で大勝し、扇谷上杉氏は滅亡し、関東管領山内上杉氏は武蔵国から排除され、越後国の長尾景虎を頼って没落した。主家の没落により大石定久は北条氏照を娘・比佐の婿に迎えて、自らは戸倉に隠居し、氏照が滝山城主となった。その後武田信玄軍二万に攻められた時に滝山城の防御体制が不十分であることを痛感し、八王子城を築城した。

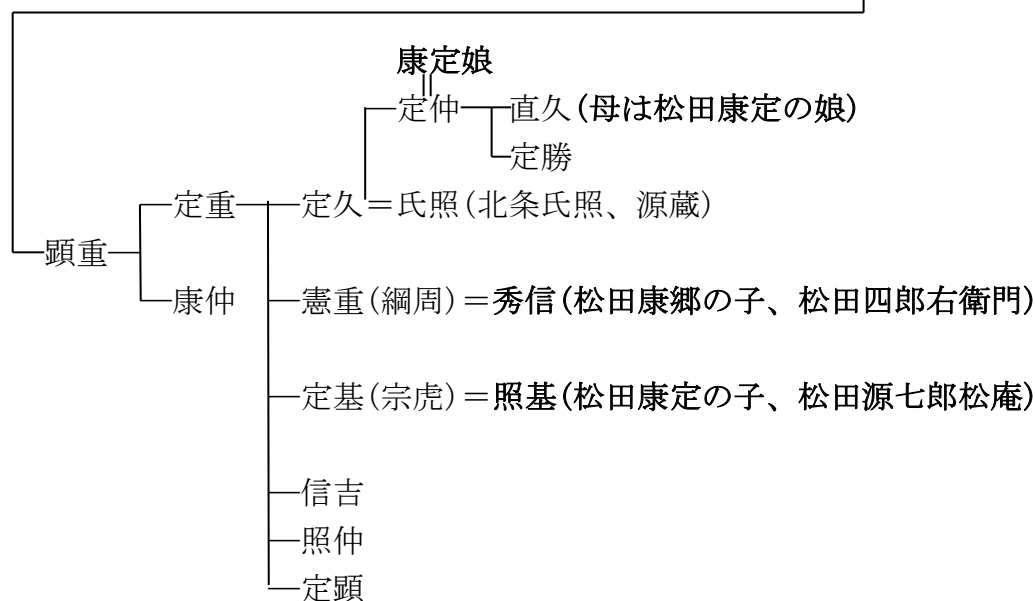
また、氏照の補佐役として松田家からも松田康郷の子**松田四郎右衛門秀信**が大石憲重の養子となり大石秀信(源七郎、遠江守)と称し、松田康定の子**松田源七郎照基**は大石定基の養子となり大石照基と称した。また松田康定の娘が大石定仲の室となり、直久を儲けた。領地支配を守護上杉氏に頼り過ぎた大石氏は守護代として領地支配に失敗し、戦国大名への脱却が出来なかった。八王子城は関東屈指の山城であったが、未完成の内に攻撃され、脆くも落城した。

北条氏が没落すると、大石定久の実子大石定仲と養子大石定勝は徳川氏に仕え、八王子千人同心としてその子孫は明治時代を迎えた。また大石照基は松田惣四郎松庵と復姓し、結城秀康に2300石で召抱えられた(秀康郷給帳)。加賀藩寛文侍帳にある松田四郎右衛門は有賀松田家松田四郎右衛門憲俊で、大石秀信(松田四郎右衛門)とは別人である。

### 大石氏略系図

木曾義仲—基宗—宗仲—為教—義任—信重(大石家に養子)

大石為重=信重—憲重—憲儀—房重



※ 大石氏関係の古文書は P.371~373

# 松田家の歴史

## 備前松田家

松田有常の子孫に盛朝がおり、1221年承久の乱に髓兵し、その功によって鎌倉幕府より備前の国に領土を賜った。これは「太平記」十四を見ると、武家方の将に「備前国守護松田十郎盛朝」が記載されている。

南北朝の頃には備前国の守護の位置に在ることがわかる。盛朝は備前の半国、御野、津高、赤坂、磐梨の四郡を領していた。その後、

松田元国が南朝方の新田義貞に付き、軍功により正慶2年（1333）備前国御（三）野郡矢坂に住居。（松田賢二氏備前松田家系譜）

鎌倉末期から南北朝の騒乱期に活躍し、足利尊氏に 加担して富山城を築き、その後津高郡金川に本拠地を移し、応仁の乱（1467～77）に改めて富山城を再構築したのが松田元隆である。

赤松傘下の浦上と松田家は備前の守護代として東と西で勢力を拡大し、浦上の配下の宇喜多能家（よしいえ、（直家の祖父）らに何度も仕掛けられるが、その都度跳ね返し戦国大名に成長する。以後、元喬—元泰—元方—元運—元澄と続くが、元澄は1467年応仁の乱では赤松方に加わり、山名氏の追い落としに功を挙げて赤松氏被官となり、旧領を安堵されて、伊福郷の守護代的地位となった。又、この伊福郷松田家と金川松田家とは一族であり、併存し協力し合ってきた。後に、備前松田家として一本化された。

時を経て宇喜多直家は浦上の配下から少しずつ離れ、松田勢と対峙するほどに成長し、対浦上で元成の時に主家の赤松氏や守護代の浦上氏と対立するようになり、文明一二年に本拠地を金川城に移した。富山城は弟の元親が守った。第二次福岡合戦の時に元成、元親兄弟は討ち死にし、元勝が跡を継いだときに、戦国大名化し、之によって浦上氏と確執が深まる。この中で、富山城の戦略的価値は高まり松田家一族や重臣が城主を務めた。永禄十一年に宇喜多直家に金川城が攻められ元輝・元賢は討ち死にし落城、富山城主の松田盛明は備中に逃れた。

時代が下り、松田元澄の代になり応仁元年（1467）、応仁の乱が起こると東軍の赤松氏方につき、西軍の山名氏の追い落としに功績があり、赤松氏の被官になり、伊福郷の守護代に相当する地位になった。その子、元成は再び文明12年（1480）に金川城に移り、富山城には弟筋に支城として守らせ、戦国の世を戦って行った。文明15年（1483）頃には備前国西部に確固とした力を築いていたためか、守護の赤松氏から警戒され、赤松政則の追討の命を受けた浦上則宗の一族の浦上則国に攻め込まれることとなり、松田元成は山名氏に援軍を要請した。

赤松方の小鴨大和守の居る備前福岡城を文明16年（1484）正月に落とした。勢いに乗った元成は備前国を掌中に収めるため、文明16年（1484）2月、浦上則国の居城三石城を落とすため東へ進撃するが、途中の吉井川東の天王原で浦上勢と遭遇し合戦に及ぶも大敗し、退却する途中、浦上勢に追いつかれ磐梨郡弥上村山で自害した。

その後も松田家は西備前に君臨し浦上氏と対立した。時が下り、松田元隆の代には、足利義晴のもと大永2年（1522）京の都で所司代に就任するなどしていたが、享禄4年（1531）、天王寺合戦で味方の浦上村宗とともに討死。孫の松田元輝の代になると宇喜多直家の力が強大になり、子の松田元賢に直家の娘と婚姻させ、姻戚関係を結ぶ、更には当時美作・備中への影響力が強かった尼子晴久が浦上氏を攻撃すべく備前へ侵攻してきた際には、尼子方に属するなどによって勢力の維持を図ろうとしたが、永禄11年（1568）宇喜多直家に主力の重臣である宇垣与右衛門を謀殺され、さらに直家の調略により虎倉城主の伊賀久隆に寝返られ、同年7月、宇喜多勢に金川城を攻撃され元輝は伊賀久隆の鉄砲隊により討死。元賢も金川城落城により落ち延



# 松田家の歴史

びる途中、伊賀勢の伏兵により討死。元賢の弟の松田元脩は備中に逃れ（一説には因幡の山名豊國に仕えたという）、備前松田家の宗家流は滅亡した。

ただ、庶流家である西谷城主の新庄松田家は浦上氏に従う事で宗家滅亡後も存続し、主に美作南部の戦線で功を挙げた。天正2年(1574)から表面化した浦上宗景と宇喜多直家の抗争の際には新庄松田家は宗景方について戦い、翌天正3年(1575)に浦上宗景が追放され宇喜多直家が実権を握ると新庄松田家は浦上方だった事もあって所領を削られたものの存続は許された。以後、宇喜多政権でも新庄松田家は在地の土豪として小さいながら勢力を保っていたが、宇喜多氏の改易後は帰農を余儀なくされた。

**松田定近**、(938～969) 32歳没、藤原安房守定近、下野国寒川郡生井庄(栃木県小山市寒川・上生井・下生井)のうち、3,500貫を分家・分地して網戸(小山市網戸)に住んだ。

**松田元治**(常治)、(995～1043) 49歳没、武蔵守、妻：山口太郎兼豊女

1028年、源頼信に従い、奥州に赴き、戦功をたてて、播磨国佐用郡(兵庫県北部、赤松則村の領地) 500貫加増、計3500貫を領す。

1031年、関白頼道に「元」の一字を賜って、常治より元治に改めた。

**松田元家**、(1012～1072) 61歳没 権之佐、500貫加増、計4000貫安房守、

父：妻：仁科大和守則国女

藤原安房守元家は「前九年の役」のときに源頼義に従い、奥州に赴き、康平5年(1062)8月17日阿部頼時・貞任らを衣川で200余騎を討った功により、丹後国多紀天田(京都府福知山市付近?)のうち、3000貫を賜った。

**松田元久**、(1037～1092) 56歳没 大造 権守、

源義家の奥州征伐に軍功有り、武蔵波多野に3000貫を加領。

父：妻：座内大監物重光女

藤原安房権守元久は「後三年の役」のときに源義家に従い、奥州に赴き、戦功をたてて、寛治元年(1087)12月26日武蔵国波多野(武蔵国に波多野という地名は無いので相模国波多野と推定)に3000貫を加領された。

**松田元武**、(1057～1105) 49歳没、光千代、美作守、

父：妻：山岡主馬明持女、

**松田元昭**、(1082～1142) 62歳没、孫治郎、左近将監ト改

父：妻：神宮寺職人女、

**松田元高**(高近)、(1099～1159) 61歳而討死、孫治郎、権守ト改、

父：妻：高宮佐渡甫信女

藤原安房権守元高は「平治の乱」のときに源義朝に従い平治元年(1159)12月26日京都六条河原で、平清盛の軍勢と戦って討死にした。このとき一族は後難を避けて吉野に隠棲した。

**松田元達**、(1155～1205) 51歳没、治郎左衛門、靱負ト改、4000貫、鎌倉に引越、

父：妻：橋本駿河守道久女

藤原武蔵守元達 文治元年(1185)3月下野国寒川郡生井庄 3500貫、播磨国佐用郡 2500貫、丹後国多紀天田郷 2000貫などの従来からの領地と、武蔵国入間郡(埼玉県入間市・新座市・朝霞市・志木市など)に国替えされ、10000貫に加増された。なを、波多野・松田の領地は従来通りであった。1187年春、鎌倉に館を設け移住した。

**松田元朝**、(1175～1218) 行寿44歳而没、孫治郎、武蔵守、経蔵寺に葬、

父：妻：土岐九郎左衛門景謹女

**松田元貞**、(1125～1181) 57歳没、孫治郎、安房守、波多野義通の女と婚姻、

# 松田家の歴史

父：妻：波多野次郎義通女(相模国波多野城主)

藤原安房守元貞、はじめ木曾義仲に従い、戦功をたてたが、源頼朝に従い、源平の合戦などで活躍した。その功により相模国松田庄に 2500 貫を賜った。松田を称す。

**松田元信**、(1193～1247) 行寿54歳而没、吉丸、松田弾正少弼ト改、清観寺に葬、

父：妻：佐伯玄番武供女、

藤原武蔵守元信、健保 7 年(1219)春、鎌倉より松田郷に移住して、**松田姓を名乗**った。波多野有常が松田姓を名乗ってから 31 年後である。

**松田重通**、(1195～?) 治郎太郎、松田郷に住む、

**松田常基**、弥三郎、1246年幕府台所に入った泥棒を逮捕。 (吾妻鏡)

**松田元遠**、(1212～1301) 90 歳没、六左衛門、丹波守、妙観寺に葬、

父：妻：斎藤十郎経明女、

1275年、**松田元遠**、武州加奈川に館(七曲城)を築く。

1276年武州加奈川を加領され七曲山之麓に館を築く。 (備前松田家系図)

**松田元連**、(1251～1290) 40 歳没、孫治郎、**左近将監**ト改、父：妻：小幡玄番斎景女

1281 年、松田左近将監元連、「弘安の役」に兵を率いて九州に出兵した。

(備前松田家系図)

1285年、霜月騒動に、**松田元連**父子が北条貞時方にて活躍し、備前国伊福郷を加領される。

(備前松田家系図)

**松田元澄(元保)**、(1259～1310) 52歳没、孫左衛門、**左近将監**ト改、妙観寺に葬、

父：妻：小俣庄左衛門嵩則女、

1285 年霜月騒動の時北条貞時方にて武功により備前国伊福郷に加領。

元連の次男(長男と同名)、元連の長男元保(25 歳)と三男の元倍(18 歳)は霜月騒動

で活躍したが、討ち死にした。その勲功として備前国伊福郷(岡山市中心部・JR 岡山駅付近)を加領された。

**松田元知**、(1261～1285) 25歳討死、久兵衛、

**松田元倍**、(1268～1285) 18歳討死、惣左衛門、

**松田盛経**、三郎太郎**盛経**、地頭職、父：経基(常基)、

1304年、**松田三郎太郎盛経**父子、渋谷定頼らが八塔寺境界相論の現地調査を幕府の要請があったが、盛経は病気を理由に子の**朝経**を派遣した。

備前初見

(八塔寺文書)

**松田元國**、(1280～1339) 63歳没、孫治郎、権守ト改、

御野郡矢板に住む、奥坂山に葬送、

**備前松田家初代**、父：元保 妻：堀兵庫頭高之女、

鎌倉幕府崩壊の直前、神奈川七曲山城より備前国伊福郷に移転して鎌倉 9 代将軍：

守邦親王に奉仕し、その功によって備前国守護に任ぜられた。居城として富山城を築いた。

1313年、備前国伊福郷を賜る、富山城主となる、

1335年、備前国伊福郷に津島郷を加領され、加奈川から国替え。

1339年、足利尊氏に属す。

**松田元賢(元喬)**、(1303～1344) 43歳没、孫次郎、権守、**左近将監**ト改、

**備前松田家 2 代**、富山城築城、蓮昌寺開基、津高郡高 38300 石を領す。

父：元国 妻：高崎蔵人高行女、大阪山に葬送、

1344年、松田元賢は城を脱出するが、発見され討死。 (備前軍記) (中国兵乱記)

1345年、大覚大僧正筆の法華題目石に**松田元喬**の百ヶ日忌の諡名あり。(曹源寺大光院)

松田左近将監元喬は南北朝時代前期の延元 4 年・暦応 2 年(1339)御野郡金川郷(岡山県御津町)の臥龍山に城を築いた。



# 松田家の歴史

松田朝経、父：盛経、三郎太郎盛経の子、  
尼阿、松田七郎三郎の母、

1330年、備前国福輪寺村(伊福郷の隣)をめぐって尼阿と長田庄地頭伊賀氏との間に相論有り。(岡山県史編年史料)

松田弥四郎、1333年、和気郡日笠荘に濫妨。(壬生文書)

松田胤秀、孫二郎胤秀、盛朝の父？

松田重経、七郎太郎重経、盛朝の父？

松田盛朝、松田十郎盛朝、(備前守護へ)父：盛経？重経？胤秀？

1334年、松田盛朝、備前国守護職になる。(太平記・大徳寺文書ほか)

1334年、松田盛朝らが和気の宿の合戦で足利方に味方する。(太平記)

1334年、山名時氏・楠木正儀たちが京都を攻め、足利義詮は美濃に逃れた。赤松則祐は、備前守護松田盛朝らとともに上洛し、将軍尊氏も鎌倉から戻ってきたので、山名時氏は本国伯耆へ撤退した。

松田義泰、七郎義泰、1344年、幕府五番引付衆(東備郡村誌)

松田重泰、七郎重泰、父：義泰

松田右近入道、1344年、幕府五番引付衆(東備郡村誌)

松田盛信、松田備前二郎左衛門盛信、父：重泰、

松田信重、備前守信重、父：重泰、

1346年、松田備前守信重の注進により、神南合戦の功で大森弥七に足利義詮の感状が与えられる。(一宮文書)

松田小次郎、

1348年、楠木正行との四条畷の戦いの小旗一揆の高師直軍に名が見える。(太平記)

松田元泰、(1318~1372)左近将監、54歳没、孫治郎、備前治郎、後権守与改、  
父：元喬(重奏)、妻：赤松伊予守定則女、

備前松田家3代、臥龍山の峰に城を築き、家臣横井丹後を置く。

南北朝の合戦で度々手柄を立て足利尊氏に二つ引きの紋を許される。道林寺開基。  
四条畷合戦にて功有り、

松田重明、松田左近将監重明、肥後守重明、父：重奏、左近将監元泰と同一人物。

1340年、石見国増田氏軍忠状に侍所松田左近将監(重明)の記載。(1340~1348年)

1345年、松田左近将監重朝・重明の名が見える。(東備郡村誌)

1348年、楠木正行との四条畷の戦いの小旗一揆の高師直軍に名が見える。(太平記)

1351年、観応の擾乱中の兵庫小清水合戦に高師直軍。(太平記)

1352年、松田左近将監らが、鹿田庄に対し違乱、押妨。(興福寺文書)

1357年、吉備津宮南門客神社棟上に社務松田肥後守重明の名見える。(吉備津神社文書)

松田親遠、(1305~?)彦治郎、八幡城を守る、

松田元高、(1320~1345)26歳病没、孫左衛門、

松田七郎五郎、松田舎弟七郎五郎、重明の弟、父：重奏

1348年、楠木正行との四条畷の戦いの小旗一揆の高師直軍に名が見える。(太平記)

松田太郎三郎、(盛経/経朝?)松田子息太郎三郎、父：盛経/経基？、

1347年、高師直軍の交名中に名が見える。(太平記)

1348年、楠木正行との四条畷の戦いの小旗一揆の高師直軍に名が見える。(太平記)

松田盛信、次郎左衛門豊後、備前次郎、次郎、鹿田庄、父：盛朝/重泰、

1342年、松田備前二郎左衛門盛信の名見える。(天龍寺造営記録)

1347年、高師直軍の交名中に名が見える。(太平記)

1348年、松田次郎左衛門尉らが額安寺領金岡荘に討ち入る。(額安寺文書)

1348年、楠木正行との四条畷の戦いの小旗一揆の高師直軍に名が見える。(太平記)

# 松田家の歴史

- 1349年、松田次郎左衛門、楠木正行との四条畷の戦いで討死。 (櫻雲記)
- 松田信重、備前三郎、備前守、備前守護、父：盛朝/重泰
- 1352年、足利義詮御判御教書の宛先に、松田備前守とあり。 (八坂神社文書)
- 1362年、山名義理の備前侵攻に対し、備前守護松田信重陣を構えたが、一族をはじめ福林寺氏らの国人衆、城に籠って出陣せず。 (太平記)
- 1364年、備前金岡東荘で河村入道の濫妨を訴える文書中に松田備前守が見える。 (額安寺文書)
- 1375年、足利義満の石清水参詣警護に松田備前守(信重)・松田彦次郎(詮秀)見える。 (花宮三代記)
- 松田益秀、松田豊前守藤原益秀、次郎左衛門尉、次郎左衛門豊後 父：盛信
- 1386年、松田備前守備前国散在の幕府遵行使として藤原益秀御判あり。 (建内文書)
- 松田詮秀、又次郎(詮秀)、次郎左衛門尉、彦次郎(詮秀)、鹿田庄、父：益秀、奉公衆。
- 1375年、足利義満の石清水参詣警護に松田備前守(信重)・松田彦次郎(詮秀)見える。 (花宮三代記)
- 足利義満直衣始に衛府侍 (花宮三代記)
- 1378年、幕府的始に松田兵庫介(義重)、松田又次郎(詮秀)が射手として見える。 (御的日記)
- 1379年、松田次郎左衛門尉(詮秀)衛府侍と見える。 (花宮三代記)
- 1380年、足利義満直衣始に松田次郎左衛門尉(詮秀)衛府侍と見える。
- 足利義満着陣並びに一位拝賀に松田次郎左衛門尉(詮秀)・松田丹後四郎衛府侍と見える。 (花宮三代記)
- 1381年、足利義満白馬節会外弁参仕に松田備前守(吉信) 帯刀・松田次郎左衛門尉(詮秀)衛府と見える。 (花宮三代記)
- 1392年、相国寺供養に、松田上野彦次郎藤原満重帯刀・松田三郎藤原満朝帯刀・松田次郎左衛門尉藤原詮秀帯刀見える。 (相国寺供養記)
- 1394年、足利義満、岩清水放生会上卿参仕に松田次郎左衛門尉(詮秀)衛府、松田彦次郎(重秀)衛府と見える。 (兼治宿称記)
- 1397年、幕府的始に松田次郎左衛門尉詮忠(秀?) 射手見える。 (御的日記)
- 1398年、幕府的始に松田次郎左衛門尉詮秀射手見える。 (御的日記)
- 1399年、幕府的始に松田次郎左衛門尉詮秀射手見える。 (御的日記)
- 足利義満右大将拝賀、衛府侍 (花宮三代記)
- 松田盛元、松田備前守盛元、豊後守盛元、  
松田元行、(1324~1342) 18歳而疾没、惣右衛門、  
松田小五郎、備前国御家人
- 1330年、備前国御家人松田小五郎、摂津国猪名荘の下司職に狼藉を加える。 (岡山県史) (東大寺文書)
- 松田弾正小弼、
- 1336年、菊池合戦事少弐氏の陣に参じる。 (太平記)
- 松田七郎、(義泰/重泰?)
- 足利義教、岩清水放生会上卿参仕に、衛府侍。 (広橋家記録)
- 1344年、幕府五番引付衆。 (東備郡村誌)
- 松田弥四郎、
- 1359年、和気郡日笠荘に濫妨。 (壬生文書)
- 松田元房(元親)、(1349~1369/1398?) 22歳没?、孫次郎、左近将監、奥坂山に葬送、  
備前松田家4代、元賢(元喬/元澄?)の次男、兄の元泰の養子、妻：岡平太左衛門盛甫女、  
播磨の赤松氏に属し足利義満の招きで、上方へ度々出陣して手柄を立てた。

# 松田家の歴史

松田元方、(もとのり)(1350～1394) 45歳没、元方入道、奥坂山に葬送、  
備前松田家5代、左近将監ト改、金川城内に道林寺開基、  
智仁勇の三徳を兼ね備えた名将、父：元房(元親)

松田元運(もとかず)(元足)、(1369～1416) 48歳没、孫治郎、治郎、左近将監ト改、  
父：元方、妻：松田三良左衛門武照女、  
備前松田家6代、源妙寺開基(妙国寺に属したが廃寺)、福輪寺(後の妙善寺)に葬、  
霜月騒動に、松田元連父子が北条貞時方にて活躍し、備前国伊福郷をされる。

(備前松田家系図)

松田秀方、(1372～1404) 32歳病死、治良右衛門、

松田吉信、備前権守(吉信)、備前一宮社務、本殿を建立。父：信重

1379年、足利義満右大将拝賀に松田備前権守(吉信)帯刀、

松田次郎左衛門尉(詮秀)衛府侍と見える (花営三代記)

1381年、足利義満白馬節会外弁参仕に松田備前守(吉信)帯刀・松田次郎左衛門

尉(詮秀)衛府と見える。 (花営三代記)

1390年、吉備津宮正殿上葺棟札写しに、社務松田備前守吉信見える。(吉備津神社文書)

石清水八幡宮宛の幕府命令書に松田備前守が見える。(離宮八幡宮文書)

石清水八幡宮大山崎神人等申状中に松田備前守吉信見える。(離宮八幡宮文書)

松田義重、出雲守、兵庫介(義重)、上野介、山口兵庫上野、父：信重

1378年、幕府的始に射手 (御的日記)

1380年、幕府的始に射手 (御的日記)

1381年、幕府的始に射手 (御的日記)

1382年、幕府的始に射手 (御的日記)

1383年、幕府的始に射手 (御的日記)

1384年、幕府的始に射手 (御的日記)

松田満重、(重秀)上野彦次郎藤原満重、彦次郎重秀、父：義重、足利義満から偏諱、

1392年、細川頼之の相国寺供養に、松田上野彦次郎藤原満重帯刀・松田三郎藤原  
満朝帯刀・松田次郎左衛門尉藤原詮秀帯刀見える。(相国寺供養記)

1394年、足利義満、の日枝神社参詣に供奉に松田満重(上野彦次郎)衛府、松田満  
朝(備前三郎)衛府と見える。(日枝社室町殿御社参記)

1394年、足利義満、岩清水放生会上卿参仕に松田次郎左衛門尉(詮秀)衛府、松田  
彦次郎(重秀)衛府と見える。(兼治宿称記)

1396年、幕府的始に松田彦次郎(重秀)射手見える。(御的日記)

松田満朝、三郎藤原満朝、備前三郎、左衛門尉満朝、佐伯庄代官、父：吉信

1392年、相国寺供養に、松田上野彦次郎藤原満重帯刀・松田三郎藤原満朝帯刀・  
松田次郎左衛門尉藤原詮秀帯刀見える。(相国寺供養記)

1394年、足利義満、の日枝神社参詣に供奉に松田満重(上野彦次郎)衛府、松田満  
朝(備前三郎)衛府と見える。(日枝社室町殿御社参記)

1403年、足利義持、岩清水参詣に松田三郎左衛門尉満朝見える。(八幡社参記)

1405年、吉備津神社仮葺御遷宮に、社務松田三郎左衛門尉満朝見える。本殿を建立。  
足利義満から偏諱、(吉備津神社文書)

松田掃部入道

松田明秀、豊前守藤原明秀、

1395年、備前国定林寺事、道号高山、戒名道秀、(長寿開祖雑実録)

妙善、松田元運妻

1411年、大覚大僧正筆法華題目石に妙善(松田元運妻)名あり。(曹源寺大光院)

# 松田家の歴史

松田信郷、松田七郎左衛門尉信郷、

1412年、足利義持、岩清水放生会上卿参仕に、  
松田七郎左衛門尉信郷衛府見える。(京都御所東山御文庫記録)

松田持秀、藤原持秀、彦次郎、豊後、鹿田庄代官、父：詮秀、足利義持からの偏諱、

1419年、鹿田庄代官職請負事、松田藤原持秀見える。(九条家日記)

松田上野介、(義重？/義重の子？)

1421年、足利義持の伊勢代参に、松田上野介見える。(花宮三代記)

松田朝郷、松田十郎藤原朝郷、父：吉信

1421年、吉備津神社仮殿御遷宮に、社務松田十郎藤原朝郷見える。(吉備津神社文書)

松田親秀、(1421～?) 惣右衛門、富山城之守、

元成の三男、松田惣左衛門親秀、富山城城主(岡山市矢板)。土光敏夫(経団連会長)  
は親秀の子孫である。

松田元資、(1424～?) 元成の四男、(文明8年)1476年戸倉山之砦に移る、

松田元満、(1426～?) 元成の弟、妙国寺初代住職、花光院元満

元成の五男、文明12年(1480)出家。日精と改め、のち権大僧都二位法印となり、  
妙国寺を開山した。

松田但馬守

1426年、松田但馬守の名見える。(備中国総社宮造宮帳写)

松田三郎、備前守家。

1433年、備中国吉備津宮社領代官職松田三郎云々あり。(足利將軍御内書並奉書留)

松田藤栄、松田遠江入道道栄、遠江守藤栄

1467 応仁元年、松田遠江入道道栄が備前国守護代もしくは守護使として、赤松氏から  
の遵行をうけて、打ち渡しを行ったことが『西大寺文書』『備前難波文書』などにみえ  
る。赤松氏の支配機構のなかに組織されていたようだ。

浦上則宗ら松田遠江入道(藤栄)宛連署奉書あり。(西大寺文書)

松田遠江入道道栄は、遠江守藤栄と同一人物と思われ、藤栄は「備前松田系図」などの  
松田諸系図にはみえないが、実在の人物と思われ、備前松田氏は応仁期の赤松氏が備  
前守護として再興したのに伴って、台頭したものと考えられる。

松田元隆、(元澄)、(1390～1473) 83歳没、孫次郎、権守、豊後、

備前松田家7代、仁義英雄の武将、妙善寺内に葬送、赤坂郡領有、

父：元運、妻：金光備前守女、

1468年、松田元隆(元澄)、山名氏排除に功有り、赤松氏より備前守護代(西備前  
一帯)を任される。(備前軍記)

春福岡城攻撃、鹿田・菅の一族・松田元隆・難波行豊など参加。(備前軍記)

赤松政則・浦上則宗が、山名の守護代小嶋大和守を追い、浦上則宗を守護代、  
西方四郡を松田元隆の管轄とする。松田元隆は富山城・金川城に拠る。(備前軍記)

備前一宮太守殿宛の松田権守元隆任判下知状文書あり。(一宮文書)

松田元斎、(1393～1467) 74歳討死、次郎左衛門尉、治良佐衛門、元隆(元澄)の弟、

1467年、応仁の乱で次郎左衛門尉(元斎)が足利將軍の三條殿を守備中の戦闘(京  
都相国寺合戦)で討死。(応仁記)

松田信朝、松田六郎左衛門尉信朝、松田上野介信朝、父：上野介

1430年、足利義教右大将拜賀に、松田六郎左衛門尉信朝帯刀・松田豊前次郎左衛門  
尉持郷衛府侍が見える。(建内文書)

1430年、松田鹿田次郎左衛門尉(持郷) 帯刀・松田六郎左衛門尉(信朝) 衛府侍  
が見える。(普光院殿御元服記)

# 松田家の歴史

1438年、足利義教、岩清水放生会上卿参仕に、鹿田六郎左衛門尉信朝、帯刀と見える。  
(八幡社参記)

1444～1448年、幕府文安年中番帳の一番衆松田上野介(信朝)・松田次郎左衛門尉(持郷)・松田孫三郎(賢朝)・松田七郎左衛門尉が見える。二番衆に松田修理亮が見える。  
(蜷川家文書)

1449年、足利義政参内始めに松田三郎左衛門尉賢信帯刀・松田上野介信朝帯刀が見える。  
(経覚私要鈔)

1450年、足利義政直衣始に松田上野介信朝衛府侍と見える。  
(康富記)

1451～1454年、幕府永享以来番帳に、一番衆松田上野介(信朝)・松田三郎左衛門尉(賢信)・松田豊前守(持郷)・松田次郎左衛門尉(元秀)・御台相伴松田六郎左衛門(信貞)が見える。  
(蜷川家文書)

1458年、足利義政上御所作事始見物に、松田上野介信朝(御伴衆)が見える。  
(大膳大夫在盛記)

1465年、日野富子出産に、産所番頭に松田上野介信朝・松田次左(元秀)が見える。  
(親元日記)

松田賢朝、弥三郎賢朝、孫三郎(賢朝)、父：満朝

1441年、可真郷代官預り松田弥三郎賢朝(小番衆なり)が、万里小路家領可真郷の代官となる。  
(建内文書)

1444～1448年、幕府文安年中番帳の一番衆松田上野介(信朝)・松田次郎左衛門尉(持郷)・松田孫三郎(賢朝)・松田七郎左衛門尉が見える。二番衆に松田修理亮が見える。  
(蜷川家文書)

松田持郷、豊前次郎左衛門尉持郷、鹿田次郎左衛門尉持郷、豊前守、父：持秀

1437年、後花園天皇室町殿行幸に松田次郎左衛門尉持郷、布衣侍。  
(室町殿行幸記)

1438年、足利義教、岩清水放生会上卿参仕に、鹿田次郎左衛門尉持郷、衛府侍と見える。  
(八幡社参記)

1444～1448年、幕府文安年中番帳の一番衆松田上野介(信朝)・松田次郎左衛門尉(持郷)・松田孫三郎(賢朝)・松田七郎左衛門尉が見える。二番衆に松田修理亮が見える。  
(蜷川家文書)

1451～1454年、幕府永享以来番帳に、一番衆松田上野介(信朝)・松田三郎左衛門尉(賢信)・松田豊前守(持郷)・松田次郎左衛門尉(元秀)・御台相伴松田六郎左衛門(信貞)が見える。  
(蜷川家文書)

1457年、鹿田庄年貢の事に、松田豊前守(持郷)云々。  
(大乘院寺社雑事記)

松田元秀、(1419～1475)、次郎左衛門尉(元秀)、松田次左(元秀)、豊後、父：持郷

奉公衆、足利義政の側近、西谷城を築く、鹿田家。

1450年、足利義政直衣始に松田上野介信朝・次郎左衛門尉元秀衛府侍と見える。  
(康富記)

1451～1454年、幕府永享以来番帳に、一番衆松田上野介(信朝)・松田三郎左衛門尉(賢信)・松田豊前守(持郷)・松田次郎左衛門尉(元秀)・御台相伴松田六郎左衛門(信貞)が見える。  
(蜷川家文書)

1456年、足利義政右大将拝賀に、松田上野介信朝(帯刀)・松田次郎左衛門尉元秀(衛府侍)と見える。  
(二階堂文書)

1456年、造内裏段銭京済に、松田次郎左衛門尉(元秀)が見える。  
(造内裏段銭並国役引付)

1458年、足利義政任内大臣参内に、松田次郎左衛門尉元秀(衛府)が見える。  
(報恩院文書)

1459年、備前国新田庄の事で、松田次郎左衛門尉(元秀)云々あり。  
(蔭涼軒目録)

1465年、日野富子出産に、産所番頭に松田上野介信朝・松田次左(元秀)が見える。  
(親元日記)

1475年、元成の次男、文明7年春、西谷城(御津町新庄)を築き、城主となった。

# 松田家の歴史

松田氏秀、

1441年、足利義勝の將軍継嗣に対する万里小路時房の祝言を聞く。(建内文書)

松田七郎左衛門尉、

1444～1448年、幕府文安年中番帳の一番衆松田上野介(信朝)・松田次郎左衛門尉(持郷)・松田孫三郎(賢朝)・松田七郎左衛門尉が見える。二番衆に松田修理亮が見える。(蜷川家文書)

松田修理亮、

1444～1448年、幕府文安年中番帳の一番衆松田上野介(信朝)・松田次郎左衛門尉(持郷)・松田孫三郎(賢朝)・松田七郎左衛門尉が見える。二番衆に松田修理亮が見える。(蜷川家文書)

松田賢信、松田三郎左衛門尉賢信、鹿田庄代官、父：賢朝

1449年、足利義政参内始めに松田三郎左衛門尉賢信帯刀・松田上野介信朝帯刀が見える。(経覚私要鈔)

1451～1454年、幕府永享以来番帳に、一番衆松田上野介(信朝)・松田三郎左衛門尉(賢信)・松田豊前守(持郷)・松田次郎左衛門尉(元秀)・御台相伴松田六郎左衛門(信貞)が見える。(蜷川家文書)

1465年、足利義政南都下向に、松田三郎左衛門尉(賢信)見える。(斎藤親基日記)

1478年、足利義政一家細川政元亭御成、松田六郎左衛門尉(信貞)・鹿田庄代官松田豊前賢信が見える。(伊勢家譜)

1479年、日野富子伊勢参宮松田御伴、内裏作事奉行に松田賢信が見える。(長興宿祢記)

1479年、鹿田庄代官事、松田豊前賢信が関白近衛政家邸を訪ねる。(後法興院記)

1486年、松田上野守信貞(上州、山口殿、号悦岩、永忻居士)・松田次郎左衛門尉(尚郷、左金吾)・松田備前守(賢信、長松居士、号壽岳)・松田不遠軒・松田左馬助などの名が見える。(蔭蔗軒目録)

松田信貞、六郎左衛門尉、上野介(信貞)、山口殿、上野前司、永忻居士、父：信朝

1451～1454年、幕府永享以来番帳に、一番衆松田上野介(信朝)・松田三郎左衛門尉(賢信)・松田豊前守(持郷)・松田次郎左衛門尉(元秀)・御台相伴松田六郎左衛門(信貞)が見える。(蜷川家文書)

1457年、足利義政北野社参に、松田六郎左衛門(信貞)が見える。(北野天満宮史料)

1465年、足利義政石清水放生会上卿参仕に、松田六郎左衛門信貞が見える。(斎藤親基日記)

1478年、足利義政一家細川政元亭御成、松田六郎左衛門尉(信貞)・鹿田庄代官松田豊前賢信が見える。(伊勢家譜)

1486年、足利義政夫妻東山殿御成に松田上野介(信貞)御伴に見える。(蔭涼軒目録)

1486年、足利義尚右大将拝賀に、松田上野前司信貞(帯刀)・松田次郎左衛門尉尚郷(衛府)見える。(親長日記・長興宿弥記ほか)

1486年、松田上野守信貞(上州、山口殿、号悦岩、永忻居士)・松田次郎左衛門尉(尚郷、左金吾)・松田備前守(賢信、長松居士、号壽岳)・松田不遠軒・松田左馬助などの名が見える。(蔭蔗軒目録)

1487年、足利義尚直衣始に、松田上野前司信貞(帯刀)見える。(蔭涼軒目録)

1487年、足利義尚近江出陣に、松田上野介(信貞)・松田次郎左衛門尉(尚郷)・松田七郎三郎・松田七郎右衛門尉・松田六郎以上一番衆に、松田甲斐守二番衆に見える。(常德院殿動座當時在陣着到)

松田次郎左衛門尉、

1467年、応仁の乱に備前の松田次郎左衛門尉、足利義政に最後の盃を頂戴し洛中合戦にて討死。(応仁別記)



# 松田家の歴史

## 松田備前守

応仁文明の乱(1467~1477)で守護代尼子氏との戦いに、**松田備前守**の名見える。  
(佐々木文書)

## 松田彦太郎

1473年、足利義尚参内始に、**松田彦太郎**(帯刀)見える。(畠山家譜)

## 松田元貞、松田彦次郎元貞、父：元澄

1474年、**松田彦次郎**宛、作州玉鉾構他の働きで浦上宗景の感状三通あり。  
(備前松田家文書)

1474年、幕府から小早川元平の備後高山城救援を命じられる。

1477年、応仁の乱終る。

## 松田惣領又次郎

足利将軍が蜷川氏に発注を指示した複数通の文書に、**松田又次郎**と**松田左近将監**が  
結託して、守護赤松氏に反抗している様子が記載あり。(蜷川家文書)

## 松田元販、左近将監家。

## 松田宮内、

## 松田能登守

備前国居都庄代官の記事中に、**松田能登守**殿宛の文書あり。

**松田清信**、三郎右衛門清信、**清信**は足利幕府の刀の鑑定奉行で、第6代将軍足利義教の側  
近の一人であったが、刀剣の鑑定に関して抜群の才能をもっているのを見て、本阿弥妙  
本が長女に娶せて養子にした。これが本阿弥中興の祖といわれる本光である。

**松田元成**、(1416~1484) 69歳没、孫次郎、左近将監ト改、備前松田家中興の祖、

**備前松田家8代**、英雄豪傑の武将、妙国寺を開基(寛文年中に廃寺)、

父：元隆(元澄)、妻：安藤対馬守正茂女、不受布施日蓮宗を信仰し、領内の僧俗も全て改宗さ  
せようとして、承知しない者は追放したり寺社を焼き払った。

松田左近将監元成、室は出雲の尼子義久の娘。文明5年(1473)父：元隆(元澄)の没  
後金川城主となった。文明9年(1477)室町幕府の所司代を務め、備前松田家中  
興の祖と称され、全盛期であった。

1475年、三野新庄公文職を伊勢氏から購入(政所部賦銘引付/室町幕府引付史料集成上)

1477年、京都所司代を勤、

1480年、**松田元成**、居城を富山城から金川城に移し、金川惣町中年貢永代免除す。

1481年、金川に日向山妙国寺建立し、花光院日精こと弟**元満**を住職とする。

(備前松田家系図)

1483年、**松田元成**、備後守護山名俊豊に援兵を乞い、約三千騎備前に進発し、

福岡城を囲む。

(備前軍記)

1484年、福岡合戦に、松田一党に**左近将監元成**・家臣に宮内備中守・**藤田(鹿田)**

**備前守**・同掃部亮・子息次郎・同姓大炊助・同駿河守・その子息民部

**大輔**・同修理亮・同孫四郎・同参河守・同越中守・同又三郎・伊賀修

理亮・佐藤式部・大村弥五郎などが見える。(備前軍記)・(中国兵乱記)

1484年、福岡城陥落**松田元成**は、一気に三石城攻めに深追いした為、浦上勢の逆

襲に合い山の池で自害。大村出雲盛恒は、雲州尼子氏より帰国し元成

の自害を知り、其の地で殉死した。(備前軍記)

**松田尚郷**、**勝田(尚郷)**、**惣領又次郎**、**鹿田又次郎**、**次郎左衛門尉**、**鹿田庄代官**、父：元秀

日野富子の近習、

1480年、日野富子北野社参籠に、**松田勝田(尚郷)**御伴見える。(蜷川家文書)

1481年、興福寺備前国小岡庄、鹿田庄請人の沙汰文書の中に、**松田惣領又次郎**年貢未進取次  
ぎに**松田備前守**の名が見える。(大乘院寺社雑記)

1482年、備前国鹿田庄代官松田某、細川氏の威をかりて赤松方押領に対する記事の中に**備前  
国松田**は公方近習也と見える。(大乘院寺社雑記)

# 松田家の歴史

- 1483年、足利将軍が蜷川氏に発注を指示した複数通の文書に、**松田又次郎**と**松田左近将監**が結託して、守護赤松氏に反抗している様子が記載あり (蜷川家文書)
- 1484年、**松田新庄殿**(伊勢参拜)、**松田又次郎**・**松田隠州**(隠岐守、泉州大鳥庄処務)、**松田宮内殿**などの名が見える。(蔗軒目録)
- 1485年、日野富子伊勢参宮に、**松田鹿田又次郎(尚郷)**御伴衆に見える。(親元日記)
- 1486年、足利義尚右大将拜賀に、**松田上野前司信貞(帯刀)**・**松田次郎左衛門尉尚郷(衛府)**見える。(親長日記・長興宿弥記ほか)
- 1487年、足利義尚近江出陣に、**松田上野介(信貞)**・**松田次郎左衛門尉(尚郷)**・**松田七郎三郎**・**松田七郎右衛門尉**・**松田六郎**以上一番衆に、**松田甲斐守**二番衆に見える。(常德院殿動座当時在陣着到)
- 1494年、幕府番帳に、**松田上野介**・**松田六郎**・**松田又次郎**・**松田備前守**の名が見える。(東山殿時代大名外様付け久下文書)
- 松田又次郎**、**鹿田家**。  
1494年、幕府番帳に、名が見える。(東山殿時代大名外様付け久下文書)
- 松田備前守**、  
1494年、幕府番帳に、名が見える。(東山殿時代大名外様付け久下文書)
- 松田(鹿田)掃部亮**、  
1484年、福岡合戦に、名が見える。(備前軍記)・(中国兵乱記)
- 松田(鹿田)次郎**、**鹿田備前守の子息次郎**、  
1484年、福岡合戦に、名が見える。(備前軍記)・(中国兵乱記)
- 松田(鹿田)大炊助**、  
1484年、福岡合戦に、名が見える。(備前軍記)・(中国兵乱記)
- 松田(鹿田)駿河守**、  
1484年、福岡合戦に、名が見える。(備前軍記)・(中国兵乱記)
- 松田(鹿田)大輔**、**鹿田駿河守の子息民部大輔**、  
1484年、福岡合戦に、名が見える。(備前軍記)・(中国兵乱記)
- 松田(鹿田)修理亮**、**鹿田駿河守の子息修理亮**、  
1484年、福岡合戦に、名が見える。(備前軍記)・(中国兵乱記)
- 松田(鹿田)孫四郎**、**鹿田駿河守の子息孫四郎**、  
1484年、福岡合戦に、名が見える。(備前軍記)・(中国兵乱記)
- 松田(鹿田)参河守**、**鹿田駿河守の子息参河守**、  
1484年、福岡合戦に、名が見える。(備前軍記)・(中国兵乱記)
- 松田(鹿田)越中守**、**鹿田駿河守の子息越中守**、  
1484年、福岡合戦に、名が見える。(備前軍記)・(中国兵乱記)
- 松田(鹿田)又三郎**、**鹿田駿河守の子息又三郎**、  
1484年、福岡合戦に、名が見える。(備前軍記)・(中国兵乱記)
- 松田元親**、父：元隆(元澄)、元成の弟、惣右衛門、  
1484年、福岡合戦で、弓の名手**松田元親**が、奮戦ののち討死。(備前軍記)
- 松田元氏**、**松田次郎左衛門元氏**、元隆(元澄/元陸)の六男、相模松田家「頼重」参照  
松田次郎左衛門元氏、康正2年(1456)29歳の時、備中国賀陽(カヤ：岡山市総社市・高梁市を含む一帯)の伊勢新九郎長氏(北条早雲)と共に武者修行の遍歴に出た。  
元氏は足利将軍の命令で京都より下向し、頼重と改名し、相模松田家8代を継ぎ、北条早雲公に息子の頼秀と共に協力して小田原城を攻め落とし、北条氏の家老となった。(岡山県史)
- 松田不遠軒**、  
1486年、**松田上野守信貞**(上州、山口殿、号悦岩、永忻居士)・**松田次郎左衛門尉(尚郷、左金吾)**・**松田備前守(賢信、長松居士、号壽岳)**・**松田不遠軒**・**松田左馬助**などの名が見える。(蔭蔗軒目録)

# 松田家の歴史

松田左馬助、

1486年、松田上野守信貞(山口殿)・松田次郎左衛門尉(尚郷、左金吾)・松田備前守(賢信)・松田不遠軒・松田左馬助などの名が見える。(蔭蔗軒目録)

松田新庄

1484年、松田新庄殿(伊勢参拝)、松田又次郎・松田隠州(隠岐守、泉州大鳥庄処務)、松田宮内殿などの名が見える。(蔗軒目録)

松田隠州、(隠岐守、泉州大鳥庄処務)、

1484年、松田新庄殿(伊勢参拝)、松田又次郎・松田隠州(隠岐守、泉州大鳥庄処務)、松田宮内殿などの名が見える。(蔗軒目録)

松田宮内、

1484年、松田新庄殿(伊勢参拝)、松田又次郎・松田隠州(隠岐守、泉州大鳥庄処務)、松田宮内殿などの名が見える。(蔗軒目録)

松田七郎三郎

1487年、足利義尚近江出陣に、松田上野介(信貞)・松田次郎左衛門尉(尚郷)・松田七郎三郎・松田七郎右衛門尉・松田六郎以上一番衆に、松田甲斐守二番衆に見える。(常德院殿動座当時在陣着到)

松田七郎右衛門尉

1487年、足利義尚近江出陣に、松田上野介(信貞)・松田次郎左衛門尉(尚郷)・松田七郎三郎・松田七郎右衛門尉・松田六郎以上一番衆に、松田甲斐守二番衆に見える。(常德院殿動座当時在陣着到)

松田六郎

1487年、足利義尚近江出陣に、松田上野介(信貞)・松田次郎左衛門尉(尚郷)・松田七郎三郎・松田七郎右衛門尉・松田六郎以上一番衆に、松田甲斐守二番衆に見える。(常德院殿動座当時在陣着到)

1494年、幕府番帳に、松田上野介・松田六郎・松田又次郎・松田備前守の名が見える。(東山殿時代大名外様付け久下文書)

松田甲斐守

1487年、足利義尚近江出陣に、松田上野介(信貞)・松田次郎左衛門尉(尚郷)・松田七郎三郎・松田七郎右衛門尉・松田六郎以上一番衆に、松田甲斐守二番衆に見える。(常德院殿動座当時在陣着到)

松田能登守

1493年、備前国居都庄代官の記事中に、松田能登守殿宛の文書あり。

松田孫四郎、

松田元勝(元藤)、(1452～1510) 59歳没、孫次郎、左近将監、豊後守元藤。

備前松田家9代、孫次郎元藤、勇猛の武将、父：元成、妻：三条右大臣実光公女。

三条西実隆に金川城を「玉松城」と名付けて頂いた。2009年は玉松城命名より500年となる。

元成の無縫塔と殉死した大村出雲の宝綬印塔を矢上に立て雲山大乗寺を開基(1666年池田光政により廃寺)、妙国寺に葬送、

この時代は中国・四国は大いに乱れて、合戦は止まず、出雲に尼子氏、安芸に毛利氏、備後に山名氏、四国に細川氏、播磨に赤松氏、備中に三村氏、東備前に浦上氏、西備前に松田家などが覇権を争っていた。

1484年、京都妙覚寺十二世日寮が、松田孫次郎元藤(元勝)に曼荼羅授与あり。(岡山松田理一氏所蔵)

1485年 山名氏と協力して赤松政則方浦上則国を敗死させた。

1487年、善応寺住持職並末寺の事で、松田元藤の折紙あり。(一宮文書)

1495年、左近将監(元勝)、八朔の祝を幕府に進上。

# 松田家の歴史

1497年、備前守護代浦上宗助一千騎をもって、**松田元勝**の富山城を囲む。(備前軍記)  
浦上宗助が松田惣右衛門掬る富山城に来襲した為元勝は金川城を出撃し、宗助を挟撃し、危機に陥れるが浦上家臣宇喜多能家により撃退された。

1502年、**松田元勝**が大村・横井・伊賀らの諸将を派遣し、宇喜多能家と矢津(穴廿)で戦う。(備前軍記)

1502年、**松田元勝**、宇喜多能家と牧石河原で戦う。(備前軍記)

1503年 旭川合戦で浦上村宗・宇喜多能家と戦う。松田元勝が京都所司代であった時公卿三条西実隆から玉松の称を授かり、以後金川城は玉松城と称した。

1504年、**松田豊後守**、八朔の祝を幕府に進上。

1507年、**備前国守護松田**、身延参詣の時、海長寺に立ち寄る。(日海記)

1509年、三条西実隆より、**松田**(金川)城名に麗水・玉松の二書を賜る。(実隆公記)

1510年、足利幕府、備前国馬屋郷の年賀督促状に、**松田豊後守親元(元藤)**馬屋郷代官の書状あり。(御状引付)

1511年、足利義植御内書に、**松田豊後守元藤**が見える。(大日本史料)

**松田元陸(元隆)**(1472~1535) 63歳没、孫治郎、孫三郎元陸、左近将監、

**備前松田家10代**、父：**元勝(元藤)**、妻：笹部主計頭脩正女、

1519年、蜷川新右衛門尉御宿所の件で、**松田元陸**が見える。(蜷川家文書)

1519年、**松田元陸**、八朔の祝を幕府に進上。

1521年、御料所馬矢郷公用未進の件で、**松田孫三郎元陸**が見える。(蜷川家文書)

1521年、**松田元陸**、「当城」の堅固で各地で戦勝のことを幕府より賞される。

1522年、**松田元陸**が將軍足利義晴の命に従い、妙覚寺俗別当に就く。(備前松田家系図)  
將軍足利義晴により京都所司代に命じられる。

1524年、京都妙覚寺十六世日賞が、王城高辻宮法花堂妙覚寺俗別当**松田左近将監藤原元隆**法名蓮孝に曼荼羅授与。(野々口大村氏所蔵)

1525年、僧日現(池上本門寺十一世)筆記に備前国金河妙国寺嚴宿院に在宿の頃、**松田左近将監元隆**帰依云々あり。(身延文庫手鑑)

1531年、**松田元陸(元隆)**、浦上村宗と共に天王寺合戦にて討死。(身延文庫)

松田元成以来、浦上氏と幾多の戦いを続けてきた松田家だが松田元陸の代からは和睦し、一転して友好的な関係を築いていた。

## 松田三郎

1540年、**松田三郎**が、御料所佐伯庄を知行する。可真郷の公用進納に關与する松田家被官の横井氏明が見える。(八坂神社文書)

**松田元盛**、(1499~1558) (1449?~1535?)59歳没、孫次郎、左近将監、元祐入道蓮盛、

**備前松田家11代**、父：**元陸(元隆)**、妻：宇喜多庄兵衛長勝女、妙国寺に葬送、

1556年、**松田元盛**が、日蓮宗改宗を迫り、金山寺や吉備津宮を焼き払う。

**松田彦次郎**、新庄家。

1564年、**松田彦次郎**宛、作州玉鉾構他の働きで浦上宗景の感状三通あり。(備前松田家文書)

**松田元輝**、(1514~1568) 元輝入道蓮忠、孫治郎、左近将監。

**備前松田家12代**、父：元盛

1551年、尼子晴久の備前侵攻に際しては尼子晴久に従って浦上政宗と連携して、浦上宗景と戦った。尼子晴久が病没すると、浦上宗景は備前から徐々に尼子氏、浦上政宗方の勢力を駆逐して備前での影響力を強めた。松田家麾下の龍ノ口城主穰所元常が宇喜多直家の計略によって、岡清三郎に謀殺された。和田城主和田伊織も敗走させられて苦戦を余儀なくされた。

1562年、松田元輝は苦境を脱するため浦上宗景と和議を結び、宇喜多直家の長女を嫡男松

# 松田家の歴史

田元賢の室に迎えた。松田家家臣の伊賀久隆にも妹を嫁がせ、浦上氏との連携を図った。松田元輝は嫡男松田元賢ともに熱狂的な日蓮宗徒で、読経に明け暮れたり、領内の他宗の神社に改宗を迫り、断れば打ち壊して焼き払うなどの乱行とも取れる行動を繰り返し次第に領内の民衆は荒れ、家臣団との関係に亀裂が生じるようになった。

1568年、松田家家臣の宇垣与右衛門が宇喜多家に謀殺されるが、松田元輝は宇喜多直家との友好関係悪化を恐れ黙認する。この松田元輝の処置に激怒した宇垣与右衛門の兄、宇垣市郎兵衛は松田元輝に絶縁状を突きつけて出奔し松田元賢、松田元輝の子(?~1568) 松田孫次郎元賢は1562年宇喜多直家の娘を室に迎えた。1562年、浦上家臣宇喜多直家からの和議の申し入れを父松田元輝が受け入れ、浦上家との和睦が成立した際に宇喜多直家の娘を娶り婚姻関係を結ぶ。

1568年、宇喜多直家の攻撃を受け、松田家家臣の宇垣与右衛門が宇喜多氏によって謀殺されると、浦上氏との関係も再び悪化する。宇喜多直家は調略によって寝返らせていた伊賀久隆に金川城を包囲させると松田元賢も父松田元輝とともに籠城した。籠城中、父松田元輝が討死すると、父に替わって指揮を執ったがまもなく弟松田元脩とともに落延びた。総大将が離脱した事により部下の多くも金川城から退去、程なくして伊賀久隆に城門の守

りを破られ、金川城は落城した。松田元賢は、落延びる途中、虎倉城主であった家臣伊賀久隆に裏切られ、その銃弾を受けて討ち死にした。室の宇喜多直家の娘も程なくして自害した。  
(備前軍記) (中国兵乱記)

松田元吉、(1516~?) 彦五良、妻：金村重良右衛門宗正室。

松田元喬(元賢)、(1531~1568) 37歳落城討死、孫治郎。

備前松田家13代、永禄11年(1568)7月7日備前松田家滅亡。

1562年、浦上宗景の下知にて、宇喜多直家の娘を松田元賢に嫁がせ、松田家の天神山城出仕を任じる。  
(備前軍記)

1568年、虎倉城主伊賀左衛門久隆之為に下田村に而討死。

1568年、松田元賢は城を脱出するが、発見され討死。元賢の弟盛明は備中に落ち延びる。  
(備前軍記) (中国兵乱記)

松田左近将監元賢、室は宇喜多直家の娘。永禄11年(1568)7月7日宇喜多直家に依って滅ぼされる。備前に移ってから13代270余年に渡って活躍した備前松田家が終焉した。

松田盛明(元脩)、(1542~1616) 69歳没、後に元脩ト改、左衛門、讃岐松田家元祖。

山城源四良と改亦十郎ト改、父：元輝、元賢の弟、

1568年、松田元賢は城を脱出するが、発見され討死。元賢の弟盛明は備中に落ち延びる。  
(備前軍記) (中国兵乱記)

約235年続いたが金川城宇喜多直家に攻められ落城。備前松田家滅ぶ。

1568年、金川城落城のさい、雑兵に紛れ兄松田元賢とは別行動で脱出した。金川城攻略と同時に富山城にも宇喜多と伊賀の兵が仕向けられ、城主不在の富山城は金川城落城に併せて既に然したる抵抗も出来ずに落城した。松田家家臣の多くは金川城で命を落とすか宇喜多直家に恭順の意を示すかの行動をしていた。これにより兵を集めて反抗するどころか行く宛てすら無くなってしまった松田元脩は止む無く宇喜多直家の手を逃れるため備中国へと落延びた。

1582年、山城源四郎元脩は宇喜多直家に滅ぼされた後、周防の毛利氏に寄寓したが、高松城(岡山市高松)の羽柴秀吉による水攻めの際、毛利氏の命を受けて出陣し、城主清水宗治に

# 松田家の歴史

属して戦功をたてたが、城主清水宗治は舟上で切腹した。その後、宇喜多秀春は天正12年(1584)父直家の不義を悔いて、松田元脩に800石を与え、小串城(岡山市小串)の城主とした。文禄元年(1592)豊臣秀吉の朝鮮出兵に際して、松田元脩・元起親子は渡海して3年後に帰国した。

慶長5年(1600)9月5日関ヶ原の合戦では毛利氏も宇喜多氏も西軍の有力な武将であった為に、それに従って小串城を守っていた。しかし西軍は敗北し、備前松田家の一族郎党や家臣は備前や備中の山野に隠れて、名前を変え、百姓などになった。元脩は山城源四郎と名を変え、一族郎党25人を従えて讃岐国香西(高松市香西本町)に渡った。香西では名族香西伊賀守と植松左内に庇護され、堀之内に館を構えたのが慶長7年(1602)であった。

松田元貞 磐梨郡西谷城主。通称久兵衛。

1575年、松田元貞は浦上宗景に属して天神山城に籠城した。

松田元房、父：元泰

松田元光、父：元盛

松田元起、(?~1633) 山城平治良、後亦十郎ト改。

山城平次郎元起は高松城主：生駒一正(17万石)より植松左内を通じて家臣になるように勧誘があったが、丁重に辞退した。

松田元明、(?~1664) (長男) 山城甚右衛門、宅間村へ引越。詫間松田家元祖。

山城甚右衛門尉、父：元輝、妻：備前富山六兵衛重信女。

山城甚右衛門元明、生駒藩の命を受け、西讃岐の詫間浦(香川県詫間町)の新田及び塩田開発の為に移住した。高松の香西には弟の伝内を残した。延宝3年(1675)1月1日三代(元脩・元起・元明)に渡って名乗ってきた山城姓を松田姓に復した。

正徳4年(1714)丸亀藩主京極公が讃岐松田家に7日間滞在されて以降度々来訪された。これは松田家の当主が茶道、香道、詩歌などを嗜む文化人であったことに依るものと思われる。

天保6年(1835)丸亀6代藩主京極高朗公の許可を得て、総面積14万坪の塩田の構築に巨万の富を投じて4年の歳月を費やし、数千の人夫を動員して完成させた。

明治以降、塩田や農地の開発改良、琴平銀行を創設のほか、道路改修など公共事業に貢献して、香川県の多額納税者第一位になっている。

松田傳内、(次男) 高松香西祖

松田元重、(?~1698) 利兵衛、日蓮宗不受布施派弾圧により寛文6年丸亀宗泉寺に籍を置き 内信法華として地下に潜り厳しい弾圧下に歴代不受布施を堅守す。

松田元清、(1644~1485) 42歳没、(次男) 山城吉右衛門尉、松田姓に復す。

父：元明 妻：園部角佐衛門国広女八重。

松田元直、(?~1716) 利兵衛。

松田元真、(?~1747) (長男)利左衛門。

松田元實、(?~1785) 利左衛門。

松田元崇、(?~1808) (長男)利左衛門。

松田元固、(1671~1718) 48歳没、妻：辻玄庵女蔦。

松田半七、(?~1704) 40歳没、(元清養子) 新屋祖、辻次良右衛門祐由三男。

松田元教、(1813~1854) 42歳没、妻：丸亀藩勘定奉行原田傳情蔵女。





# 松田家の歴史

近習・奉公衆の松田家リスト(1) 東京大学史料編纂所教授 榎原雅治氏作成

年月日	行事	人名	備考	種別	出典
1342年康永 1.12.5	天龍寺造営供養	松田備前二郎左衛門盛信		B	天龍寺造営記録
1375年永和 1.3.27	義満石清水参詣	松田備前守		A	花營三代記 (群書類従雑部)
1375年永和 1.4.25	石清水警護	松田備前守 松田彦次郎		A B?	花營三代記 (群書類従雑部)
1378年永和 4.1.23	的始	松田兵庫助 松田又次郎		B	御の日記 (続群書類従武家部)
1379年康暦 1.7.25	義満右大将拜賀	松田備前権守 松田次郎左衛門尉	帯刀 衛府侍	A B	花營三代記
1380年康暦 2.1.20	義満直衣始	松田次郎左衛門尉	衛府侍	B	花營三代記
1380年康暦 2.1.25	的始	松田兵庫助			花營三代記
1380年康暦 2.12.25	義満着陣	松田次郎左衛門尉 松田丹後四郎	衛府 衛府	B	花營三代記
1381年康暦 3.1.7	義満白馬節会参仕	松田備前守 松田次郎左衛門 松田丹後八郎満秀	帯刀 衛府 衛府	A B	花營三代記
1381年康暦 3.1.13	義満参内	松田丹後八郎(満秀)	衛府		花營三代記
1381年康暦 3.1.23	的始	松田上野介		C	御の日記
1382年永徳 2.1.25	的始	松田上野介		C	御の日記
1383年永徳 3.1.17	的始	松田上野介		C	御の日記
1384年永徳 4.1.17	的始	松田上野介		C	御の日記
1391年明德 2.3.28	義満石清水参詣	松田平内左衛門尉氏秀	衛府侍		八幡社参記 (群書類従神祇部)
1392年明德 3.8.20	相国寺供養	松田上野彦次郎藤原満重 松田三郎藤原満朝 松田次郎左衛門尉藤原詮秀	帯刀 帯刀 帯刀	C A B	相国寺供養記 (群書類従积家部)
1393年明德 4.8.15	義満石清水放生会参仕	松田次郎左衛門尉 松田彦次郎(重秀)	衛府 衛府	B B?	兼治宿祢記
1394年応永 1.9.11	義満日吉社参詣	松田備前三郎藤原満朝 松田上野彦次郎藤原満重	衛府侍 衛府侍	A C	日吉社室町殿社参記
1396年応永 3.1.17	的始	松田彦次郎重秀		B?	御の日記
1397年応永 4.1.17	的始	松田次郎左衛門尉詮忠		B	御の日記
1398年応永 5.1.17	的始	松田次郎左衛門尉詮秀		B	御の日記
1399年応永 6.1.17	的始	松田次郎左衛門尉		B	御の日記
1403年応永 10.3.28	義持石清水参詣	松田三郎左衛門尉満朝	衛府侍	A	八幡社参記 (群書類従神祇部)
1412年応永 19.8.15	義持石清水放生会参仕	松田七郎左衛門尉信郷	衛府	D	京都御所東山御文庫記録乙 67
1421年応永 28.11.13	義持伊勢代参	松田上野介		C	花營三代記

種別欄：A：三郎・備前守流、B：次郎・豊前守流、  
C 六郎・上野介流、D 七郎・左近将監流

# 松田家の歴史

近習・奉公衆の松田家リスト(2) 東京大学史料編纂所教授 榎原雅治氏作成

1429年正長 2.3.9	義教元服	松田鹿田次郎左衛門尉 (持郷?) 松田六郎左衛門尉 (信朝?)	衛府侍 帯刀	B C	普広院殿御元服記 (群書類従武家部)
1430年永享 2.7.25	義教大将拝賀	松田六郎左衛門尉信朝 松田豊前次郎左衛門尉 持郷	帯刀 衛府侍	C B	建内記・公名公記
1437年永享 9.10.21	室町第行幸	松田次郎左衛門尉 持郷	布衣侍	B	室町殿行幸記 (群書類従帝王部)
1438年永享 10.8.15	義教石清水放生 会参仕	松田六郎左衛門尉信朝 松田次郎左衛門尉持郷	帯刀 衛府侍	C B	八幡社参記
1440年永享 12.11.15	義政石清水参詣	松田六郎左衛門尉信朝	布衣侍	C	八幡社参記
1444~1449 文安年間	文安年中番帳	松田上野介(信朝) 松田二郎左衛門尉 松田孫三郎(賢朝?) 松田七郎左衛門尉 松田修理亮	一番 一番 一番 一番 二番	C B A D	蜷川家文書
1450年宝徳 2.7.5	義政大納言拝賀	松田上野介信朝 松田次郎左衛門尉元秀	衛府侍 衛府侍	C B	康富記
1451~1454年 宝徳~享徳頃	永享以来番帳	松田上野介(信朝) 松田三郎左衛門尉 (賢朝?) 松田豊前守(持郷?) 松田次郎左衛門尉 (元秀) 松田七郎左衛門尉 松田助太郎 松田六郎左衛門(信貞?)	一番 一番 一番 一番 一番 二番 御台相伴	C A B B D C	群書類従雑部
1456年康正 2.7.25	義政大将拝賀	松田上野介信朝 松田次郎左衛門尉 (元秀)	帯刀 衛府侍	C B	二階堂文書
1456年康正 2	造内裏段銭并 国役引付	松田次郎左衛門尉 (元秀)		B	造内裏段銭并 国役引付
1457年康正 3.2.25	義政北野社参詣	松田六郎左衛門信貞	布衣侍	C	北野天満宮史料 古記録
1458年長祿 2.7.25	義政参内	松田次郎左衛門元秀	衛府	B	報恩院文書
1465年寛正 6.5.8	御産所番頭 (日野富子出産)	松田上野(信朝?) 松田次左(元秀?)		C B	親元日記
1465年寛正 6.8.15	義政石清水放生 会参仕	松田六郎左衛門尉信貞	帯刀	C	齋藤親基日記
1479年文明 11.	義政一家北野社 参詣	松田勝田(元成?)	御伴衆	B	蜷川家文書
1486年文明 18.7.29	義尚右納将拝賀	松田上野前司信貞 松田次郎左衛門尉尚郷	帯刀 衛府	C B	親長卿記・ 長興御弥記
1487年文明 19.1.25	義尚直衣始	松田上野前司(信貞?)	帯刀	C	蔭涼軒目録

# 松田家の歴史

近習・奉公衆の松田家リスト(3) 東京大学史料編纂所教授 榎原雅治氏作成

1487年長享1.9.12	義尚出陣	[備前]松田上野介 (信貞?)	一番	C	常德院殿御動座 当時在陣着到
		[備前]松田次郎左衛門 尉(尚郷?)	一番	B	
		[備前]松田七郎三郎	一番	D	
		[備前]松田七郎右衛門 尉	一番	D	
		松田六郎	一番	C	
		松田甲斐守	二番		
1492年明応元年頃	東山殿時代大名 外様附	松田上野介	一番	C	今谷明「室町幕府解 体過程の研究」所収
		松田六郎	一番	C	
		松田又次郎	一番	B	
		松田備前守	一番	A	
		松田甲斐入道	二番		
		松田源次郎	二番		

種別欄：A：三郎・備前守流、B：次郎・豊前守流、  
C六郎・上野介流、D七郎・左近将監流

## 足利将軍からの偏諱

偏諱(へんき)とは、将軍や大名が、功績のあった家臣や元服する者に自分の名の  
一字を与える事で、名誉な事であった。

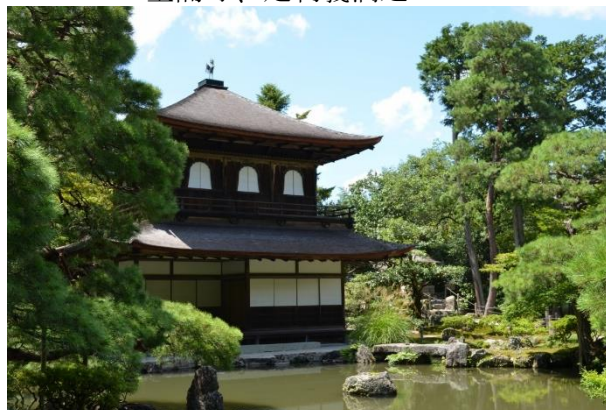
詮は2代将軍足利義詮からの偏諱、  
松田詮秀、松田詮忠、  
満は3代将軍足利義満からの偏諱、  
松田満重、松田満朝、松田満秀、  
持は4代将軍足利義持からの偏諱、  
松田持秀、松田持郷、  
尚は9代将軍足利義尚からの偏諱、  
松田尚郷、



金閣寺、足利義満建立

## 足利将軍

初代	足利尊氏	九代	足利義尚
二代	足利義詮	十代	足利義材
三代	足利義満	十一代	足利義澄
四代	足利義持	再	義植(義材)
五代	足利義量	十二代	足利義晴
六代	足利義教	十三代	足利義輝
七代	足利義勝	十四代	足利義栄
八代	足利義政	十五代	足利義昭



銀閣寺、足利義政建立





# 松田家の歴史

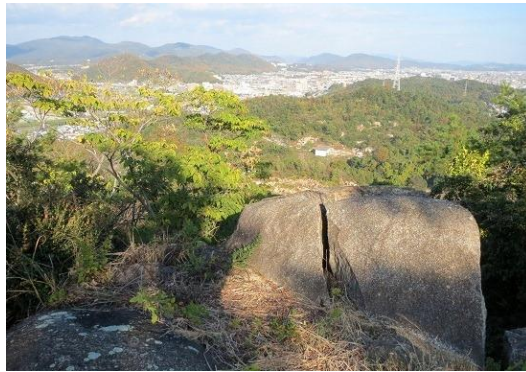
## 備前松田家と城

**富山城** 岡山県岡山市矢板東町。仁和元年(885)に富山重興がここに築城したことに始まる。富山氏は今日の矢坂山の頂上部(小字)を富山と称しここに居住して富山姓を名乗ったことに始まると言われる。応仁元年(1467)富山長頼は松田元隆の攻城を受けて自害し富山氏は滅亡した。元隆はこの城を改修し居城した。文明15年(1483)元隆の子・元成は居城を金川城に移し、元成の弟・親秀が城主となった。親秀の没後は松田氏の重臣・横井土佐守が居城した。備前松田家の金川城の主力の支城。

その後、松田元国—元喬—元泰—元方—元運—元澄の居城とした。  
慶長6年頃廃城となり、大手門は岡山城の西の丸石山門として移築された。



富山城跡



富山城本丸跡



二の丸への坂道



展望所からの眺望(下は岡山市街)



二の丸跡



石垣



# 松田家の歴史

金川城（玉松城） 岡山県御津金川。金川の臥龍山にあり、本丸は東西 80m、南北 90m ある。1220 年頃松田盛朝が築城、引き続き松田家が使用して来たが、1481 年松田家中興の祖松田元成が居城を富山城から金川城へ移し、改築し松田元成—元勝—元隆—元盛—元輝—元賢が居城とした。備前松田家の本拠地である。1509 年 8 月に当時超一流の文化人であった 公卿三條西実隆公により玉松城と命名され、2009 年は 500 年の記念すべき節目の年にあたり、玉松会(松田家と家臣団の会)は一族の氏神七曲神社境内に 4 月 5 日記念碑を建立した。玉松城命名は備前金川(地方)と京都(中央)を結ぶ史実「実隆公記」に残る唯一の貴重な記録であると共に、地元の誇りでもある。備前松田家の本城。



金川城址



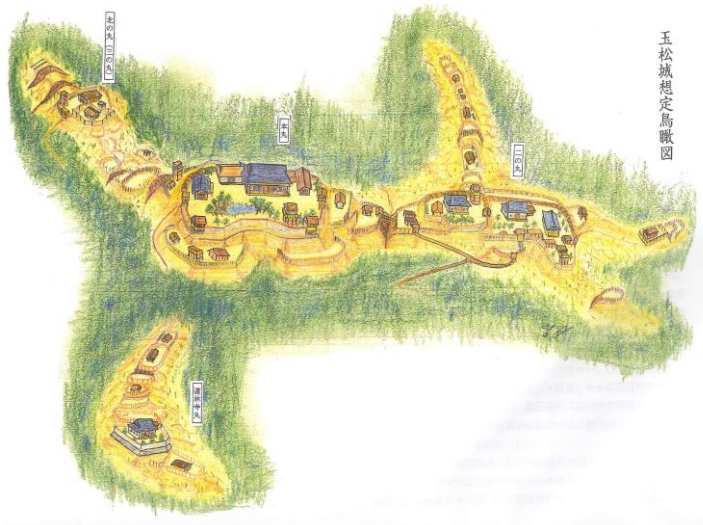
残存石垣



道林寺丸跡



金川城本丸跡



玉松城想定鳥瞰図 出宮徳尚氏作成



慶長絵図の金川城



# 松田家の歴史

戸倉城（別名新庄城・西谷城）備前松田家の金川城の主力の支城。

岡山県岡山市御津新庄。金川城にあって西備前に覇をとらえた備前松田家の一族が新庄という小さな盆地に西谷城を居城としていた。新庄松田家は代々「彦次郎」を通称としていた。室町幕府奉行衆として出仕した松田上野介家の一族の松田上野彦次郎満重は1392年の相国寺法要の際、将軍足利義満を護衛している。松田上野介家は日常を京都で送り、将軍の近習として活動していたが、新庄松田家は専ら国許にあって備前の御家人たちの中心となって働いた。1474年松田彦次郎元貞は幕府から小早川元平の備後高山城救援を命じられている。その後、松田元成は守護赤松氏に挑戦した有名な福岡合戦が起こった。この時、彦次郎元貞も元成に合流して戦った。その後も西谷城の新庄松田家は存続し、永禄年間の松田彦次郎は浦上宗景に従属して美作南部を転戦し、感状を与えられている。その為、1568年の備前松田本家滅亡後も、彦次郎は浦上従属下の国衆として生き残った。1574年宇喜多直家が叛旗を翻した後も新庄松田家は浦上宗景に味方し、翌年5月には天神山籠城に参加して浦上宗景より褒賞された。宗景滅亡後、新庄松田家は多くの所領を失ったが、宇喜多政権下でも新庄地区の土豪として残り、江戸期にはそのまま帰農して現在に至るまで子孫が続いている。



北尾根の曲り輪群



松田元成、元貞の供養塔



吉井城 岡山市吉井。

1483年福岡城合戦の際、松田元成が本陣を置いた城。

滝ノ城 岡山市御津大鹿。

松田家家臣伊賀左衛門勝隆と子の久隆の居城。勝隆は後に虎倉城へ移っている。

# 松田家の歴史

**八幡山城** 岡山市京山一丁目。別名大鷹山城、松田親秀居城。  
松田家家臣中村弥右衛門の居城。



八幡山城趾



東側の酒津公園から八幡山城

**小串城** 岡山市小串。

松田元脩が城主だった城。

永祿 11 年(1568)直家の謀略に依り難攻不落な玉松城はあえなく落城。松田元賢は討ち死にし、弟の元脩は備中方面に落ち延び、毛利家に属す。その後、備中高松城水攻め、朝鮮出兵に参戦し、お家再興に尽力す。直家の嫡子、秀家は父直家が松田家に対する不義を詫びるため児島の小串城 800 石を任せた。



小串城趾



残存石垣

**田益城**

岡山市田益。別名田中城。松田家重臣横井土佐守の累代の居城。横井氏は富山城番も務めた。横井土佐守をはじめ子孫の墓石も残され、この一帯は住宅地となったが、土佐守の井戸が残っている。



城の中心部に残る祠



土佐守の井戸



# 松田家の歴史

岡山城 岡山市丸の内 2-3-1。

別名金鳥城、石山城。1520年～1570年金川城の松田家に仕えていた金光備前とその子、金光与次郎宗高が居城していたが、1570年宇喜多直家に亡ぼされた。



岡山城天守閣



岡山城廊下門



目安橋から内下馬門跡



岡山城月見櫓



岡山城内



岡山城内



廊下門



石垣



# 松田家の歴史

石山城（岡山城の前身）

古城の歴史より



石山を南側から眺めたところ



石山城の二の丸北側の付近

「雑学」 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 「戦国の三梟雄」



大手口に比定される石山門跡

宇喜多直家・斉藤道三・松永久秀の三人を「戦国の三梟雄」と呼び、その悪逆非道ぶりは有名である。まさに直家の汚いやり口は呆れるばかりで、自身の縁者も殺害して勢力を高め、実の弟も直家に呼ばれた時は遺言を残したという。さらに主家の浦上氏に対しても刃を向け、一度は敗れ命は助けられるも、その後に再び離反、とうとう浦上氏をその領地から追い出し自分のものにしてしまった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

中世の岡山には、旭川河口部の広大な沖積平野である大洲原（おおずはら）の中央に「石山」という丘があり、東隣に「岡山」、北西側に「天神山」という丘陵が並んでいた。これら標高20mに満たない3つの丘のうち、真ん中の石山には、かつて石山城が存在した。丸の内ヒルズの駐車場入り口には「宇喜多氏築城以前岡山城本丸址」と刻まれた石碑が立つ。石山に築かれた石山城には、南北朝期の築城伝承や、応仁元年（1467年）松田一族による築城の可能性もあるが史料面で定かではない。通説では金光備前（かなみつびぜん）が築いた城砦を起原とし、2代城主の金光宗高（むねたか）の時代に戦国大名・宇喜多直家（なおいえ）に引き継がれた。その後、近世岡山城の築城の際、石山城は岡山城の一部として取り込まれたため、往時の状態は把握できない。初期の石山城は、石山の麓に居館が構えられ、背後の頂部一帯に逃げ込み用の曲輪が築かれた有事龍城型の城郭であったと考えられる。金光宗高の時代になると、備前でも本格的な戦国乱世になっているので、石山の頂部一帯の曲輪にも恒久的な城郭施設の整備が図られていた。従って、近世岡山城の二の丸内郭（西の郭）跡が石山城の本丸跡にあたり、岡山城西の丸跡が石山城二の丸跡で、石山門付近が大手であったと考えられる。城郭構造は地形部分が石垣築城であり、上部施設が土蔵造りの建物と土塀による近世城郭の建築物と同様な状態であり、居館

# 松田家の歴史

(御殿)も中心郭内に伴っていたと推定されるが、本格的な天守を備えていたかどうかは不明である。また、麓一帯に家臣団の屋敷や商人・職人の家屋を集めた本格的な城下町を伴うもので、その一部が建設工事に伴う発掘調査で検出されており、この城下町は今日の市街地の礎をなすものであった。

松田氏家伝によれば、備前松田氏の6代当主の次男・松田元斉(もとひと)が、応仁元年(1467年)岡山城に移り住むとの記載がある。松田氏は備前西部一帯を支配する武将で、室町幕府の成立期には備前国守護職を務めたこともある。松田氏が富山城を拠点にして出石郷から鹿田荘に進出する過程で、出石郷の石山または岡山に城砦を構えて一族の者が居住した可能性はある。『吉備温故秘録(きびおんこひろく)巻之十一』によると、戦国時代の大永年間(1521-28年)には金光氏が石山城に居城したとある。しかし実際には、それ以前より金光氏が石山城を居城としていたようである。金光氏は旭川河口に近い東岸の御野・上道付近を本拠地としたと考えられる土着の国人領主で、金光備前が松田氏に属して次第に勢力を伸ばし、出石郷から鹿田荘の大半を押領して旭川西岸の石山城に本拠を移した。また、石山城に隣接する金光山岡山寺(岡山市北区丸の内)の保護もしている。金光備前は主家である松田元運(もとゆき)の娘(または姉)を正室にするなど、松田氏と親密な関係にあったようである。それとは別に、応仁元年(1467年)の年末に発生した京都相国寺合戦で、細川方の部将として従軍した松田元斉が討死していることが史料により分かっている。松田氏家伝では、元斉の妹が金光備前の室と記載されているので、元斉と金光備前は義理の兄弟となり、石山城を築城して間もなく討死した元斉の跡を継いで、金光備前が石山城主になったとも考えられる。

直家の備前西部平野への進出を妨害している松田氏配下の猛将で龍ノ口城(岡山市中区祇園)の税所元常(さいしよもとつね)であった。弟の宇喜多忠家を総大将として軍勢を龍ノ口城へ差し向けたが、元常はこれを迎え撃ち、大激戦のすえ引き分けている。

**大日幡山城** 岡山県岡山市寺山・内ヶ原

文明15年(1483年)福岡合戦で松田氏方の山名俊豊が陣を構えた城



大日幡山



大日幡山山頂部

**丸山城** 岡山市丸山。

松田家に従った寺尾十左衛門の居城。

**上中野城** 岡山市北区中野。

松田家家臣前田氏の居城。



# 松田家の歴史

船山城 岡山市原。

松田家に従った須々木豊前守の居城。



須々木神社と顕彰碑



船山

龍の口城 岡山市祇園。

松田家有力家臣の穰所元常の居城。1560年に宇喜多直家に攻撃され度々撃退したが、直家の謀略により落城した。標高257mの山城で、土塁、帯郭、堀切、出丸等が残っている。



龍の口城鳥瞰図 余湖浩一氏作成



龍の口城跡



本丸跡の八幡宮



高柳城 岡山市北区高柳東町。富山城の支城のひとつ  
松田家に従った中島左馬頭の居城。



# 松田家の歴史

**虎倉城** 岡山市御津虎倉。松田家家臣服部伊勢守によって築かれた。

金川城の主力の支城。松田家家臣伊賀修理亮など伊賀氏の居城。標高 327m の山城。  
伊賀久隆は松田家を裏切り 1568 年宇喜多直家の先鋒となって金川城を攻め亡ぼした。  
しかし、後に宇喜多直家によって毒殺された。



曲輪の石垣



虎倉城本丸跡



西側稜線の堀切



虎倉城跡

徳倉城鳥瞰図

**矢原城** 岡山市北区御津矢原。

松田家の本拠金川城の出城。別名熊谷城。

松田家重臣檜村又次郎の居城。

**殿山城** 岡山市御津甲伊田。

松田家に従った難波氏の居城。

**中島城** 岡山市中島。

松田家に従った中島氏の居城。

**比丘尼城** 岡山市国富。

松田家に従った国富源左衛門の居城。

**平井城** 岡山市平井。

松田家に従った平井習之進の居城。

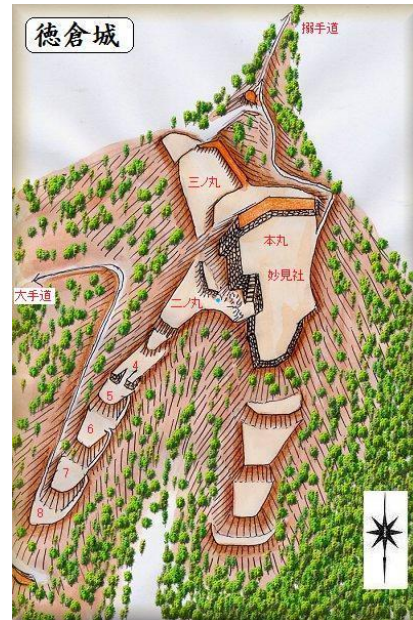
**西菅野城** 岡山市菅野 田益城の支城。

備前松田家の主力の支城。

松田家重臣横井又十郎土佐守（1300 貫）が城主だった城

**亀山城** 岡山県岡山市東区沼。別名 沼城。

松田家に従った寺井十郎左衛門の居城。



余湖浩一氏作成



# 松田家の歴史

**徳倉城** 岡山市北区御津河内。備前松田家の金川城の主力の支城。

金川城の支城として松田元隆が築城(元隆の三男松田親秀築城説有り)。

1567年頃松田家重臣宇垣市郎兵衛の居城。規模：300m×170m、  
標高232m、比高170m、本丸は東西24m南北79mの広さで、井戸、  
石垣、空堀等が残っている。



本丸



本丸虎口の石墨



虎口石垣



井戸

## 「玉松城」命名500年記念



金川七曲神社境内の500年記念碑



七曲神社境内にて松田邦義と松田充弘氏(右)  
初対面の記念に撮影



# 松田家の歴史

白石城 岡山県建部町大田 松田家重臣橋本越中守の居城

白石城は、備前国の最北部、美作国との国境に近い小山に存在する。足下を旭川が洗う要害の地で、河川交通で繁盛した国境の川湊福渡も眼下に押さえており、軍事・流通経済上極めて重要な場所に立地している。また、南北の交通（川）だけでなく、周匝から仁堀を抜けて旭川へ出る街道の出口に立ちはだかるように築かれており、この城を落とさなければ福渡から砂川、吉井川水系への進出は不可能になっている。ただし、城は福渡の町を守る場所にはなく、むしろ美作方面から福渡まで進出した攻撃側をここで支え、金川・仁堀方面への移動を阻止する役割が想定される。



主郭からの眺望



尾根上の曲輪



塹堀



残存石垣

船山城 岡山市原。

松田家に従った須々木氏の居城。



須々木神社と顕彰碑



船山





# 松田家の歴史

## 備前松田家と寺院

蓮昌寺（日蓮宗）岡山市田町 1-4-12。

蓮昌寺は岡山県下の寺院中最も大規模の伽藍を擁した。国宝であったが、1945年6月29日戦火により焼失。蓮昌寺の縁起については諸説あり、『康永元年宗祖日蓮三世の法孫日像、西国弘通の砌松田左近将監元賢帰依にて、上道郡字御堂に仏住山蓮昌寺を創立、松田家より百二十石寄付』と寺記にあり、康永元年（1343年）の創立を伝えているが、「備陽国志」では、正慶年中（1332年～1333年）の創立を伝え、建武中興以前にさかのぼるものとしている。蓮昌寺は初め蓮台寺と称したが、金山城主松田左近将監元喬の法名蓮昌院殿秀哲日妙大居士に因み蓮昌寺と改めたと云われる。



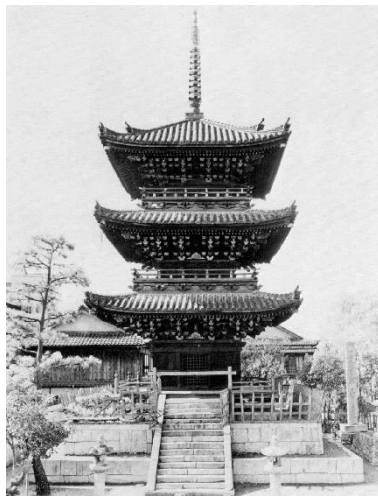
蓮昌寺境内



蓮昌寺本堂



本堂内部



三重塔内



## 立雲山 大乘寺

松田元勝は光長寺（東区瀬戸町塩納）で自刃した父元成の死骸を埋葬し、大乘寺を建立した。大乘寺は寛文二年(1662)に廃寺となったが、元成と大村出雲の墓石は残っている。



向かって右が元成、左が盛恒

松田元成は天王原の戦いで敗れ、山の池の光長寺で自刃、重臣の大村盛恒は、救援を要請するため出雲の尼子氏を頼って馬を走らせたが、山の池に盛恒が到着したのは、既に元成自刃の後であった。主君元成の後を追って、盛恒もまた自刃して果てた。



# 松田家の歴史

## 妙国寺（日蓮宗）

松田元澄の5男元満は1480年に出家、日精と改め、のち権大僧都二位法印となり妙国寺を開山し、松田元成が建立。現在廃寺となっているが、妙国院と石塔等が残っている。



松田家供養塔



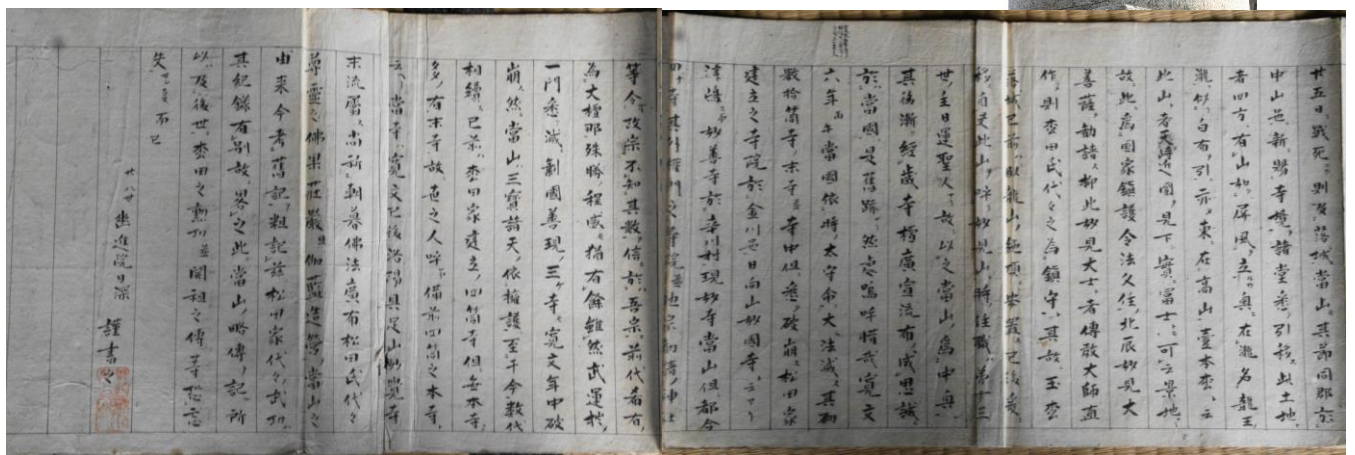
玉松城（金川城）跡出土家紋瓦

## 臥龍山 道林寺 岡山市御津中山 944。

道林寺は松田元泰が玉松城（金川城）三の丸に持仏堂を建て（現在の道林寺丸址）、元方が大覚大僧正を開基として創建した。1568年玉松城が落城し、現在地に移転した。寺内に奉祀の妙見の尊像は伝教大師の作と云われ、大覚大僧正中国弘通のとき松田左近将監元喬に賜わったと伝えられている。金山の頂上に移し祀り道林寺の構えにしたが明和・寛政のころ境界争が三十年続き道林寺住職日近がひそかに当山に安置した。寛政十二年（1800年）野々口村大庄屋大村官右衛門房重により「道林寺縁起」の草稿である。（大村槇子蔵）松田家重臣大村盛長 3000石の領地は野々口村はじめ 17ヶ村であり、野々口村大庄屋大村官右衛門房重は大村盛長の子孫である。



## 道林寺 當山畧傳





# 松田家の歴史

吉備津神社（東京大学史料編纂所教授 榎原雅治氏 講義より）

岡山市北区吉備津吉備津 931



吉備津神社は大吉備津彦大神を主祭神とする山陽道屈指の大社である。

本殿の大きさは桁行き 48 尺 3 寸(約 14.6m)、梁間 58 尺 3 寸 6 分(約 17.7m)、棟高(土台下端から箱棟上端まで)39 尺 6 寸(約 12m)、建坪 78 坪 3 強(約 255 m<sup>2</sup>)の大建築であり、京都の八坂神社につぐ大きさがあり、また出雲大社の約 2 倍以上の広さがある。現在の本殿・拝殿は今から約 600 年前の室町時代、將軍足利義満の時代であり、備前松田家は足利幕府直属の武士団「奉公衆」として、守護赤松氏に対しては当初より自立しており、吉備津神社造営を実現できる政治的・経済的な基盤を保持していた。

本殿は国宝であり日本全国に例のない独特の形式である。この本殿が建てられた時の棟札に依ると、この吉備津神社の本殿建設は実に 30 年の年月を懸けて行われた。最初の段階である立柱の明德年中、南北朝時代最後の頃吉備津神社のトップである社務という役職に就いていたのは松田備前守吉信であり、応永 12 年(1405)12 月 13 日仮葺の時の社務は子の松田三郎左衛門尉満朝、応永 28 年(1421)11 月 26 日桧皮葺の時の社務は子の松田十郎朝郷であった。

本殿が竣工したのは応永 32 年(1425)、この時点での社務は備中守護の細川となっており、細川氏が建てたと書いている書物もあるが、実際に長い時間をかけて建立に努力したのは松田家であった。それ以来、解体修理もなくその雄大な姿を現代に伝えている。



# 松田家の歴史

## 「玉松城」命名 500 年記念

### 「玉松城」命名の由来

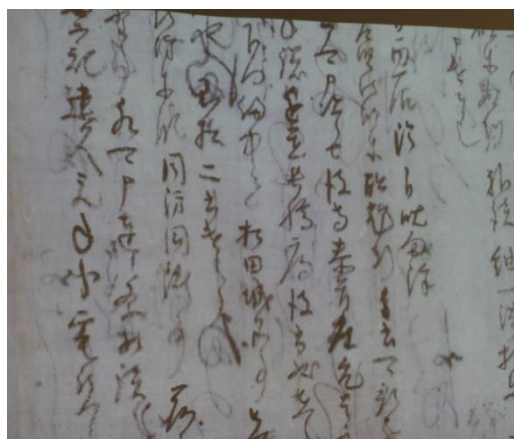
玉松城は当初金川城と呼ばれていた。今から 500 年前の 1509 年に内大臣三条實隆公によって玉松城と命名された。三条實隆公は古典学者・歌人として当時の京を代表する文化人であった。

「實隆公記」は応仁の乱の頃から戦国時代にかけての 63 年間の日記であり、13 冊 107 巻から成るものである。内容は下剋上の風潮と陰謀渦巻く世相を伝え、この時代の資料として高く評価されているものである。この「實隆公記」の中に玉松城の一文「永正 6 年(1509 年)閏 8 月 27 日の條泰首座今日下向備中云々松田城名事先日所望之間麗水玉松二書遣之了」がある。備前松田家中興の祖松田元成の子元勝は、左近将監に任じられ、京の人士との交遊も深く、右大臣三条實光公の娘を室としている。

「玉松城」命名 500 年記念行事として 2009 年 4 月 5 日全国の松田家と家臣団の子孫達が金川七曲神社境内に集った。記念碑を建立し、岡山市長高谷茂男氏・神奈川県松田町町長長島村俊介氏・東京大学史料編纂所教授榎原雅治氏を始めとして多勢の方々が参加、新聞社やテレビ局も取材に駆けつけ賑やかに執り行われた。



實隆公記



實隆公記



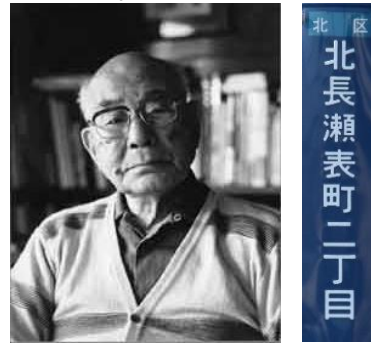
全国の松田家と家臣団の子孫（玉松会）

# 松田家の歴史

## 備前松田家の子孫

土光敏夫、東京高等工業学校（現：東京工業大学）卒業後、石川島播磨重工業に入社後に社長に就任し、合理化を徹底し経営危機を乗り切る。その後、経営危機に陥っていた東芝の経営再建を依頼され社長に就任。土光家は備前松田家松田元成の弟、備前富山城主松田親秀の子孫である。備前松田家が宇喜多氏に滅亡させられた後帰農した。土光姓に改姓したが、土光という姓は日蓮宗の経文の中から引用した苗字である。土光敏夫は岡山県御津郡大野村北長瀬村字辻（現在の岡山市北長瀬）に生まれた。熱心な日蓮宗の信者で、「メザシの土光さん」と親しまれ、質素な生活と率先垂範の行動は多くの人々に感動と勇気を与えた。土光本家は、大野村村長を務め、今でも北長瀬表町の南野育成園で貢献している。「ミスター合理化」「荒法師」「怒号敏夫」「行革の鬼」また猛烈な働きぶりから「土光タービン」などの異名を持つ。

石川島播磨重工業社長、東京芝浦電気社長、  
第4代経済団体連合会会長・臨時行政調査会会長  
臨時行政改革推進審議会会長（土光臨調）  
岡山県名誉県民  
勲一等旭日桐花大綬章



中曽根康弘首相に三顧の礼をもって行財政改革の臨調、いわゆる土光臨調への就任を要請され国鉄改革、電々公社改革、専売公社の改革など大型の改革が進行した。



土光家墓石群



中曽根康弘氏・鈴木善幸首相・土光敏夫氏

宇垣美里、(1991~)宇垣一成の子孫玉松会宇垣俊孝副会長の子、宇垣家は、松田家の一族が金川城の南、備前国津高郡宇垣郷（岡山県御津町宇垣）に定住して、松田姓から宇垣姓に改姓した。同志社大学出身、「ミスキャンパス同志社」に出場、グランプリを獲得！

2014-2015年度にTBSアナウンサー部に入社。「とんでもない逸材」と言われている。「あさちゃん」・「炎の体育会TV」・「スーパーサッカーJ+」のアシスタントとして活躍。新人ながら将来が期待された。その後人気アナとなり、5年で退社し女優・歌手・タレントが所属するオスカープロモーションに移籍した。



宇垣美里 TBS 入社時・オスカーに移籍時



# 松田家の歴史

松田三徳、元徳、(1886~1962) (讃岐松田家)。慶應義塾大学法律科〔明治 42 年〕卒、台湾総督官房秘書課長等を歴任、大正 6 年より衆院議員に 4 期連続当選。農業、塩業を営み、讃岐米肥社長、日本マグネシウム取締役を務めた。著書に「世界大戦後ノ我が国民思想」がある。

松田友良、玉松会初代会長、香川県議会議長。

松田伊三雄 (1896~1972)、備前松田家訖間系の子孫、香川県出身 三越社長。

1919 年慶應義塾大学経済学部卒、1963 年三越社長就任、1972 年会長就任。京城支店長(韓国ソウル)の時、本店に次ぐ第 2 位の売上規模に育て上げたが、1945 年 8 月 15 日の敗戦の報を聞いた後、支店閉鎖の準備を開始。店員とその家族三百数人の生命を預かり、体を張って全員を無事帰国させた逸話が残る。「仏の松田」と綽名される優しい人物と評された。1971 年小売店業界で最高値の 1000 億円の売り上げを達成した。三越近代化の功労者といわれる。

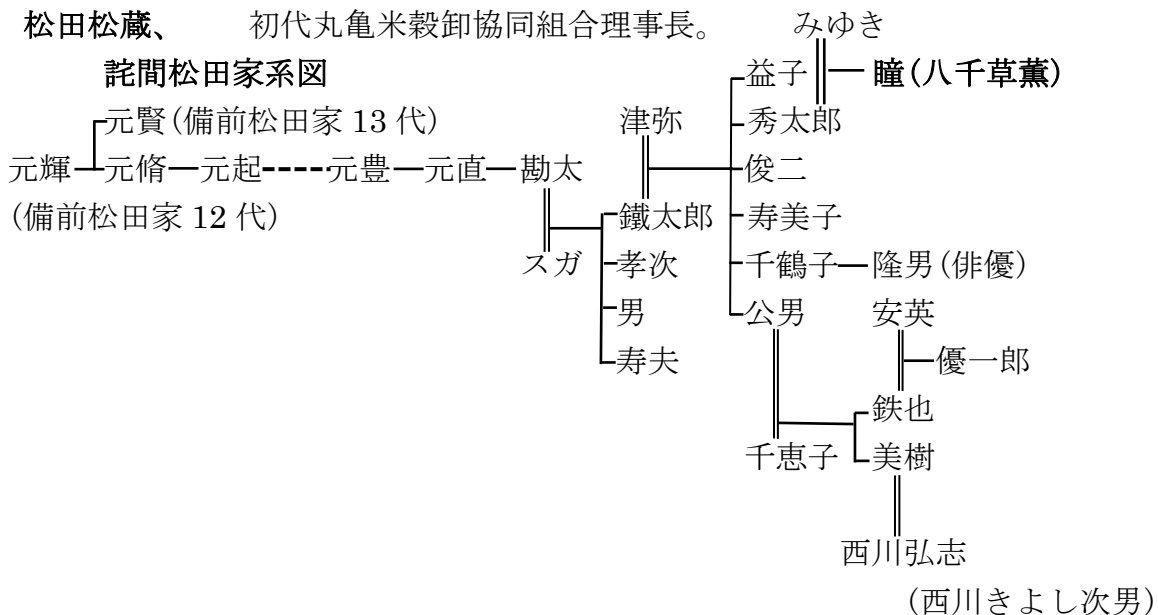
1964 年 藍綬褒章・1967 年 勲三等瑞宝章・

レジョン・ド・ヌール・シュパリエ勲章 (フランス)

松田栄右衛門、讃岐造船社長(創業者)。

松田幸一、 訖間町町長。

松田松蔵、 初代丸亀米穀卸協同組合理事長。



八千草薫氏、松田町町長長島村俊介氏と談笑 (2013 年)

島村町長、「松田町へ、ようこそおいでくださいました。」

八千草薫氏、「ルーツを求めて東名高速道路を利用し、ここまでやってきました。私の旧姓は松田なので、以前からインターチェンジの標識に「大井松田」とあるのが気になり、興味をもっておりました。……」

和やかに松田町や八千草薫氏の先祖に関する話に花が咲いた。

八千草薫氏：女優

島村俊介氏：郷土の歴史研究家



# 松田家の歴史

八千草薫、旧姓 松田瞳(谷口 瞳) 1931年1月6日生、備前松田家訖間系の子孫。

宝塚歌劇団出身(1957年退団)の女優八千草薫氏。1987年都民文化栄誉賞・  
1991年NHK放送文化賞・1995年文化庁長官表彰・1997年紫綬褒章・  
2003年旭日小綬章・2015年名誉都民その他多数受賞。

『お嫁さんにしたい有名人』の統計でたびたび首位に輝いた。

また、45歳になっても「理想の女房 No.1」であった。

現在も舞台をはじめ、映画・テレビ・ナレーションなど幅広く活躍。

東芝・ヤマハ・武田薬品を始め多くのコマーシャルに出演。

趣味：山歩き。



女優八千草薫氏



松田町町長島村俊介氏と八千草薫氏(松田町にて)  
先祖を訪ねて松田町を訪問(2013年)

八千草薫氏(終企画)より送られた写真 (映画等のスチール写真は権利関係有り掲載不可)



# 松田家の歴史

## ご先祖様を訪ねて

谷口 瞳 (旧姓 松田 瞳)

私の父が亡くなったのは、私が二才の時に、ほんとうに何も覚えていませんでした。戦争で焼け出され、当時女学校に入ったばかりの私は、母と共に父のお位牌を持ってどうやら逃げのびました。

松田家のお墓は「詫間」にあると聞いていましたので、いつかはお参りに行きたいと、その思いはずっと続いていました。それが思いがけず実現することになって、父の弟であった、松田公男さんが連れていってくれました。

祖父であった松田鐵太郎から私の父松田秀太郎に継がれ、そして松田公男が松田家を継いできましたが、いい思い出を残してくれた事に感謝しています。

「詫間」では松田充弘さんがいろいろと案内して下さいまして、妙法寺にお伺いして、御住職にもお目にかかり、過去帖に父の名前を見つけて頂き、永年の望みが叶えられて、嬉しさいっぱいの日でした。

皆さまから「瞳さん」と呼ばれて最初はびっくり致しました。普段はあまりそういう事はないので、そしてすぐ気がつきました。皆さまが全部「松田」の姓なのだから名前と呼ばないと分からない。なるほどと。私にとっては新しい発見でした。

みんな何処かで繋がっている、こんなに沢山の方がつながっている。

私の体の中になにか暖かいものが流れる気がしました。

瀬戸内の陽ざしはやわらかく、風もやわらかく、海の波はぴたぴたと、のんびり岸壁に音をたてていました。

私にとっての新しい歴史の旅でした。

女優 八千草 薫

備前松田家 (宅間) 末裔

「玉松」より

## 福岡合戦 (松田・山名/赤松・浦上)

文明 15 年(1483~5) 元成は、守護代・赤松政則方、浦上則国を攻める。軍勢 1800 を引き連れ金川を出発。吉井・境の山に布陣。松田孫四郎、佐藤式部、檜原、堤、小野田ら吉岡・千種山の陣取。山名俊豊が援軍、松田・山名の連合軍は、赤松の福岡城を陥し、更に浦上の三石城まで進軍。深追いが仇となり天王原で敗戦、次いで千種山でも敗戦。

松田には尼子と連合して赤松・浦上(備前東部)を制覇して備前統一を目指したか？松田元就は、塩納・山の池へ逃走。寺城・妙法山長光寺で自刃。大村出雲盛恒は、雲州尼子へ援軍。時すでに遅く、追腹(備前軍記)。

元成の息・元勝は、元成(無縫塔)と大村出雲(宝綬印塔)供養塔と立雲山大乗寺を建てる。

寛永 6 年(1666)池田光政の宗教弾圧によって二寺とも廃寺。光政は和意谷の池田家墓所へ詣でた時、山の池に立ち寄る。(万波家文章)

# 松田家の歴史

## 出雲松田家

出雲国松田家は松田家二代目政基(有経の子)の弟**義基**は「松田三郎住伯州」とあって、伯耆国(島根県)の中部～西部)に住んだ。別に、**有忠**は出雲国安来庄地頭職因幡(鳥取県)の松田家、出雲(島根県)安来庄は**有忠**が承久の乱での勲功の賞として与えられたものである。出雲松田家の系図は複数見受けられる。

中海に突出した海城・十神山城を居城とし、中海最大の港湾・安来、日本海水運の要衝・美保関を掌握して出雲国最大の海上勢力となった。

応仁の乱では山名氏に従って西軍に属し、出雲東部の国人勢力を結集して尼子氏と激突したが、敗れた。しかしその後、**満重**が尼子経久に帰順して重用され、尼子十旗の筆頭・白鹿城の城主となる。さらに**満久**が政久の娘(晴久の姉)を娶るとますます尼子氏と密接な関係になる。その後、毛利氏の出雲侵攻に一時降ったものの、すぐに尼子氏に帰参、白鹿城攻防戦で奮戦した。満久の子・**誠保**は勝久の尼子再興戦にも参加している。

松田家支配の特記事項としては、朝鮮との交流が挙げられる。当時、幕府や朝鮮・中国を悩ませていた倭寇を取り締まる権限を持ち、美保関のある美保郷にも支配を伸ばしている。

「李朝実録」によると、応永 27 年(1420)閏正月 15 日の記録に、朝鮮の民衆が安来港(津)に 70 余戸暮らしていた、とある。このほか、中国との交易も行い、三河守の時代には隠岐国の国人を従えて、若狭国小浜の港とも商取引をおこなっていたという。

### 松田有常、二郎

(P.72 参照)

有常—有忠—基秀(有秀/有基)—保秀(基秀の甥?)—基綱(基秀の甥?)—経基—  
義泰—秀重—経鎮—経忠—公順(備前守)—義忠(三河守)—経満(三河守)—満重(備前守)—満久(左近将監)—誠保(兵部少輔)—吉久(吉重)—吉政—元久…

有常—義基—経基—義泰—秀重—経鎮—経忠—公順(備前守)—義忠(三河守)—  
経満(三河守)—満重(備前守)—満久(左近将監)—誠保(兵部少輔)—吉久(吉重)—  
吉政—元久…

### 松田有忠、九郎有忠、安木有忠、父：有常(出雲国大野庄・安来庄地頭職 1222 年)

1206 年宍道湖北岸にある秋鹿郡大野庄の地頭としても確認されている。

1222 年承久の乱の功により出雲国安来荘地頭職拝領。(吾妻鑑)

出雲安来荘新補地頭

松田九郎有忠の子孫は＝白鹿松田家—尼子氏に仕える

島根・赤来＝赤来松田家(左巴紋)—尼子氏に仕える

日御崎神社：出雲大社の北側に位置する。この神社の神職は小野(松田)有忠で、雲州を統治する一翼を担っていた。

### 松田有基、小次郎有基、安木有基、日置有基、出雲国大野庄・安来庄地頭職、父：有忠

日置(松田)小次郎有基は、島根半島西岸にある日御碕神社檢校家・日置氏と関係を持ち、

宝治元年(1247)5月6日付で、將軍頼嗣から父と同じ大野庄の地頭に補任されている

### 松田保秀、出雲国安来庄地頭職、父：有基

1283年、出雲国安来荘地頭職などを安堵される。(出雲小野文書)

島根・松江＝白鹿松田家—尼子氏に仕える。

島根・赤来＝赤来松田家(左巴紋)—尼子氏に仕える。

# 松田家の歴史

松田秀保、出雲藤原秀保、

松田基秀(有秀)、父：有忠、六郎基秀、

松田基綱、(基秀の甥?) 父：保秀(基秀の甥?)

藤原実時、菖蒲実時、

藤原実高、菖蒲三男実高、

菖蒲実盛(真盛)、(?~1225)五郎実盛、五郎真盛、菖蒲四郎実盛、長野三郎、

父：菖蒲実経/遠義、石見美乃知・黒谷新補地頭

1221年、宇治橋の合戦で負傷した。(吾妻鏡)

石見美乃知・黒谷新補地頭、黒谷横山城築城、(島根県益田市柏原)

1222年、石見国美濃地・黒谷郷地頭一島根・大田＝石見松田家(島根県西部)

承久の乱での勲功の賞として与えられたものである。

## “菖蒲五郎実盛自関東所給預也

但於未知福地地頭職者、雖被載于御下文、

先度他人給之事、可令存其旨之状如件。

貞応元年(1222)九月十八日

武蔵守 平判(北条泰時)

相模守 平判(北条時房)

(萩閥益田家文書)

菖蒲実経、(波多野実経)、菖蒲実盛と兄弟? 父：遠義、

菖蒲実基、父：実盛、長野三郎、石見国長野庄に住んだ、

1222年、承久の乱後、石見国長野庄内美野地・黒谷を賜った。

菖蒲家信、父：実経、

松田政基、父：有常(有経)

松田政綱、父：政基

松田忠義、父：政基

松田忠綱、父：忠義、

松田綱泰、父：政綱

松田政泰、父：政綱

松田経泰、父：政基

松田政経、父：政泰/綱泰、

松田政定、父：政経

松田経基、松田弥三郎常基、(伯耆波多野へ) 父：義基/基綱、出雲松田家

1246年幕府台所に入った泥棒を逮捕。(吾妻鑑)

松田経秀、父：経基

松田経朝、次郎、源頼家・実朝両将軍の近習衆、父：盛経/忠綱

安貞元年(1227)三月、波多野経朝は鎌倉前浜の民家で承久の乱での京方の残党を捕え、

美作国(岡山県東北部)で一箇村を与えられた。(吾妻鑑)

松田盛経、父：経基

松田胤秀、父：政定

松田盛朝、父：盛経、

松田重泰、父：義泰、

# 松田家の歴史

松田小次郎(小四郎?)

1213年、和田義盛の乱、和田方に味方する。(吾妻鑑)

1221年、承久の乱で松田小次郎・九郎それぞれ二人を討つ。

松田義基、三郎義基、弥三郎、政基の弟、父：有経、

一鳥取・船岡＝伯州(伯耆国)松田家、

1213年、和田義盛の乱、和田方に味方する。(吾妻鑑)

松田四郎、1213年、和田義盛の乱、和田方に味方する。(吾妻鑑)

松田六郎、1213年、和田義盛の乱、和田方に味方する。(吾妻鑑)

松田七郎、1213年、和田義盛の乱、和田方に味方する。(吾妻鑑)

松田九郎、1221年、承久の乱で松田小次郎・九郎それぞれ二人を討つ。

松田平三郎、1221年、宇治橋の合戦で負傷した。(吾妻鏡)

松田右衛門太郎、1221年、宇治橋の合戦で負傷した。(吾妻鏡)

松田義泰、父：経基(常基)、出雲松田家

松田秀重、父：義泰、出雲松田家

松田経鎮、父：秀重、出雲松田家

松田経忠、父：経鎮、出雲松田家

松田将監入道、

松田吉久(吉重)、左近将監、出雲松田家

1342年、石見国侍所松田左近将監五郎吉重の名見える。(益田文書)

堀尾忠氏の家老、元白髪城主で後に芸州広島藩の客分家老だったといわれる。

出雲赤穴城(瀬戸山城)城番となった。

吉久は堀尾吉晴の元で瀬戸山城代となって赤名の街を整備した。

松田掃部助、常鎮、応永11年(1404)11月、守護京極氏の下で松田掃部助(常鎮)が平浜八幡宮の造営を行い、次いで翌12年10月になると、幕府からの依頼により杵築大社の造営も行っている。応永25年(1418)から嘉吉3年(1443)ごろまでには、能義郡地域の他の社領もほとんど松田家が扶植し、さらに杵築大社領のうち、遙堪郷(安食神社)についても松田家の代官と思われる者が行っているため、在地領主として、このころが松田家の最盛期だったようである。

松田吉政、父：吉久、出雲松田家

松田元久、父：吉政、出雲松田家

松田誠久、松田左近将監誠久、

松田道栄、遠江守藤栄、遠江入道道栄、

応仁元年(1467)、松田遠江入道道栄が備前国守護代もしくは守護使として、赤松氏からの遵行をうけて、打ち渡しを行った事が『西大寺文書』『備前難波文書』などにみえる。赤松氏の支配機構のなかに組織されていたようだ。

松田遠江入道道栄は、遠江守藤栄と同一人物と思われ、藤栄は「備前松田系図」などの松田諸系図にはみえないが、実在の人物と思われ、備前松田氏は応仁期の赤松氏が備前守護として再興したのに伴って、台頭したものと考えられる。

松田公順、藤原公順、備前守、出雲の国人。安来十神山城主、父：経忠、

松田備前大守藤原朝臣公順。

海運を制して出雲東部一帯に強盛を誇り、朝鮮に遣使をした。応仁の乱がはじまると、守護代・尼子清定に叛して西軍・山名氏に属し、尼子氏の本拠・月山富田城を攻撃した。



# 松田家の歴史

1464年、松田備前守は京極氏領美保関の代官を務めるとともに、寛正5年(1464年)には大西筑後守、下河原周防守とともに後花園天皇の譲位に伴う段銭の催促に当たっていた。(朝山文書)

1467年、応仁の乱(1467~1477)がはじまると、守護代・尼子清定に叛して西軍・山名氏に属し、尼子氏の本拠・月山富田城を攻撃した。

1467年、東出雲の名族と云われる安来庄地頭松田家の庶子家と推定されている。海運を制して出雲東部一帯に強盛を誇り、朝鮮に遣使をした。応仁元年(1467年)に美保関から朝鮮国王へ遣使した人物に出雲州美保関処「松田備前太守藤原朝臣公順」の記録があるが、この松田備前守である。(海東諸国紀)

公順(藤原公順)は朝鮮の資料「海東諸国記」に名前が記載されている。海東諸国記で来航が認められたのは応仁二年(1468)のことで、その時の当主は松田備前守であることが佐々木文書で確認出来る。その為歴史資料では、公順=松田備前守となっている。

1468年、山名氏や反尼子の国人たちと連携をとりながら清定に抗戦するが、やがて清定に本拠・十神山城を落とされた。文明2年(1476)4月17日 松田氏惣領家の拠点であった安来庄地頭方が没収され、尼子清定の被官らに分配されたが、それに伴って安来津、十神山城も完全に尼子氏の統治下におかれた。松田家はその後尼子氏の支配下に入り、尼子晴久の頃には一番重要な城(尼子十旗第一の城)である白鹿城の城主を勤めていた。

1476年、文明2年4月17日、松田氏惣領家の拠点であった安来庄地頭方が没収され、尼子清定の被官らに分配されたが、それに伴って安来津、十神山城も完全に尼子氏の統治下におかれた。松田家はその後尼子氏の支配下に入り、尼子晴久の頃には一番重要な城(尼子十旗第一の城)である白鹿城の城主を勤めていた。

松田義忠、三河守、出雲の国人、父：公順、

1470年、出雲国美保郷内の件で、松田三河守の名見える。(京極持清書状)

1473年、出雲国法吉郷を安堵している。(小野文書)

1476年、出雲国舎人保を押領する。(京極政高書状)

応仁元年に美保関から朝鮮国王へ遣使した人物に「左衛門大夫藤原朝臣盛政」がいるが、松田三河守(その後継者が宗政)であろう。

美保郷の領有問題で尼子氏と争い、不利になったために能義郡土一揆を扇動して尼子氏に対抗した。この一揆は諸国人を巻き込んで拡大、一揆軍は富田城を急襲するが、尼子清定の活躍により一揆は鎮圧され、美保関は完全に尼子氏の勢力圏にはいった。守護であった京極持清が文明2年(1470年)8月に亡くなり、後を引き継いだ政高になると、政高は文明5年(1473)2月11日付で、松田三河守に出雲国法吉郷を安堵している(「小野文書」)。安堵された法吉郷とは、まさに白鹿城の本拠地である。備前守が西軍山名氏方となったのに対して、三河守は東軍京極氏方であった。

松田経満、三河守、父：義忠、出雲松田家、出雲系安来領家松田家。

松田満重、備前守、父：経満、出雲松田家

松田満重は尼子経久追放のときは三沢・三刀屋らと共に京極側にあったが尼子経久の復帰戦では経久に味方し、尼子経久に重用された。尼子十旗の筆頭・白鹿城の城主となる。

松田宗政、藤原宗政、宮内少輔、安来領家、松田三河守(義忠)の後継者?、安来庄地頭松田有基が「安来」庄地頭職を安堵された文書を、日御崎社が権利を主張する「大野」庄



# 松田家の歴史

**松田綱秀**、越前守、三郎兵衛綱秀、父：経通、安来領家

尼子経久・晴久の政権下で、出雲衆に入っているながら政治文書に多く関わっている。

**松田孫三郎**、綱秀の子、安来領家、父：綱秀、

松田家本領である末次の4分1を与えられていた。

**松田三郎次郎**、綱秀の子、安来領家、父：綱秀、

御在陣・御在番の時、松田誠保と同前の扱いとされた三郎次郎がいた。

この時点では尼子勝久方となっはいなかった。

**松田満久**、左近将監、父：満重、妻：尼子政久の娘

尼子政久の娘（尼子晴久の姉）を娶るとますます尼子氏と密接な関係になる。

白鹿城は宍道湖の北岸に位置し、永禄年間(1558年～1569年)に松田家(松田満久?)によって築かれた。美保関及び中海の水運を押さえる商業・経済の要衝であり、尼子氏の支城中、随一といわれた堅城でもあった。この為、尼子十旗中の第一とされ、松田家が城主に当てられた。

**松田掃部入道**、

出雲杵築大社造宮に、**松田掃部入道**宛文書あり。出雲杵築大社は出雲大社の事。

**松田誠保**(?～1578) 兵部丞・兵部少輔。父：満久(満重)、妻：尼子政久女(尼子晴久の妹婿)子に万千代、千々世。安来郷・法吉郷・松江を領する。尼子氏の重臣。

尼子十旗の筆頭である白鹿城城主。菩提寺は常福寺。

1562年戦いに敗れ毛利氏に通じるが本城常光討たれるをみて尼子氏に転ずる。

永禄6年(1563)8月、牛尾久信と共に籠城し、毛利氏の勢いに押され父の松田満久は自害し、誠保は隠岐に逃れる。富田城開城後に松田誠保が隠岐に退転したのは、松田家が隠岐の国人たち(隠岐海賊衆)との結びつきがあった。

1569年尼子勝久、山中鹿之助らが出雲奪還を目指して挙兵し、隠岐に渡ったときに、松田誠保も尼子再興軍に加わり戦うが、尼子再興軍が出雲からの撤収を余儀なくされると同時に再興軍を離脱。その後は武士を捨てて野に下ったとも、赤穴氏の客分になったとも伝えられる。

富田城開城後に松田誠保が隠岐に退転したのは、松田家が隠岐の国人たち(隠岐海賊衆)との結びつきがあった。誠保は勝久の尼子再興戦にも参加している。

1562年、毛利氏の「出雲乱入」に対し山中鹿之助らが白鹿城城主の**松田誠保**の救援に駆け付けたが敗北。

毛利氏の出雲侵攻により米原綱寛、三沢為清、三刀屋久扶らと共に降伏する。ところが、先に降伏していた本城常光が毛利元就に謀殺されたことで、再び尼子氏に帰順した。後に、尼子勝久、山中鹿介らが出雲奪還を目指して挙兵し、隠岐に渡った時に、松田誠保も尼子再興軍に加わり戦うが、尼子再興軍が出雲からの撤収を余儀なくされると同時に再興軍を離脱、その後は武士を捨て帰農したとも、赤穴氏の客分になったとも伝えられている。

松田左近将監満久とその息子兵部丞誠保は、松田一族の惣領家ではなかったと思われるが、尼子氏の防壁を担う武将としての役割をつとめ、尼子再興軍でも働きを見せた、勇敢な尼子武士の一員であったといえる。

1569年、隠岐為清らが美保関で反乱を起こした際(美保関の合戦)、山中鹿之助幸盛らは窮地に追い込まれるが、**松田誠保**・横道高光・横道高宗らが救援に駆けつけ奮戦、結果、為清を捕縛しこの戦いに勝利した。

# 松田家の歴史

1571年、元龜2年(1571)3月11日 松田兵部丞宛て(松田誠保) 連署奉書

亀井鹿介幸盛(山中鹿之助)・立原源太兵衛尉久綱

尼子勝久袖判奉行人連署奉書

(鴻池家旧蔵文書)

1578年播磨「上月城の攻防戦」に参加。

松田家は尼子家直参ではない出雲衆でありながら(竹生島奉加帳) 尼子氏の政治文書に署名が残り、政権中枢で活動していたことがわかる。

安来が本拠地の松田家であったが、文明五年に法吉郷の領有権を認められ、一族がその地に移転した。法吉には松田屋敷と呼ばれる居館跡も残っている。

尼子の政治に参加していた越前守経通や三郎兵衛尉綱秀は安来領家の松田家(そもそも、出雲十旗は禄の順に列記されており、禄高で筆頭にあげられるには法吉郷では不足であるのは明らか。このことから、松田氏は安来にあった元々の所領も確保していたことがわかる)「富田下城衆書立」(佐々木文書)によると誠保は白鹿城落城後も富田城にいて抗戦していた。この時に兵部丞誠保の子息として万千代、千々世の名前も書かれている。

## 山中鹿之助と松田誠保

1562年毛利氏の「出雲乱入」に対し山中鹿之助らが白鹿城城主の松田誠保の救援に駆け付けた。

1569年10月(永禄12年9月)隠岐為清らが美保関で反乱を起こした際(美保関の合戦)、山中鹿之助幸盛らはこれを制圧するため攻めるが、為清に反撃され窮地に追い込まれる。

その後、松田誠保・横道高光・横道高宗らが救援に駆けつけ奮戦、結果、為清を捕縛しこの戦いに勝利した。

出雲国松田家は松田家二代目政基(有経の子)の弟義基は「松田三郎住伯州」とあって、伯耆国(島根県の中中部～西部)に住んだ。別に、有忠は出雲国安来庄地頭職因幡(鳥取県)の松田家、出雲(島根県)安来庄は有忠が承久の乱での勲功の賞として与えられたものである。

**松田誠保の救援に駆けつけた武将** 松田越前守は能義郡(出雲)の国人、竹生島奉加帳。

尼子倫久(1546～1623) 尼子晴久の子。義久の弟。兄とともに毛利氏に降服する。

尼子吉久(?～1554) 尼子晴久の子。義久の弟。兄とともに毛利家に降服する。

宇山久兼(?～1566) 卯山・飛騨守・久信。久秀の子「御家老衆」宇山城主。

石見で家臣筆頭の187700石、息子・久信は美作高田城主。

尼子晴久の四家老のひとり。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

1566年毛利家に通じた罪で尼子義久に誅殺される。

佐世清宗(?) 伊豆守。出雲大原郡佐世郷。「御家老衆」。尼子晴久の四家老のひとり、備後120000石

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

三刀屋宗忠(?～1570) 蔵人助。「御手廻衆」。備中10114石。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

1569年尼子勝久・山中幸隆に加勢。1570年毛利方の「勝間城攻囲戦」で戦死。

牛尾幸清(?～\*1566) 遠江守。御家老衆。1566年毛利家に降服。牛尾城主。

尼子経久、晴久、義久に仕える。尼子晴久の四家老のひとり備前100000石高。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

# 松田家の歴史

大西高由(?~1588) 十兵衛尉、大西高範の子。「近習衆」。「中老衆」。

尼子義久の側近備中 30000 石。大西城主、尼子義久の 6 家老のひとり

1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

本田家吉(?) 四郎左衛門尉・豊前守。「近習衆」。「中老衆」。尼子義久の 6 家老。

出雲\*5000~\*25000 石

1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

立原久綱(1532~1613) 源太兵衛。「近習衆」。「中老衆」。美作 23000 石。

幸隆の弟。尼子義久の 6 家老のひとり (尼子三傑)。

1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

津森幸俊(?) 宇兵衛・惣兵衛・入道。「近習衆」。「中老衆」。「奉行衆」、領地 23000 石。

尼子晴久の家老。尼子義久の 6 家老のひとり。1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し

松田誠保救援に出陣するが敗北。1569 年尼子勝久・山中幸隆に加勢。

<竹生島奉加帳 1547~1564 年の署名>

山中幸盛(1545~1578) 亀井・甚次郎・鹿介。「近習衆」。「中老衆」。山中幸定の子。

尼子義久の 6 家老、20000 石。

尼子義久・勝久の臣。尼子義久の 6 家老のひとり (尼子三傑)。

1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

立原幸隆(1528~?) 備前守・久光、幸綱の子, 弟に久綱。「奉行衆」。「近習衆」。

領地 20000 石。

1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

牛尾久信(?~1586) 太郎左衛門。幸清の長男。(「御手廻衆」。1566 年毛利家に降服。

伯耆 17000 石。

1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。重症をおい

毛利家の捕虜。1566 年毛利家に降服。鱧走城主。のち備前国「宇留津城戦」で戦死。

秋上綱平(?) 三郎左衛門。森山城主、孝重の弟。秋上久家の父、備後国 10000 石。

大庭大宮司家。神魂神社神官。

1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

1566 年義久の降服に従う。1569 年尼子勝久・山中幸隆に加勢。「布部山の合戦」

に敗北、降服。

秋上久家(?) 宗信・庵介・伊織介、綱平の子。「侍大将」、備後国 10000 石。

1562 年出雲国・松田誠保の救援に出陣するが敗北。

神西元通(?~1578) 三郎左衛門。「足軽大将」。神西城主。美作 4667 石。

神西久通の息。1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

熊野久忠(?) 兵庫介、熊野城主、のち毛利家家臣。

1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

1566 年義久の降服に従う。1569 年尼子勝久・山中幸隆に加勢。「布部山の合戦」に敗北、降服。のち毛利家家臣。

真木久綱(?) 宇右衛門・惣右衛門・宗右衛門・(上野介?)。「近習衆」。隠岐守の息か。

1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

亀井秀綱(?~\*1566) 太郎左衛門・能登守。尼子一門衆。経久の家老。

1566 年毛利家に降服。亀井利綱の兄。娘婿に山中幸盛。

1562 年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。



# 松田家の歴史

河副久盛(?～1569) 右京亮・美作守、経久・晴久・義久・勝久に出仕。晴久の家老。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

1569年尼子勝久・山中幸隆に加勢。1569年出雲国「新山城攻囲」に戦死。

森脇清平(?) 長門守。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

平野久利(?～1565) 又右衛門。「近習衆」。「御手廻衆」。

経久・晴久・義久に出仕。1558年石見国温湯城、小笠原氏救援軍として出陣。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

1565年美作国・斎藤玄蕃の「小田草城救援」に出陣するが敗戦、自害。

屋葺幸保(?) 右兵衛・七郎兵衛。奉行衆。尼子晴久の家老。「近習衆」。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

朝山貞綱(?～1562) 出雲太神社大宮司 1562年毛利戦に戦死。出雲芦山城主。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

1562年毛利戦に戦死。

湯野惟宗(?) 湯・信濃守。出雲湯荘を領す豪族。

1562年出雲国・松田誠保の援軍。のち石見温泉津城主。

河本隆任(?) 弥兵衛。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

力石\* (?) 兵庫助。尼子義久の臣。「近習衆」。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

広田\* (?) 入道・藤四郎。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

高尾\* (?) 縫殿允。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

黒正\* (?) 甚兵衛、尼子義久の臣。

1562年毛利家の「出雲乱入」に対し松田誠保救援に出陣するが敗北。

## 出雲松田家と城 白鹿城 島根県松江市法吉町白鹿山



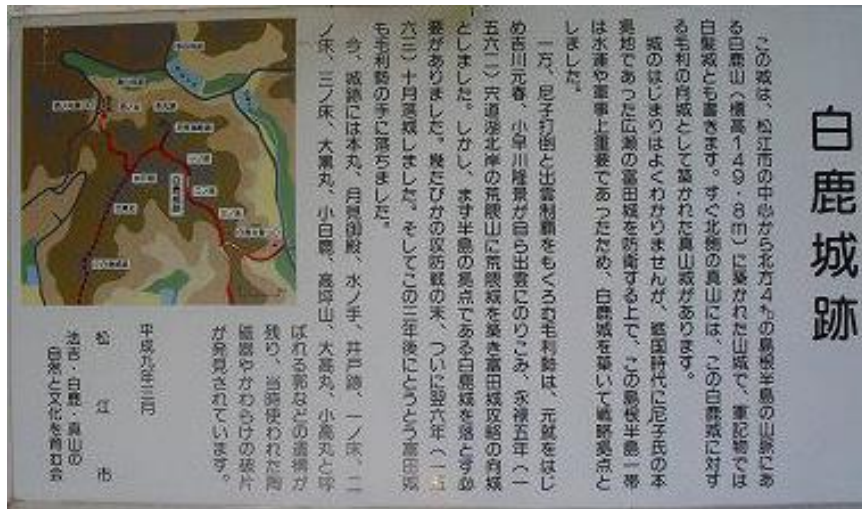
白鹿城址



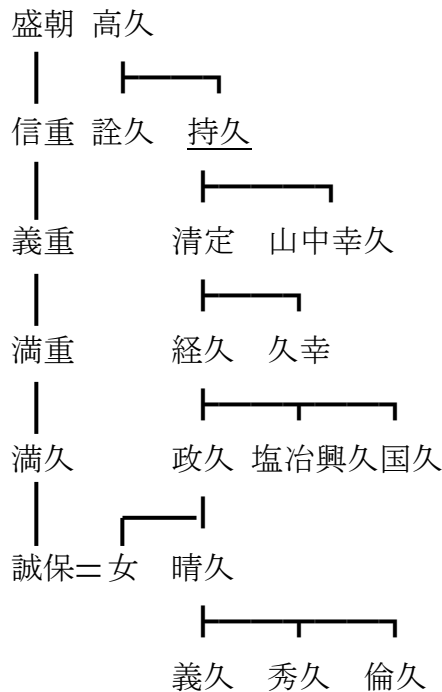
余湖浩一氏作成



# 松田家の歴史



## 出雲松田家・尼子氏略系図



白鹿城は永禄年間(1558年～1569年)に松田満久によって築かれたと云われている。白鹿城は穴道湖の北岸に位置し、美保関・安来郷・法吉郷、穴道湖間の水運を押さえる商業・経済の要衝であり、島根半島の浦々を結ぶ交差点に位置する、経済的に重要な拠点であった。同時に、月山富田城に食料物資を輸送するルート of 要となる所でもあった。尼子氏の支城中、随一といわれた堅城でもあり、尼子十旗中の第一とされ、松田家が城主に当てられた。

永禄5年(1562年)7月、毛利氏の出雲侵攻により米原綱寛、三沢為清、三刀屋久扶らと共に降伏する。ところが、先に降伏していた本城常光が毛利元就に謀殺されたことで、再び尼子氏に帰順した。永禄6年(1563年)8月に毛利元就による侵攻で吉川元春が真山城を向城として築き攻めたて、永禄六年の毛利軍相手の白鹿城攻防戦は、城主・松田誠保以下1千の兵と牛尾久清率いる援兵8百が守っていたが、毛利勢は1万5千の兵力で第1回目の総攻撃を仕掛け、その日のうちに二ノ城(小白鹿城)を落とし、その周囲を平定した。しかし、孤立無援になっていたにもかかわらず、鉄砲装備が充実して

# 松田家の歴史

いた事もあり、八倍以上の毛利軍相手に三か月持ちこたえている。鉄砲伝来二十年後の尼子白鹿城攻めで、吉川元春側の負傷者四十四名の内三十三名が、銃傷だった。

本城は尼子十旗の筆頭といわれるように守りが堅く、容易に落ちなかったため、元就は石見国から大森銀山の鉋夫数百人を呼び寄せ、麓から城内に向けて坑道を掘って本丸に近づこうとした。これを知った誠保は城内から同じく坑道を掘ったが、偶然にも両者の坑道が出会ったため、9月11日に坑道内での戦闘が行われたという。

この戦闘は毛利勢の勝利となったが、坑道は白鹿城兵によって封鎖されたため、使用できなくなった

城主の松田誠保は籠城する一方で月山富田城の尼子義久に救援を要請しており、これを受けた尼子勢は援兵を派遣し、8月19日には城麓の船本で、28日には穴道中蔵で合戦があった。また、9月23日には義久の弟・尼子倫久を大将として亀井秀綱・山中鹿之助幸盛以下1万余を白鹿城の後詰に送り、この軍勢は和久羅付近にまで進出したが毛利両川の軍勢によって撃退され、救援を果たすことはできなかった。（白鹿城の戦い）

これにより籠城兵の士気が喪失したところへ毛利勢は総攻撃を加えて10月13日に小高丸を落とし、水の手を遮断した。このため兵糧だけでなく水までもが欠乏したことから10月29日、父の松田満久と妻は自害し、誠保はついに開城降伏して城から下った。誠保は脱出し隠岐へ渡り、その後も尼子復興のため戦い続けたとも伝えられている。

## 愛宕山城 島根県安来市安来町十神

「十神山城」から南西約1キロほどに位置する小丘が愛宕山城といわれている。

現在 JR 安来駅の西端部に周囲を相当削られた小丘が残り、十神山城主松田氏の支城・砦と伝えられている。

当時古城山と呼ばれていたこの山にも、松田家の城砦が築かれた。

## 十神山城（とかみやまじょう）島根県安来市新十神町

有忠—有基—保秀の城＝海城・十神山城を居城とし、中海最大の港湾・安来、日本海水運の要衝・美保関を掌握して出雲国最大の海上勢力となった。朝鮮に遣使もしている。

応仁2年(1468年)6月20日に、安来庄十神山城を本拠とする松田備前守が、富田城を攻めた。応仁の乱(1467~1477)では山名氏に従って西軍に属し、出雲東部の国人勢力を結集して尼子氏と激突したが、敗れて十神山城を追放された。しかしその後、松田満重が尼子経久に帰順して重用され、尼子十旗の筆頭・白鹿城の城主となる。さらに松田満久が尼子政久の娘（晴久の姉）を娶るとますます尼子氏と密接な関係になる。その後、毛利氏の出雲侵攻に一時降ったものの、すぐに尼子氏に帰参、白鹿城攻防戦で奮戦した。満久の子・誠保は勝久の尼子再興戦にも参加している。



十神山城跡



余湖浩一氏作成

# 松田家の歴史

## 尼子氏と松田家

尼子氏は、京極氏の一族で代々出雲守護代を務めた。京極氏から室町時代中期に分かれた家であり、京極尼子家とも呼ばれる。山陰地方で活動し、戦国大名となった一族である。

15世紀末に守護代を継承した持久の孫・経久は、室町幕府からの税の要求に従わなかったため守護職である京極政経により、文明16年(1484)守護代の地位を剥奪され月山富田城を追われた。新たな守護代として塩冶掃部介が月山富田城に派遣されたが、

文明18年(1486)経久は奇襲により月山富田城を奪い返し、不在の守護・京極氏に代わって出雲の支配権を奪取して、尼子氏を戦国大名に発展させた。

尼子氏歴代が本城とし、山陰・山陽制覇の拠点となった月山富田城はその規模と難攻不落、戦国時代屈指の要害。大内義隆が攻め、毛利元就が攻めたが、力攻めでは落とすことが出来ず、元就との戦いでも結局は兵糧攻めの末に尼子氏が降伏したという事実も記されている。

## 尼子十旗（あまごじっき）

戦国時代、出雲国を支配した戦国大名尼子氏の本城月山富田城の防衛線である国内の主要な十の支城のことである。

- **白鹿城**：松田家：松田満久・誠保 安来郷・法吉郷、白鹿城は中海・宍道湖間の水路を抑える要衝のひとつであり、島根半島の浦々を結ぶ交差点に位置する、経済的に重要な拠点であった。同時に、白鹿城は月山富田城に食料物資を輸送するルートの一となる所でもあった。  
白鹿城は尼子氏の支城中、随一といわれた堅城でもあった。この為、尼子十旗中の第一とされ、松田家が城主に当てられた。
- 三沢城：三沢氏。
- 三刀屋城：三刀屋氏、備中 10114 石。
- 赤穴城（瀬戸山城）：赤穴氏。
- 牛尾城：牛尾氏 家老衆牛尾 幸清(遠江守)備前之内十万石、お手廻り衆牛尾 太郎左衛門 伯耆之内一万七千石、同牛尾弾正大弼 松江の内三千七百三十二石。
- 高瀬城：米原氏：、尼子御手廻り衆 17500 石。
- 神西城：神西氏：美作の内 4667 石。
- 熊野城：熊野氏。
- 馬木城：馬來氏（真木氏）
- 大西城：大西氏（だいさいし）：出雲州衆 30000 石。

## 「資料の声を聴く、戦国期の出雲松田氏」より抜粋、

応仁・文明の乱と尼子氏の問題を考える際に重要となるのが松田氏である。軍記物は応仁・文明の乱については全く言及しない。そして、毛利氏の出雲国攻め以降は松田氏に関する記述が増えるが、それ以前において、松田氏はほとんど登場しない。

元龜2年(1571)3月の尼子勝久袖判奉行人連署下知状は、松田氏領を従来支配していた本領と新給分に分けて記している。前者についてみると、島根郡(生馬・比津・法吉・西之村・市成村・末次之内森分)、秋鹿郡(伊野)、楯縫郡(小境)という宍道湖・大橋川の北岸の所領と、安来地頭分と隠岐国賀茂からなる。併せて島根三郡奉行(前記の3郡であ

# 松田家の歴史

ろう)でもあった。新給分は、全く新たな所領と、本領(安来地頭分・法吉・末次)の中で一部が他氏に与えられていたものを返すものからなる。その中に松田氏本領である末次の4分1を与えられていた孫三郎殿と、御在陣・御在番の時、誠保と同前の扱いとされた三郎次郎殿が注目される。この二人の人物も松田氏一族の可能性が高いが、この時点では勝久方となっただけではなかったのだろう。当然のことながら、松田氏も複数の家が存在していたはずである。

出雲松田氏については独自の系譜類もほとんど残っていないが、誠保は尼子政久女子を妻としていたとされる(米原氏、岡崎氏)。尼子氏に近い立場であったといえるが、その意味で、竹生島奉加帳にみえる出雲州衆松田越前守が注目される。この人物は安芸国吉田攻めの際には先遣隊として吉川氏などと連絡をとりながら毛利方と戦っており、その名「経通」からも、尼子経久との強い関係が推定される。出雲州衆でありながら、富田衆の有力者湯原幸清と同様の活動を行っているのである。

ただ、このような状況が長谷川氏の説かれるように応仁・文明の乱の結果であるとみるのは早計である。松田三河守の後継者として、大永4年(1524)に宮内少輔に任官している藤原宗政に注目しなければならない。この人物はこの時点で、鎌倉期の安来庄地頭補任に関する文書も保持していたのである。安来庄地頭職が松田氏から尼子氏へ交替した場合、文書も尼子氏方に渡されるはずであり、宗政はこの時点で安来庄地頭で法吉郷も支配していたことになる。後に関係文書を入手した日岬者では、宗正を日岬車検業としてその権威づけに利用し、松田有基が「安来」庄地頭職を安堵された文書を、日御崎社が権利を主張する「大野」庄地頭職の安堵の文書に利用し、「藤原」有基を「日置」有基と改変している。松田氏と日御崎社が後に何らかの関係を持ったことにより、文書を入手したのだろう。

ともあれ、同時期の出雲国の国人で「～少輔」への任官が確認できるのは、尼子氏(経久・政久・国久・興久)と塩冶氏(宮内少輔)・宍道氏(兵部少輔)であり、松田宗政の政治的地位の高さがわかる。この宗政と経通との間に、松田氏と尼子氏との関係が変化した可能性が高い。松田氏は尼子家直参ではない出雲衆でありながら(竹生島奉加帳を参照)尼子氏の政治文書に署名が残り、政権中枢で活動していたことがわかります。

松田氏について言えばその重要度は、雲陽軍実記に記述のある出雲十旗の筆頭として挙げられていることに示されています。筆頭の白鹿城は、松田左近将監満久が城主だったからです。

白鹿城址(松江市法吉町)。右側の峰が本城で、左の峰が小白鹿城。はじめに小白鹿城が建設され、時代が進むにつれて城域を広げたと考えられている。白鹿城城塞群は周辺の峰峰に設けられた出城を包含した連郭式山城で、その城域は相当に広い。

安来が本拠地だった松田氏ですが、文明五年に法吉郷の領有権を認められ、一族がその地に移転したようです。法吉には松田屋敷と呼ばれる居館跡も残ります。白鹿城の築城年代は定かではありませんが、文明五年以降であろうと考えます。もっとも、拠点となる安来には惣領家など一族が残っていたと思われます。尼子の政治に参加していた越前守経通や三郎兵衛尉綱秀は安来領家の松田氏だと思われます。(そもそも、出雲十旗は禄の順に列記されており、禄高で筆頭にあげられるには法吉郷では不足であるのは明らか。このことから、松田氏は安来にあった元々の所領も確保していたことがわかる)

法吉郷の取得を松田氏が望んだ理由は、ここが古代から開けた土地であっただけでなく(興味を引くことだが、松田屋敷跡の正面は、律令時代に開かれた条里田が広がっている)、中海・宍道湖間の水路を抑える要衝のひとつだったことおよび島根半島の浦々を結ぶ交差点に位置する、経済的に重要な拠点であったことがあります。同時に、白鹿城は月山富田城に食料物資を輸送するルートの要となる所でもありました。



## 松田家の歴史

そのような要所を守る城主でしたので、尼子経久も政略をもって関係強化を図ります。嫡子である政久の娘（尼子晴久の姉）を、白鹿城主松田左近将監満久に嫁がせたのです。毛利元就が出雲に侵攻した際、月山富田城を攻撃する前に白鹿城の攻略に着手したのは、後顧の憂いを断つためと、月山富田城の糧道を切断するためでもありました。

永禄六年、宍道湖北岸の洗合城に進出した毛利軍は白鹿城攻撃を開始します。毛利軍は一万八千、対する白鹿城衆は二千人足らず。勝敗は目に見えていましたが、城主の松田左近将監満久、その弟普門西堂、左近満久の嫡子である兵部丞誠保らは奮戦し、三ヶ月の間城を守りました。軍記物では、矢文合戦や、毛利方が石見銀山の鉦夫を動員して坑道を掘って水の手を切ろうとすると、城からも坑道を掘って地中で迎撃する「もぐら合戦」など、多彩で激しい攻防戦が繰り広げられています。地中戦というのは軍記の脚色のようにも思えますが、実際に毛利家中の武将の覚え書きに記録があります。また、法吉村誌では、明治十年頃に白鹿山を探訪した旅人が、白鹿山の蘭洞尾崎というところで坑道を見つけ、そこからは水が流れ出ていたという話が載っています（わたしは残念ながら、まだ探し当てていないのです）。史料を見るならば、白鹿城攻防戦での永禄六年九月付吉川元春手負注文で、ある戦闘における吉川軍の将兵に「死 傷者 52 人そのうち 5 人戦死。負傷者は刀傷 1 名、矢傷 6 名、礮傷 5 名、鉄砲傷 33 名」が出たことが記録されています。このことから白鹿城側には鉄砲装備が充実しており、果敢に防戦していたことがうかがえます。とはいえ、防衛の頼みだった月山富田城からの援軍は、永禄六年 8 月 15 日の馬潟原の戦闘であっけなく敗退したので、結果的に白鹿城は見殺し状態になり、矢玉も尽き水の手も切られてしまったことでもはや抗戦できず、城は陥落。満久の妻である尼子晴久の姉と普門西堂は自決。

一方、左近満久と嫡子兵部丞誠保は城を脱出し、中海のほうを目指して逃走します。中海は松田氏の制海権のうちにありましたし、海路で安来もしくは月山富田城に戻って再起を図るつもりであったのだらうと考えられます。その逃亡ルートから考えると、松田父子と主従が目指したのは現在の新庄町、わたしが以前に探索した海賊城である新庄城山城だった可能性もあります。

逃走中に、細工峠というところで毛利軍の追っ手に追いつかれた松田父子は、満久が命がけで血路を開いて誠保を逃がし、満久と供の者は細工峠で討死しました（左近が討たれた所なので「最期峠」、それが転訛して「細工峠」になったともいう）。

雲陽軍実記によると誠保は島根半島の山脈を越えて隠岐に逃れたと記述されていますが、史料「富田下城衆書立」（佐々木文書）に名前が出ており、尼子義久が降伏して月山富田城を明け渡した時点で富田城にいたことが明らかになります。白鹿城落城後も富田城にいて抗戦していたのです。この時に兵部丞誠保の子息として万千代、千々世の名前も書かれています。子息が幼名であることから考えても誠保が比較的若年であったことがうかがえます（白鹿城の案内板や地元資料のいくつかに、白鹿城主は「尼子晴久の姉婿松田左近誠保」と書かれているのだが、婚姻するには年齢層が合致しないし、史料などを見ても誠保が「左近将監」を号したことはない）。富田城開城後に松田誠保が隠岐に退転したのは、松田氏が隠岐の国人たち（隠岐海賊衆）との結びつきがあったからと考えるのは難しくないと思います。

後に、尼子勝久、山中鹿介らが出雲奪還を目指して挙兵し、隠岐に渡ったときに、松田誠保も尼子再興軍に加わり戦いますが、尼子再興軍が出雲からの撤収を余儀なくさ

# 松田家の歴史

れると同時に再興軍を離脱。その後は武士を捨てて野に下ったとも、赤穴氏の客分になったとも伝えられます。松田左近将監満久とその息子兵部丞誠保は、松田一族の惣領家ではなかったと思われませんが、尼子氏の防壁を担う武将としての役割をつとめ、尼子再興軍でも働きを見せた、勇敢な尼子武士の一員であったといえます。

「近習番」とは、鎌倉幕府において将軍にそば仕えする御家人のこと。

九条頼嗣(鎌倉幕府 5 代将軍)の近習番：

1250 年            波多野宣時、  
                      波多野時光、  
                      波多野宣経、  
                      波多野秀頼

宗尊親王(鎌倉幕府 6 代将軍)の近習番：

1252 年 4 月 御格子番 波多野宣時、  
1257 年 12 月 伺見参番 波多野定康、  
                      御格子番 波多野時光、  
1260 年 1 月 昼番        波多野宣経

波多野経朝、

1182 年～1219 年頃、源頼家・実朝両将軍に仕え、両将軍の近習となった。

☆☆

## 「城郭用語」

- 曲輪(くるわ)：城や砦の区画を指し、周囲を土塁や柵で囲まれている。  
山城では、尾根などの傾斜地を削ったり盛り上げたりして平らな曲輪を造りだしている。
- 枳形(ますがた)：門と門に囲まれた通路幅以上の広がりを持つ方形の空間。
- 堀切(ほりきり)：尾根や台地の鞍部に敵の移動を妨げる目的で、通路を遮断するようにV字形に掘られた堀。
- 塹堀(たてぼり)：斜面の方向に沿って、縦方向に設けられた堀。横移動を防ぐほか、外敵の侵入路を限定し、城側からの攻撃をし易いくする役割も持っていた。その他にも通路や排水路としての役割を持っていた。
- 帯曲輪(おびぐるわ)：細長く帯状の曲輪。
- 土塁(どるい)土を：幾層も突き固めたりしながら盛り上げた土手状の防御施設。
- 虎口(こぐち)：曲輪の入口。
- 大手・追手(おおて・おうて)：城の表口のこと。表口への道を大手道といい大手以外は搦手(からめて)という。
- 空堀(からぼり)：水のない堀。

☆☆

# 松田家の歴史

## 高岡松田家

時代は遡るが、憲貞の弟弾三郎秀也は高野山を下りた後医師に転身した。初め前田氏に仕えて、医師松田家は金沢で開業、後に氷見、高岡へと転居した。その後七代目教之助(1743～1819)の代に1779年十一代加賀藩主前田治修公の世継、数千代君(後の斎敬公)が2才の時に眼病を患ったが、御殿医の力及ばず困った藩の重臣達は利家公以来の家臣の家柄である眼科医松田教之助と、小児科医金子怒謙の両医を高岡から呼び診察させた、その後、藩主の世継を治したとあって、藩内の隅々から患者が押しかけたとのことである。当時より現在迄継続して子孫も医師として活躍している。最初高岡松田家は金沢の法光寺を菩提寺としていたが、後に前田氏開基の高岡瑞龍寺を菩提寺としている。

高岡松田家の略系図(家紋「丸に二引き」)

憲秀—初代弾三郎秀也—2代三知—3代勝之進—4代友之進—5代文太郎  
—6代文五郎—7代教之助—8代大一郎—9代正之助—10代逸齋  
—11代三修—12代準三—13代甲子太郎—14代純一郎—15代知夫

## 埼玉松田家——系図 11 ページ

埼玉松田家は松田左京亮康吉を祖としている。康吉の子松田佐左衛門は現在の埼玉県春日部～杉戸～幸手、にかけての広大な土地の開墾に当たっていたが、途中で亡くなり、兄方の松田喜左衛門が入郷。松田佐左衛門が松田寺(ショウデンジ真言宗智山派)を開基。開墾時の「寺掘組」は現在「寺堀団地」となり、「佐左衛門」の名は「杉戸町佐左エ門」として地名に残っている。現在の杉戸町佐左エ門の人口：544名、171世帯。

## 松田源吾 (?～1852)

松田源吾義教は葛飾郡佐左衛門村(北葛飾郡杉戸町)光景の次男である。

江戸に出て柳剛流流祖岡田惣衛門奇良に柳剛流を学び松田派を興す。

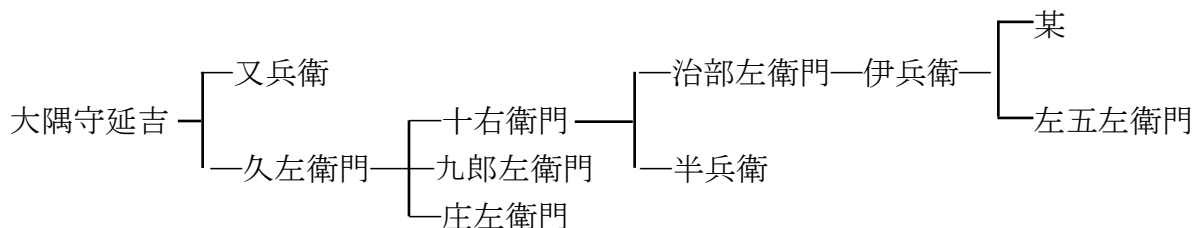
江戸と郷里に道場を構え、門人は1500人ほどであった。

氷川女体神社に奉納額を献じた柳剛流師範家・綱嶋家は、初代である綱嶋武衛門尉源元治が、流祖・岡田惣衛門奇良の高弟である松田源吾義教から柳剛流を学んだ。

現在、綱嶋家には、天保2(1838)年に松田源吾が綱嶋武衛門に出した貴重な資料である「柳剛流剣術目録巻」や「神文帖」が、『綱嶋家文書』として残されているという。

## 群馬松田家

1582年以降北条氏が上野国を制圧すると松田康秀が吉井城にいた。また、1584年頃北条配下の箕輪衆として松田大隅がいた。前橋市総社町と群馬町の松田家は武田信玄に属した。松田延吉が戦功により総社の地を与えられた。



「高崎近郷村々百姓由緒書」

松田重右衛門が書いたものもあり、祖と仰ぐ松田大隅守延吉らについて提出した。それによると「松田大隅は上州の内、町谷・大島二郷を領知・・・」とあり、武田信玄に仕えて、その家臣である箕輪城主内藤大和守の下につき、町谷(町屋)・大島の地を領していた時期があった。

# 松田家の歴史

## 甲斐松田家

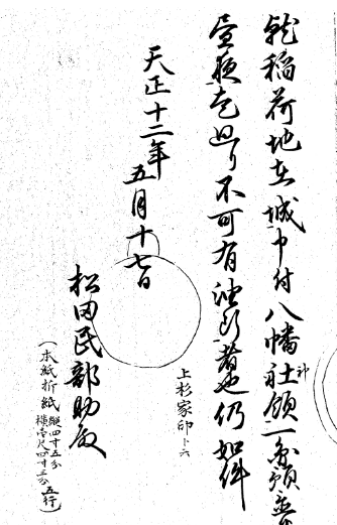
備前松田家の庶流で戦国時代初期に関東に移り、北条氏の家臣になった一族である。武田勝頼の正室となった桂林院(北条夫人)の政略結婚の時に子供をした家臣もいた。備前松田家一族の誰かが武田信玄や武田勝頼の家臣になったものと推定される。

## 長野松田家 (現在の松田家住宅は長野県の県宝に指定されている)

更埴市八幡の武水別神社八幡宮の宮司職松田家は戦国時代に武田信玄に仕えた。

1584年に八幡神領一帯を授けられた。同族にNHK歌のおばさん松田トシがいる(1915年3月7日~2011年12月7日 96歳没)

天正12年(1584)5月17日上杉景勝朱印状写 信濃寺社文書  
松田民部助殿



松田トシ氏

## 波多野氏

波多野氏は藤原鎌足より12代目の藤原公光が相模守となった。その子経範が初めて波多野姓を名乗った。藤原氏が中流貴族として代々関東地方の国々の国司を歴任したのち、経範のとき、藤原摂関家の所領となっていた波多野(はたの)荘の預所(あずかりどころ)として同地へ土着し、在地名をとって波多野を称したものである。波多野荘は、神奈川県相模湾から少し内陸に入ったところにある盆地で、ほぼ現在の奏野(はだの)市の位置にあたる。相模松田家は経範より8代目の成家が松田家初代となる。

波多野氏5代目義通の妹坊門姫は源義朝の室となり、源頼朝の兄朝長を生んだ。

波多野氏は、関東武士で、**波多野義通**は保元の乱では源義朝に仕えるが、その子**波多野義常**は、治承四年(1180年)8月源頼朝が石橋山で平氏打倒の最初の兵を挙げたときには、平氏方につき、10月頼朝からの追及をうけて自刃した。しかし、**波多野義常**の弟**波多野忠綱**は、源氏方に転じて平氏方の江田氏を討って父の所領を安堵されている(『吾妻鏡』)。**波多野義通**の兄弟や子から松田・大槻・大友・河村・菖蒲・沼田・広沢・渋沢・小磯・柳川・平沢・栢山・曾比などの諸家が分流し、秦野盆地を中心に相模国中西部を総領体制で固め、鎌倉時代源氏の有力御家人として勢力をふるった。

『吾妻鏡』には**波多野**氏一族の名を八十数カ所に見ることができるが、前述の**忠綱**の先陣争いなどの武勇談のほかに、一族の文化的素養をしのばせる記事も多い。すなわち、建暦三年(1213年)2月、三代将軍源実朝が昵懇(じっこん)の祇候(しこう)人の中から「芸能の人」18人を選んで学問所番人に任命しているが、その一人に**波多野経朝**の名が見えるし、



# 松田家の歴史

四代将軍藤原頼経も和歌会を催すにあたって、しばしば「和歌に携わる」**波多野朝定**を参加させている。また、僧道元が越前国の志比荘内に有名な曹洞宗永平寺を開いたのは、彼に師事していた同荘の地頭**波多野義重**の勧誘によるものである。ついでながら『千載和歌集』には**波多野秀遠**や**波多野経因**の歌を載せている。

秀長は1467年応仁の乱で東軍細川勝元に属し、その戦功により丹波多紀郡を与えられた。植通は1515年朝治山に八上城を築城し本拠地とした。秀治は1568年より織田軍に加わり、織田信長の為に働いたが、比叡山延暦寺の焼き打ちを始めとした信長の所業に嫌気がさし、1576年より信長と敵対した。一時は織田軍を撃退したが、1579年秀治は降伏し、波多野氏は滅亡した。

## 六波羅評定衆波多野氏

寛元二年（1244年）4月藤原頼経は28歳の若さで、わずか7歳の子頼嗣に将軍職を譲られ、翌3年7月に出家し「大殿」と呼ばれた。翌4年正月幼い将軍頼嗣が初めて甲冑を着ける儀式が行われ、執権経時のほか**波多野義重**・**波多野盛高**の二人だけがこれに侍した。

この年5月、恒例の新日吉社小五月会が京都で行われ、その流鏑馬（やぶさめ）役を重時以下の在京人が勤めた。一番の頭人は重時、三番の頭人は**波多野出雲前司宣政**であった（系図に義重が宣俊と名を改めたとあるが、これは宣政で、『承久記』に信政とあるはこの宣政で、彼ははじめ義重といたのである）。**宣政（義重）**の射手は千次郎左衛門尉藤原盛忠、的立は**波多野左衛門尉藤原広能**が勤めた。**波多野広能**は紀伊国三上庄勢多郷半分地頭であったが、同郷は平家没官領で頼朝が隨身兼平に与え、その孫のとき没収し、**波多野広能**と金持広澄に与えられたものであった。**盛忠**も波多野氏の一族と思われるが、**広能**とともに系図類には見えない。これを最後に重時は京都を去った。この年鎌倉では宝治合戦の影響で例年8月15日に行われる鶴岡八幡宮の放生会が延期され、11月に行われた。15日同宮へ参詣する将軍頼嗣に供奉した随兵の先陣の筆頭に**波多野義重**があった。翌日この**義重**の次に随兵として供奉した三浦盛時は、行列の順位を不満として幕府へ訴えた。三浦盛時は「当家代々いまだ（他人に）超越」されたことがないと訴え、それなのに「一眼の仁」（**義重**）の下に位置づけされたことと主張した。**義重**は「累家の規模においては誰が比肩」できよう、一眼は承久の乱での負傷で名誉の疵であるとの言葉に怒って反発した。結局、小侍所別当北条実泰〔実時の誤り〕が時頼・重時と相談し、従五位の**義重**が上になるのは当然と決定した。**義重**はなおも言い分があると申し立てたが、説得されてようやく落ち着いた。

建長三年（1251年）8月将軍頼嗣が犬追物を催したが、安達義景と**波多野義重**が検見役を勤めた。翌四年3月頼嗣は将軍職をやめさせられ、代って皇族将軍として宗尊親王が鎌倉へ下向した。京都から北条長時それに長井泰重・佐々木親清と**波多野義重**が親王に供奉した。同五年（1253年）京都新日吉社の小五月会での流鏑馬に、長時はじめ長井泰重らと**波多野義重**が当番を勤めている。泰重は六波羅探題の評定衆であった。『秀郷流系図』は**波多野義重**を六波羅「評定衆」としている。十二月京都法勝寺の阿弥陀堂供養で、南大門を二階堂行有ら、西二階門を長井泰重ら、西北門を武田一族ら、北門西脇を小笠原一族らが警固した。**波多野義重**は小早川茂平と北門の警固にあたった。この**義重**が鎌倉に滞在していた宝治元年（1247年）8月、越前国の永平寺から道元が鎌倉を訪れた。

# 松田家の歴史

この鎌倉下向は**波多野義重**と記主禅師良忠（鎌倉光明寺開山）の懇請によるものであった。道元は鎌倉名越の白衣舎（俗家）に入ったが、ここは**波多野義重**の館であったという。建長二年（1250年）十二月将軍家の近習衆に**波多野時光**と兄**宣時**、彼らの従兄弟**秀頼**が撰ばれている。同四年**波多野宣時**は鎌倉御所の御格子番衆に選ばれた。正嘉元年（1257年）将軍家の御所の問見参衆に**波多野定康**、御格子上下衆に**波多野時光**が加えられた。近習番・御格子番・問見参番等はいずれも御所内で御家人が勤める番役で、問見参とは申次番のことともされている。この年京都の新日吉社小五月会で行われた流鏝馬は、北条長時に代って六渡羅探題となった北条時茂、そして**義重**らがその番頭を勤めた。

弘長三年（1263年）のころ探題北条時茂は**波多野五郎左衛門尉**に訴訟のことで証人の召喚を命じている。その**波多野五郎左衛門尉**は守護にあてて訴訟の当事者を上洛するよう伝えている。彼は**波多野義重**の子**宣時**に推定される。建治三年（1277年）12月幕府は六波羅評定衆を任命した。そのうちに**時光**があった。

京都六条八幡宮造営注文のうち、建治元年（1275年）5月の注文に造営役を負担した関東御家人として、在京人28名に**波多野出雲前司跡**（十貫文）と**波多野弥藤二左衛門尉跡**（四貫文）の名がある。前者は**義重**の遺跡を示し、後者は**波多野盛高**である。**盛高**は和泉同軽部郷の新補地頭であった。また同注文に相模国御家人（33名）として**波多野小二郎入道跡**（五貫文）・**波多野中務丞跡**（五貫文）それに**河村人々**（七貫文）・**松田左衛門尉跡**（五貫文）が造営役を課せられている。なお治田小太郎跡（五貫文）とあるは**沼田小太郎**跡と思われる。

## 波多野忠綱と3代将軍実朝の御首塚

承久元年（1219）正月27日夜、3代将軍源実朝は、鶴岡八幡宮の年頭の式に出席した帰りに、石段の所で兄頼家の遺子公暁により暗殺された。公暁は実朝の首を抱えて逃走し、三浦義村の屋敷にむかったが、義村には北条氏より公暁追討が命じられており、そこで討たれた。三浦氏の家臣長尾定景父子と共に三浦義村より公暁を討ち取る命を受けた武常晴は、偶然に、実朝の首を得る事が出来た。武常晴は、三浦氏と仲の悪かったので**波多野忠綱**を頼り秦野の地に来て埋葬したと伝えられている。それが、現在東田原にある実朝の御首塚である。その後波多野氏は、実朝の三十三回忌に金剛寺にお堂を増築し、首塚を飾っていた五輪木塔を石塔に替え、阿弥陀堂に移した。なを首塚を飾っていたと伝えられる五輪木塔は、現在、鎌倉国宝館に収蔵されている。

## 松田家・波多野氏が担当した室町幕府内の役職

評定衆：評定所に出仕して、執権、連署と共に裁判、政務等を合議した。

公人奉行（くにんぶぎょう）：奉行人の筆頭で、諸奉行人の進退や執務に関する事務を司った役人。

奉行人（ほうこうにん）：将軍の命を受け公事や行事を執行する役人。

政所執事代：政所（幕府財政・田地・民事裁判などを司った役職）の次官で、  
政所寄人の筆頭。

右筆方奉行人：文書事務官。

守護、守護代：幕府より一国の管理を任された有力武士。守護は在京が原則とされ、応仁の乱まで現地の政治は守護代が代行していた。半濟令により強大な権力を持つようになり、守護大名と呼ばれるまでに至った。

# 松田家の歴史

## 波多野氏で活躍した人々

**波多野経範** (997?~1057) 公俊、官位：従五位下、左衛門尉、兵庫助、波多野氏の祖。

父：佐伯経資、母：佐伯氏、妻：相模国守藤原公光娘

**波多野経秀**、(生没年不詳) 官位：従五位下、民部丞、父：波多野経範 母：不詳

「後三年の役」に参加し波多野庄を領有する

**波多野秀遠**、(1087~1137?) 官位：従五位下、刑部丞、父：波多野経秀、

**波多野遠義**、(1107?~1167?) (1109?~1159?) (1111?~1131?) (1113?~1163?)

官位：従五位下 筑後守、父：波多野秀遠、母：一宮紀伊の女、筑後守、

**波多野義通**、(1107?~1167?) 父：波多野遠義、母：鎮守府將軍藤原師綱の女、

妻：伊勢守光定の女(義職の母)、

**波多野実方**、(1113?~1163?) 波多野余三、遠義の子、広沢家の始祖。

奥州征伐に従軍する。

源頼朝上洛に後陣として従事する。

源頼朝の東大寺供養参列に随兵として従事する。

武蔵国大蔵谷の戦いにより武蔵国広沢を賜わる。

**波多野義景**、(1135?~1215?) 波多野義通の弟

義通から波多野本庄北方を譲られる。

奥州征伐に際して所領を幼息に譲ることを願い出て許される。

源頼朝に対し所領譲与に関する異議申し立てを行い受理される。

奥州征伐に従軍する。

二所参詣の際に供奉する。

公頭僧正の接待・警固に従事する。

源頼朝の富士野の狩に従事する。

源頼朝の東大寺供養参列随兵として従事する。

御所南庭で開催された相撲三番に参加する。元久3年/建永元年

1206年、源実朝が殿中で相撲を興行した際、奉行人を担当した。

**波多野盛高**、(1159?~1209?) 父：高義、左兵衛尉に任官し、母は波多野義景の娘。

藤原頼経に近侍、

將軍頼嗣の甲冑着始めの儀に従事。

承久の乱の勲功により和泉国軽部郷の地頭となった。

宇治橋の合戦で京方の軍兵一人を手討ちにした波多野盛高は、父高義「大槻」を名乗ったとあるので渡多野庄内大槻郷を本領とした。

河村藤三郎秀基とともに盛高は「強弓・強力」をもって知られたが、両人は義兄弟の間柄であった。宇治川合戦の功績により行賞される。

將軍頼嗣の甲冑着始めの儀に従事。

**波多野盛通**、(1165?~1213) 三郎盛通、太郎、弥次郎、父：義景、妻：横山時兼の女、和田義盛の乱では妻が横山時兼の女であった関係で、和田義盛方について活躍したが、討ち死にした。

3巻元暦元年(1184)五月十五日

壬寅

申の刻、伊勢の国の馳駅参着す。申して云く、去る四日、波多野の三郎・大井兵衛

# 松田家の歴史

次郎實春・山内瀧口三郎、並びに大内右衛門の尉惟義家人等、当国羽取山に於いて、志田三郎先生義廣と合戦す。殆ど終日に及び雌雄を争う。然れども遂に義廣の首を獲ると。この義廣は、年来叛逆の志を含み、去々年軍勢を率い、鎌倉に参らんと擬すの刻、小山の四郎朝政これを相禦ぐに依って、成らずして逐電し、義仲に属かしめをはんぬ。義仲滅亡の後また逃亡す。曾ってその存亡を弁えざるの間、武衛の御憤り未だ休まざるの処、この告げ有り。殊に喜ばしめ給う所なり。（吾妻鑑）

源頼朝の東大寺供養参列に随兵として従事する

畠山重忠の援助により勝木七郎宗則を生け捕りにする

勝木七郎宗則生け捕りの件について功を賞される

和田合戦に際して腰越の陣に赴き参戦する

和田合戦において和田方として戦死

**波多野経家、四郎経家、**（生没年不詳）鎮西から鎌倉に戻る。

4 卷元暦二年(1185) 四月十四日

丁卯

大蔵卿泰経朝臣の使者関東に参着す。追討無為、偏に兵法の巧に依るなり。叡感少彙の由申すべきの趣、院宣を被る所なりてえり。武衛殊に謹悦し給うと。今日、**波多野の四郎経家**（大友と号す）鎮西より帰参す。これ齋院次官親能の舅なり。

則ち御前に 召し、西海合戦の間の事を問わしめ給うと。（吾妻鑑）

**波多野義典、**（生没年不詳）

伊勢神宮に祈願のため派遣される。

伊勢神宮からの帰還途中に公暁が討ち取られた時に三河国の矢作宿で波多野義典が自殺する。

地頭として所有していた領地は収公される。

**波多野定憲、**（生没年不詳）

地震などの祈祷に際し八文字殊法を修す。

明王院落慶法要に参堂する。

勝長寿院再建の法要に参堂する。

鶴岡八幡宮仁王会の請僧として供奉する。

波多野忠綱の子定憲は元仁二年(1225 年)定舜から鶴岡八幡宮供僧職（永金坊のちに永巖坊）を譲られ、安貞三年（1229 年）正式に同宮供僧に任ぜられた。

同供僧永金坊は定豪がはじめて任ぜられ、弟子定舜に譲られ、ついで波多野定憲が供僧となったものである。波多野定憲はこの定豪から伝法灌頂（密教の奥儀授ける儀式）を受けた。

**波多野忠綱、**（生没年不詳 ～ 建保三年(1215)？没年令不詳）小太郎中務丞忠綱、父：義通、

源頼家・実朝両将軍に仕えた。

波多野義常の弟。従五位下、中務丞。

伊勢で平家方の伊豆江四郎と戦う。

勝長寿院開堂供養に随兵として従事する。

源頼朝上洛に先陣として従事する。

梶原景時糾弾の一人として連書状に名を連ねる。

仁田忠常討伐に際して弟五郎を討ち取る。

畠山重忠の乱に後陣として従軍する。

幕府南西政所前の戦いにおいて和田義盛の軍を退ける。



# 松田家の歴史

和田との合戦における論功行賞を認められ子の経朝が受賞の恩恵に預かる。

源頼朝の大江広元邸から御所への移動に随兵として従事する。

源頼朝の六字河臨法参加に際して随兵として従事する。

**1182年～1219年頃**、建長2年、金剛寺を開基し、源実朝の冥福を祈った。実際には子の経朝が建立。

和田義盛の乱では幕府方について活躍した。

北条義時から葦毛馬(河洲)を拝領した。

**波多野義通**の子**忠綱**について、『吾妻鏡』は次のようなエピソードを伝えている。建保元年(1213年)、北条時政は、幕府創立以来の重臣和田義盛を二日間の激戦の末これを滅ぼした。いわゆる和田合戦である。この戦いで、**波多野忠綱**は北条方について御所の西南政所での戦いでその先頭に立ち、駆けつけた三浦義村とともにめざましい奮戦ぶりを示した。和田氏が敗れた原因の一つに、同族の三浦義村の寝返りがあった。戦いの終わった翌五月四日、早速合戦の論功行賞が行われたが、そのとき**波多野忠綱**と三浦義村の兩人共に政所前の合戦での先陣は自分であったと主張して譲らなかった。困った北条義時は、ひそかに**忠綱**を別室へ招き、先陣は**忠綱**であることは分っている。しかし、このたびの戦いに勝利を得ることができたのは、ひとえに三浦義村の寝返りによる。それ故、先陣の功名は義村に譲ってやってくれ、その代わり後日**忠綱**にはそれなりに恩賞をとらせるから、と説得したところ、**忠綱**は「勇士の戦場に向かうは先登をもって本意となす。**忠綱**いやしくも家業を継ぎ、弓馬に携わる。何度といえども、なんぞ先登に進まざらんや。一時の恩賞に耽(ふけ)り、万代の名を汚すべからず」ときっぱり拒否したので、やむなく両者は将軍や武将の前で対決となり、**忠綱**、義村ともに自分の主張を述べたが、その戦いに加わっていた多くの武将が、先陣をきったのは、赤革威(おどし)の鎧に葦毛の馬に乗った**忠綱**であったと口を揃えた。しかし、幕府は、多くの武将に恩賞を与えたが、**忠綱**には何も与えなかった。というのは、「無双の軍忠にたいしては御疑いに及ばずといえども、御前において対決のとき、義村をもって盲目と称し、悪口をなすうえは、もって賞を加えず、罪科に準ずべきの由」ではあるが特別をもって罪科だけは許す、という結果に終わった。

このエピソードには経済的な利益よりも、一門の名誉と戦場での武勇を誇りとする鎌倉時代の武将の面目をみることができる。

相模国に勢力をもっていた波多野氏は、北条氏の力におされて次第に同国での勢力を失い、**忠綱**の子**波多野義重**が越前国守護および同国の志比(しび)荘の地頭に任ぜられてその地へ下向し、同じく**忠綱**の子**波多野経朝**も丹波国へ移り同国一円に勢力を張った。

**廣澤實高**、左衛門尉**實高**、

建暦3年(1213)6月25日 甲午

**廣澤左衛門の尉實高**備後の国より帰参す。これ海陸の賊徒蜂起せしむの間、これを相鎮む。去々年使節として彼の国に下向す。而るに志を義盛に通じ、征箭尻百腰を用意せしめ送り遣わすの由、讒訴出来す。在京の士に仰せられ、その身を誅すべきの趣御沙汰に及ぶ。實高これを知らず、今日すでに参着せしむる所なり。朋友等の密告を得て、則ち**波多野中務次郎経朝**以下一族相共に御所に列参す。廣元朝臣に属き陳じ申して云く、征箭の事に於いては、全く彼の賄いに備えず。義盛侍別当として、別の仰せと称し相催すの間、別忠の由を存じこれを遣わしをはんぬ。且つは義盛が状分明なり。

早く讒人を召し決せられ、この外もし同意の證拠有らば、實高刑を免がれ難からんか。

# 松田家の歴史

然らずんば讒者の過、争か黙止せられんやと。義盛の書状を御覧に及び、仰せの字を載するの上は左右に能わず。實高多年昵近の奉公するの間、兼ねて貳無きの由を知ろし食しをはんぬ。今また陳謝の趣その理有り。元の如く近々に候すべきの旨、直に仰せ含めらると。  
(吾妻鑑)

**松田義常、(義経)、(1137?~1180)** 官位：従五位下、右馬允、父：**波多野義通**、  
1180年、**松田義常**、松田郷にて自刃、子の有経は伯父大庭景義の保護で難を逃れる。  
(吾妻鑑)

1252年4月宗尊親王の近習番御格子番

**波多野宣経**、(生没年不詳)、1250年九条頼嗣の近習番

1260年1月宗尊親王の近習番昼番

**波多野秀頼**、(生没年不詳)、1250年九条頼嗣の近習番

将軍頼嗣の近習一番16名ずつ六番が定められた中に任命される。

北条重時の沙汰で開催された椀飯に参会し三御馬を引く。

**波多野定康**、(生没年不詳)、1257年12月宗尊親王の近習番伺見参番。

北条重時主催の椀飯に馬引きとして従事する。

幕府で将軍の用務を行う伺見参衆に任命される。

将軍宗尊親王の乗馬見物に騎馬を披露。

**波多野宣茂**、(生没年不詳)、宣時の子、左近将監。

**波多野義重**、(不詳~1258)(宣俊/宣政)、出雲守、六波羅評定衆、出雲守護、従五下、

永平寺開基(曹洞宗本山)、越前国志比荘地頭、波多野忠綱の子、法名如是

正嘉2年2月20日(1258年4月2日)亡、父：波多野忠綱、妻：北条重時の娘

1221年、承久3年の承久の乱では、北条泰時軍にあり、抗瀬川の戦いと宇治橋の合戦

で矢を受け、宇治橋の合戦では惣領の**波多野経朝**に従って参戦し、右目に矢を受け、失明したが敵に矢を射返して奮戦し、行賞される。

1247年、宝治元年11月、鶴岡八幡宮放生会で随兵を務めた際、同じく随兵を担当した。三浦盛時と序列を巡って諍いを起こしている。

六波羅密寺の近隣に道元を招き『清法眼蔵』「全梯」の講義を受ける。

囚人の請取りと播磨国への護送を申し送る。

道元を越前志比庄に招き永平寺を建立する。

三条大宮簀屋番役の違反者受取を後藤治部少輔に命じる。

将軍頼嗣の甲冑着始めの儀に従事する。

流鏝馬事の一人として名を連ねる。

鶴岡八幡宮の放生会で将軍頼嗣の出御に際して先陣の随兵として従事する。

放生会随兵の交名について三浦五郎盛時と争う。

交名について徹底糾明を重ねて申し入れる。

将軍頼嗣の方違いに供奉する。

越前永平寺に一切経を寄進する。

将軍頼嗣が開催した遠笠懸・犬追物に際して検見役として従事する。

将軍頼嗣母が亀谷新造第に移る際に供奉する。

宗尊親王が鎌倉に下る際に京都から供奉する。

# 松田家の歴史

永平寺 曹洞宗大本山 福井県吉田郡永平寺町志比 5-15

永平寺は1244年波多野氏6代目義常の甥波多野義重が領地の越前国志比庄(福井県永平寺町)に京都から曹洞宗の開祖道元禅師を招請して建立した。永平寺仏殿内に、波多野義重像が祀られている。



永平寺の勅使門(唐門)

**波多野時光**、(生没年不詳)、1277年六波羅評定衆、父：波多野義重。

名越朝時(越中守)家臣、越中国に転封、砺波郡野尻荘の地頭職、左門尉。

元久二乙丑年(1205)波多野時光舟津神社創立。

1250年九条頼嗣の近習番、将軍頼嗣の近習一番16名ずつ六番が定められた中に任命される。

1257年12月宗尊親王の近習番御格子番。

北条重時の沙汰で開催された椀飯に参会し四御馬を引く。

北条重時主催の椀飯において馬引きに従事。

北条時頼主催の椀飯に参会する。

北条重時邸に入る将軍宗尊親王に供奉し三御馬を引く。

北条重時主催の椀飯に五御馬を引く。

広御所修理の土公祭に際して使者を務める。

将軍宗尊親王の鶴岡八幡宮での放生会に際して供奉する。

徹通義介を永平寺住職に請する。

六波羅評定衆の一員として活動する。

永平寺弧雲壊弊危篤の知らせにより越前に赴く。

**波多野義泰**、(生没年不詳)、波多野義重の子、

北条重時主催の椀飯に五御馬を引く。

**波多野朝義**、(生没年不詳)、弓始め儀式において射手を務める。

**波多野通貞**、(生没年不詳)、朝通の子、越前志比(しい)荘の地頭。出雲次郎、左衛門尉。

**波多野宣通**、(生没年不詳)、上野介、波多野義重の4代目、宣茂の子、六波羅探題評定衆。

元弘の変で囚われた後醍醐天皇侍從中納言公明を六波羅勢として預かり、

後醍醐天皇が潜伏している比叡山攻撃に備えて東坂下に向かう。

**波多野浄心**、(生没年不詳)、浄心は波多野禅師、弁禅師と呼ばれる禅僧であり、「南部菩薩山

の住僧であった。同寺は奈良の東南の山中にある菩提山正暦寺で、正暦二年(991年)

関白兼家(道長父)の子兼俊が創建した。建保六年(1218年)関白師通(忠通の誤り)の子信

円が再興し、最盛時には八十六の僧坊があった。

**波多野経因**、(1142?~1192?) 経因は「十禅内供奉(じゅうぜんないぐぶ)」とある。

# 松田家の歴史

十禅内供奉＝内供奉十禅師は、宮中の内道場に奉仕する知徳兼備の十人の僧＝十禅師のことで、同道場で正月御齋会に読師の役を勤める浄行の僧＝内供奉を兼ねた。経因は宮中の内道場で鎮護国家の祈祷に際して読師の役を勤める内供奉十禅師に登用されたのである。

歌人として『千載和歌集』に和歌が収められている。

**波多野義定**、(1161?~1211?) 三郎、刑部丞、義元の子。

義定の女越前局が、後鳥羽上皇と坊門信清との間に生まれた嘉陽門院礼子内親王(1200年~1273年)に仕えた。宇治家の始祖、義常の弟義元の子。

伊勢で平家方の伊豆江四郎と交戦する。伊勢羽取山で志田義広を討つ。

部下の横領が発覚し櫛田郷を没収される。

**波多野景之**、(生没年不詳)、越前国地頭、真宗誠照寺派開基、空然、越前国上野ヶ原の豪族、承元元年(1207)高僧親鸞が越後国に流罪となった際、親鸞聖人を助けた。

**波多野経朝**、(生没年不詳)、次郎経朝、父：忠綱、波多野義重の弟、波多野中務次郎信清。

1182年~1219年頃、源頼家・実朝両将軍に仕え、両将軍の近習となった。

1200年、中将頼家様は、大庭の野原へ出かけられました。波多野次郎経朝〔波多野小次郎忠綱の息子〕が狐二匹を同時に射ました。数十騎も腕達者が揃っている

中で、一人「一発二羽射とめ」の名を上げました。(吾妻鑑)

第2代執権北条義時から葦毛馬(河洲号)を拝領。(1205年~1224年頃)

承久の乱では北条泰時に味方した。

建暦三年(1213)二月、三代将軍源実朝が昵懇(じっこん)の祇候(しこう)人の中から「芸能人」

18人を選んで学問所番人に任命しているが、その一人に波多野経朝の名が見える。(吾妻鑑)

安貞元年(1227)三月、鎌倉前浜の民家で承久の乱で後鳥羽上皇の三宮と称する京方の謀判人の残党45人を経朝が捕縛し褒賞として美作国(岡山県)の一箇村を与えられる。

源頼家の開いた大庭野の狩に参加する。

千幡元服の式に役送として従事する。

幕府から前浜辺の敷地を分与される。

幕府から学問所への奉仕を命じられる。

和田合戦の政所の戦いに従軍する。

和田合戦で忠綱が挙げた功績により勲功受賞の恩典に預かる。

藤原頼経の着袴の儀に馬引き係として従事する。

承久の乱に際して北条時氏・有時に従い摩免斗(岐阜県)に渡る。

宇治橋の合戦・入京の合戦での活躍に依り交渉される。

藤原頼経が御所にて行った和歌会に参加する。

藤原頼経の泰時邸から御所への移動に従事する。

**波多野朝定**、(1191?~1241?) 弥次郎朝定、義定の子、

建暦三年(1213)五月二日三日の合戦で撃たれた人々の日の記録

松田三郎 同小次郎 同四郎 同六郎 同七郎

波多野盛通、三郎盛通、太郎、弥次郎(朝定)、(吾妻鑑)

1234年合奉行(本奉行の補佐)。

供僧頓覚房良喜の御所での祈祷に実朝の使いとして案内役に従事する。

実朝から朝廷への使者としての任を受け上洛し実朝への左大将任命の除目を得て鎌倉に帰着し後日これを賞される。

九条頼経が鎌倉に向かう際乗輿警護に従事する。



# 松田家の歴史

北条政子の使者として伊勢神宮を訪問し願文を祭主神祇大副隆宗に付し鎌倉に帰着する。  
承久の乱戦勝による村寄進の際の使者として伊勢神宮に派遣される。  
将軍頼経の永福寺渡御に供奉する。初の合奉行に任命される。  
新御所で初めて催された和歌会に参加する。

内舎人右兵衛尉 号波多野次郎 母は筑後権守俊兼の娘。

**波多野宣教**、(生没年不詳)、将軍頼嗣の甘縄出御に従事。

弓始めの儀式に名前が挙がる。

鶴岡八幡宮の放生会に際して将軍頼嗣に供奉する。

将軍頼嗣の鶴岡八幡宮参拝に供奉する。

将軍頼嗣の近習一番 16 名ずつ六番が定められた中に任命される。

将軍頼嗣の二所参詣に供奉する。

北条重時主催の椀飯に馬引きとして従事する。

将軍宗尊親王御所での酒宴に伴う相撲六番に際して取り組みに参加する。

将軍宗尊親王の最明寺参詣に際して供奉する。

将軍宗尊親王の昼番衆に任命される。

**波多野宣時**、(生没年不詳)、波多野義重の子、六波羅評定衆、左衛門尉。

1250 年九条頼嗣の近習番、将軍頼嗣の近習一番 16 名ずつ六番が定められた中に任命される。(近習番とは、鎌倉幕府において将軍にそば仕えする御家人)。

将軍頼嗣の鶴岡八幡宮参拝に際して供奉する。

北条重時の沙汰で開催された椀飯に参会し三御馬を引く。

北条重時の沙汰で開催された椀飯に参会し四御馬を引く。

将軍頼嗣の二所(箱根・伊豆山)参詣に際して宣経と共に供奉する。

将軍頼嗣の北条重時邸移動に際して供奉する。

将軍頼嗣の母の亀谷新造第移動に際して供奉する。

御所の格子番に配される。

将軍宗尊親王の初の鶴岡八幡宮参拝に際して供奉する。

北条重時主催の椀飯に馬引きとして従事する。

六波羅探題北条時茂から被告人国末を出頭させるよう命じられる。

六波羅探題北条志下時の御教書を受け部下の五島に対し御家人上洛を促す。

「流鏝馬事」の一人として名を連ねる。

**波多野通郷**、(生没年不詳)、肥後守、通貞の子、連歌師、1391~1403 室町幕府の評定衆。

元中 2 年(1385)の石山百韻や応永 15 年(1408)の北山殿何木百韻などに参加した。

1411 年までは生存。法号は元喜。救済(ぐさい)に学び至徳

**波多野重通**、(生没年不詳)、六波羅評定衆、波多野義重の孫、時光の子、越前国の豪族。

応永 11(1404)年退蔵院を開基、京都市右京区花園。

永平寺を退院する徹通義介に再任を要請する。

後宇多天皇の春日社行幸に大番武士として供奉する。

**波多野朝通**、(生没年不詳)、時光孫、重通の子、

**波多野宗高**、(1511~1573?) 波多野秀治(氷上城城主)の家臣。

丹波氷上城を築いたり、武勇から「丹波鬼」と呼ばれたり、智勇ともに優れていた。

また、正親町天皇の即位式では洛中を警護した。

1570 年、盟友の朝倉氏が織田信長と敵対するのを食い止めるために越前国赴く途中、

# 松田家の歴史

乱戦に巻き込まれて死んだといわれている。

**波多野宗長** (?~1579 年) 宗高の子、子に宗貞、波多野秀治(氷上城城主)の家臣。

播磨国の別所長治や、主家の波多野秀治と結び織田信長に抗戦した。

**波多野敬直**、(1850~1922)、第一次桂太郎内閣の司法大臣 (1903 年~1905 年)

第二次大隈重信内閣の宮内大臣 (1914 年~1920 年)

侍従長兼東宮侍従長 (1912 年) 正二位勲一等旭日桐花大綬章。

**波多野敬雄**、(1932~86 歳) 国連大使、1993 年国連安全保障理事会・議長。

2003 年学習院女子大学学長。

2006 年~2014 年第 25 代学習院大学院長、瑞宝重光章受章

## その他の一族

河村氏

直違い



直違い竹



河村氏の発祥の地は、相模国（神奈川県）足柄郡河村郷である。波多野遠義の次男秀高は父から同国足柄郡上河村郷(山北地区)などの所領を譲られ、そこを本拠として河村氏を称した。河村秀高は歌人としても知られている。秀高には太郎則実・三郎義秀・四郎秀清・五郎秀経という四人の男子がいた。後に河村領の家司を受け継ぐ河村三郎義秀は、身長 7 尺 2 寸といわれた大男で、武勇に優れていたと書き残されている。(ただ、当時の古記録は誇張がつきものなので、本当に 7 尺 2 寸あったとは思えない。) 河村義秀の室は曾我兄弟の義父である曾我祐信の娘であった。本宗の波多野氏は当初源氏方であったが、源氏の衰退と共に平氏に従っていた。源頼朝の挙兵の時には秀高の子義秀は挙兵に応じなかった。このため頼朝が勢力を持つと義秀は河村領を失った。さらに頼朝は義秀の斬首を大庭景義に命じたが、景義はこの命に従わず、密かに義秀を匿い続けた。建久元年(1190)鶴岡八幡宮にて流鏝馬が奉納されることになったが、この時、大庭景義は射手に河村義秀を推薦した。殺害を命じた義秀が生き長らえていることに頼朝の心底は穏やかではなかったが、三流の弓矢で射ることを命じ、失敗したならば改めて斬罪に処すと告げた。しかし河村義秀はその試練を乗り越え、流鏝馬で好結果を残した。そして頼朝に弓馬の技量を認められ、旧領を回復して御家人の列に連なることを許された。その後の義秀は、上洛にも随行するなど頼朝の信任が篤かったが、42 歳で死去したと伝えられる。義秀の死後、三男の河村秀基が河村領を伝領した。また、その弟・河村秀清は、文治 5 年(1189)の奥州征伐で戦功をたて奥州に所領を得た。

1189 年、阿津賀志山の戦(頼朝と藤原泰衡との戦い)に功をたて、戦後の論功行賞で、河村四郎秀清は岩手郡・斯波郡の北上川東岸一帯と茂庭の地、そして摩耶郡の三ヶ所に所領を賜った。また、秀清は備中国川上郡の成羽の地に所領を得て鶴首城を築いたともいい、さらに斯波郡の大巻にも大巻城を築いたとも伝えられている。大巻館は、河村館・館平とも呼ばれ、眼下に北上川が流れ、背後には北上山地の連山をひかえる要害の地であり、館山に残る大巻館の跡は、三重の濠と土塁がめぐらされた戦国期の遺構が残されている。この遺構の規模の大きさから、河村氏の本拠は大巻館であったものと推測されている。

# 松田家の歴史

以後、河村氏は北条執権政治のもとでは本宗の波多野氏とともに北条氏に従い、秀清は「承久の乱」に武家方として功をたてるなど活躍をしていることから奥州の所領には長くとどまらなかったようだ。奥州には、その子や一族の時秀の子貞秀らが配置され、その子孫が河村氏の分流として北上川東岸一帯に広まった。大萱生・栃内・江柄・手代森・日戸・渋民・川口・沼宮内の諸氏がそれである。

承久の乱で京方を討つ者のうちに河村四郎・河村太郎・河村三郎・河村五郎などの名がある。河村氏一族の多くが参陣したことが知れる。『秀郷流系図』には河村藤三郎秀基は洲侯の戦いで遠定を討ち、宇治では京方の大将右衛門佐藤原朝俊を討ち取ったとある。このとき負傷した河村藤四郎行秀は帰国したのち疵がもとで死んだという。承久の乱で手柄を立て、褒賞として越後国荒河保の地頭に任じられ、義秀の子孫が領主となった。

元弘3年(1333)の新田義貞の鎌倉攻めにおいては、河村一族は松田家と共に新田軍に加わり、鎌倉幕府を滅亡させる一助の役割を果たした。奥州・越後の河村一族も南朝方で、大巻・茂庭の河村氏は北畠顕家・顕信に従った。

興国二年(1341)四月、北畠顕信は北奥の南朝方である南部・滴石・和賀・河村の諸氏とともに稗貫党等の北朝方と栗屋川で激突した。北畠顕信は奥州南朝方の中心として、興国二年九月から十月にかけて中奥の兵を集め三迫の石塔義房の軍と衝突した。その後、何度か北朝方と衝突を繰り返すが、結局、戦いは北畠顕信方の敗北で終わった。この結果、興国四年に南朝方の有力者結城親朝は足利尊氏側に転じて北朝方となった。

こうして奥州北朝方の勢力が北奥へと伸長し、高水寺城の斯波氏の隣に位置する河村氏への圧力は大きくなっていった。

観応3年(1352)南北朝時代に名を残す松田城・河村城籠城戦が始まる。観応3年3月、総軍6千余騎で松田城・河村城その他諸城に立て籠もった南朝連合軍は、畠山国清を主将とする足利尊氏軍の攻撃を良く凌いだ。しかし、1年に渡る籠城戦で兵糧は欠乏し、戦力は徐々に消耗していった。ジリ貧に陥ることを恐れた南朝軍は、大将である新田義興・義治らを逃亡させた後、河村城の東麓にあたる南原で一か八かの決戦を挑んで惨敗した。南朝方の被害は甚大で、河村城の主将である河村秀国・秀経父子も討ち死にした(なお、河村秀国・秀経父子は河村秀清の子孫にあたる)。そして、文和2年(1353)4月に河村城も陥落した。その後の室町・戦国時代において、河村氏の末裔は各国の戦国大名の旗下で細々と生き抜いた。その系譜は、河村秀清が奥州で得た所領を地盤とした茂庭河村氏、南部氏に従った大巻河村氏などに代表される。

正平十年(1355)、大巻の河村氏は顕信の次男北畠守親に属して、田村庄司氏らの挙兵に参加した。そして、紫波郡高水寺城に斯波氏一門の直持が探題となって入ってくると、ついに河村氏は斯波氏に服するようになった。斯波氏の配下に入った河村氏は大巻から左比内へと居を移している。そして、この後数代の河村氏の動向は詳らかではなく、系図も不明となっている。

戦国時代も後期になった元龜・天正の頃(1570～)、河村飛弾秀定が登場してくる。秀定は斯波安芸守詮愛に仕え、その剛勇さを買われて鷲内の姓を与えられていた。

この鷲内飛弾秀定の養継子秀重(秀親?)は大萱生の北に住んで大萱生秀重と改めている。

戦国末期の斯波氏家臣に大巻館の河村氏、江柄館の江柄民部、栃内館の栃内源蔵、佐比内館の川村喜助らがいたことが知られる。しかし、斯波氏の存亡のとき、東北河村党は分裂したようだ。そして、大萱生氏・江柄氏・手代森氏・乙部氏・長岡氏・大巻氏らは主家滅亡に際しても、参陣した形跡はない。そのなかで、佐比内の河村秀政は高水寺から逃げ

# 松田家の歴史

てきた斯波詮直を守って山王海へと落ち延びさせ、秀政自身は戦傷を負い、結局武士を捨てて帰農した。一方、大萱生玄蕃は主家に弓を引いたが、その妻が斯波詮直の伯母であった関係から、敗れた詮直は大萱生家を頼ってきた。玄蕃は詮直を大萱生城に匿ったものの、これを察知した南部氏は天正十七年十月大萱生城を包囲した。結果、大萱生玄蕃は詮直とともに上大萱生まで逃れたという。こうして、斯波氏の滅亡と期を一つにして河村氏も没落してしまった。その後、河村氏・大萱生氏の後裔は帰農したり、南部家や伊達家に仕官したりしてそれぞれ独自の道を歩んだ。

河村氏の家紋は、様々なものが用いられているとはいえ「丸の内に直い棒）」が著名である。見聞諸家紋には河村氏の家紋も記され「直違い竹」である。それぞれ、その原型は「直違い」である。

河村氏は相模から発祥して、奥州・越後にも一族が広がっていった。奥州の河村氏の場合、斯波氏に仕えて戦国時代に至ったが、斯波氏が没落してのちは南部氏に仕えて近世に生き残った。盛岡藩士諸家の系図集『参考諸家系図』を見ると、河村一族諸家が「直違い」を用いていたことが知られる。江戸時代、奥羽海運を改革した河村瑞賢、特に般若院の川村氏墓石の勝興の子孫は一吉、一親、一通、一清、一成、一貫、一匡、と続き、代々徳川氏に仕え要職にあった。川村一匡(順一郎大和守)は徳川幕府の目付・大目付を歴任、明治維新後は徳川宗家や一橋家の家扶(華族の家務・会計を司った)として活躍した。

河村氏の分流：川村氏・大萱生氏・手代森氏・朽内氏・江柄氏・大巻氏・中村氏・日戸氏・渋民氏・玉山氏・川口氏・下田氏・沼宮内氏・乙部氏・長岡氏・などに分流している。

## 広沢氏

寿永四年(1185年)2月、源頼朝が長門国の壇ノ浦に平家一門を滅ぼし、建久三年(1192年)7月2日、源頼朝は、寿永三年12月の備前国の藤戸海峡(倉敷市)における平家との合戦に手柄をたてた広沢余三実方に対して、恩賞として備後国三谷郡一二郷を与えた(『閩閩録(ぼつえつろく)』巻三〇・「和智氏系譜」)。広沢実義の弟実村は備後国三谷郡西方を所領とし、その子実綱とともに備後国上御使を勤めている。実綱の弟実成が和智(知)を称した。おそらく兄実綱は江田を所領としたのであろう。実成は北条貞時とともに出家した。嘉元三年(1305年)5月北条宗方(宗頼男)が連署北条時村(政村男)を殺害した。時村の討手五大院高頼は宇都宮貞綱に預けられた。その使者を広沢弾正忠が勤めた。

徳治二年(1397年)5月北条時宗の忌日に鎌倉円覚寺で営まれる法事に結番する武士に広沢弾正左衛門尉がいる。この広沢弾正忠・弾正左衛門尉は行実の子宗実で、彼は北条氏嫡流(得宗)の御内人であった。また、正安・徳治のころ六渡羅の使者を江田六郎・同五郎入道が勤めている。なお、元亨三年(1323年)7月他界した広沢安芸前司は宗実である。

元弘三年閏二月幕府に倒幕を企てたとして配流された隠岐島から脱出した後醍醐天皇は、名和長年に迎えられて伯耆国船上山に入った。ここに出雲国守護塩谷高貞をはじめとした同国の武士、さらに伯耆・因幡両国の御家人たちはもちろん、石見・安芸・美作・備前・備中・備後をはじめ四国・九州の者までが馳せ参じたとある。『太平記』はそのうちに備中国の河村氏、備後国の広沢・江田両氏の名をあげている。

関東地方に本貫の地を持ち、新たに西日本に所領を獲得した関東御家人たちは、直ちに西日本へ実際に移って来たわけではない。建暦三年(1213年)備後国で陸海の賊徒が蜂起したので、広沢実高がその鎮圧のために下向(げこう)を命ぜられ、三ヵ年ぶりに鎌倉に帰参している(『吾妻鏡』)が、実高が賊徒鎮圧の使節に任命されたのは、彼が三谷郡に所領を有してい



# 松田家の歴史

たこともその理由であろう。また、使節に任命されて「かの国に下向」し、三カ年ぶりに鎌倉へ「備後国より帰参す」といった記事からみても、まだこちらへ移住はしていなかったとみられる。広沢氏が実際に備後国に移住してくるのは、新たに「三谷郡西方」を得て支配圏を三谷郡全域へ拡大して経営を安定させた一四世紀半ばとみられ、『芸藩通志』は「正中年間（1324～26年）に始めて当郡に来る」としている。（※『芸藩通志』は江戸時代後期の文政八年（1825年）に広島藩がまとめた藩内の地誌書）

広沢氏の総領家は、三谷郡の所領を分割して、新たに獲得した「三谷郡西方」を三男実村に与え、その彼に総領家の所領である「三谷郡一二郷」の代官職にもあたらせたものとみられ、「松田氏系図」では、実村とその子実綱に「備後国上御使」の肩書を付している。関東御家人の西国への移住が鎌倉時代中後期に多くみられるのは、当時の分割相続制度のもとに、関東地方の所領が次第に細分化されてきたこと、それに西国の所領経営が安定したことなどが背景にあったものと考えられる。

広沢実村が移住してきたのは三谷郡西北部の和知（三次市和智町）で、『芸藩通志』は同村の国広（くにひろ）山について「二つ山ともいふ。始め国広石見が所居。後和知余三実方より七世これに居る」と、国広山（二つ山）に拠ったとしているが、昭和四八年（1973）の発掘調査の結果（『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』1978年広島県文化財協会によれば、国広山はのちの戦国期の築城で、広沢氏が最初に築いたのはその東方の小（古）城山（じょうやま）で、その麓に土居（どい）とよばれる台地があるが、そこに館を構えて日常生活をおくったものとみられている。

13世紀後半、広沢実村は所領をその子実綱・実成の二人に分割して相続させた。兄の実綱は江田（えた）荘を、弟の実成は和知荘を相続し、それぞれその所在地名をとって江田・和智を名乗った。『芸藩通志』は近世の三谷郡三八カ村を、江田庄（一五カ村）・和知庄（五カ村）・湯谷（ゆだに）庄（五カ村）・吉舎庄（一二カ村）・徳田庄（一カ村）の五つの庄に分けているが二人が得たのはこの江田・和知両庄とみてよいであろう。江田庄は、三谷郡西南部にあたり、ほぼ美波羅（みはら）川流域とそれに馬洗川北岸の向江田（むこうえた）を併せた地域で、江田氏は初め天良（てら）山（三次市向江田町）に本拠を構えたが、のちその所領の南端旗返（はたがえし）山（三次市三若町）へ移り、戦国時代に毛利氏に滅ぼされた。和知荘は、三谷郡北部の和知（三次市）、光清（みつきよ）・仁賀（にか）・田利（たり）・皆瀬（かいぜ）（以上三良坂町）の地域である。鎌倉時代、広沢氏の三谷郡経営は必ずしも安定したものではなかったようである。三谷郡のうち少なくとも総領家領は広沢氏の手を離れていた。嘉元二年（1304年）から翌年にかけて、武蔵国から広沢氏総領家の与三入道がはるばるこの地を訪れているが、そのとき彼が江田や和知の里を訪れた記事はあるが、肝心の総領家領である「三谷郡一二郷」に関する記事は全くみられない（『とわずがたり』）。広沢氏の分流：実成が和智氏、実綱が江田氏を称した。

## 沼田氏

### 沼田七郎家通

加賀藩の役人であった宮永正運が天明6年（1786年）に著した大著「越の下草」（昭和55年富山県郷土史会復刊）は、菘輪村にある沼田太郎右衛門碑の碑誌の全文を載せ、沼田氏の氏祖を家通と記す。また「尊卑分脈」（前田家所蔵本）によれば、筑後守波多野遠義の子として、波多野義通、河村秀高、廣沢、波多野実方を載せるが、「波多野系

# 松田家の歴史

図」では、波多野遠義の子に、波多野義通、河村秀高、大友経家、波多野義景、菖蒲実経、沼田家通、河村実親をあげ、こちらが定説とされる。

上野国沼田太郎 大友経家の子、利根局の兄妹に実秀があるが、彼は利根郡沼田郷にあって、沼田太郎と称した。「吾妻鏡」（北條本）によれば、建久元年（1190年）11月7日條に、源頼朝が後白河法皇の召しに依って上京した時の先陣随兵の中に、上野国（現在の群馬県）の沼田太郎の名が見える。『沼田町史』（昭和27年8月群馬県沼田町発行）によれば、大友経家の嫡子実秀が太郎と称していたことと、大友経家が利根郡司であったとする記録（大友木村氏系図）をあげて、この実秀が沼田太郎であるとする。そして、大友実秀が「沼田」を称したのは、大友四郎経家の弟に沼田六郎（菖蒲実経）、沼田七郎（家通）があったためという（『沼田町史』）。

相模国沼田氏族

「吾妻鏡」（北條本）に沼田七郎の名が見えるのは、建暦3年（1213年）5月2日の合戦であり、この日に七郎は討死している。「吾妻鏡」には沼田氏の名はいくつか出てくるが、上野国の沼田氏を指す時は、必ず「上野」と併記されることから、併記のない沼田氏は相模国の沼田氏をさしていると思われる。

沼田家通は筑後守波多野遠義（4代目）の6男である。兄には波多野二郎義通（5代目）、河村三郎秀高（山城権守）、大友四郎経家、波多野五郎義景、菖蒲実経（沼田六郎）があり、弟に河村八郎実親がある。家通の嫡男は三郎家光（2代目）で、その後、五郎家村（3代目）、五郎三郎家政（4代目）、又二郎助家（5代目）と続く。沼田太郎が拠った上野国利根庄は、嫡子沼田太郎（大友実秀）が早世し、また父大友四郎経家には男子がいなかったため、娘利根局の子、能直（祖父大友経家の後を嗣ぐ。父は齋院次官中親能原であるが、源頼朝の子であるとの説もある）に譲られた。前期沼田氏の後継者たるべき大友能直は、九州に下って有

力大名として発展したが、南北朝時代に至り、8代目の大友氏時が、利根の川場に引退したことは、実にそのゆかりの地である祖先の故地に帰ったものとみることができる。

越中沼田氏は鎌倉幕府の御家人であった沼田七郎家通（いえみち）を氏祖とする。沼田七郎家通は、平安時代末期、筑後守波多野遠義の六男として生まれ相模国（現神奈川県）足柄郡沼田邑を根拠地としたため、沼田氏を称したとされる。

沼田氏の分流：下沼田・発知・小川・名胡桃・川田

## 大友氏

大友四郎経家

大友経家は上野国利根郡を領した利根四郎のこととされる。経家の娘利根局は源頼朝の侍女であったが、承安2年（1172年）に頼朝卿の側室となり、後、齋院次官中親能原の妻となった。利根局の子が大友能直で、頼朝卿が征夷大將軍に任ぜられた翌年の建久4年（1193年）、頼朝卿より豊前と豊後の守護を命じられ、同7年に豊後に下り九州大友氏の祖となった。頼泰は大友氏第3代総領。蒙古襲来に際し、時宗に命じられ九州へ下向。本来の根拠地は相模国大友郷（現在の神奈川県小田原市近郊）だったが、下向を機に親族の治める豊後国へ移った。大友氏（相模国足柄郡大友村発祥の族は、藤原北家秀郷流で初代・能直以来、豊後守護に任じ、（東方）鎮西奉行として勢力をふるった。戦国末期の北九州の覇者・大友義鎮（宗麟）の時に全盛、九州六カ国守護伊予日向半国守護職になり1559年に九州探題職になる。）蒙古襲来豊後下向、豊後守護職兼鎮西奉行）大友能直は筑後、豊後、肥後の守護職

# 松田家の歴史

に任ぜられた。親秀には本領の相模大友郷が与えられたが、三代・大友頼泰に至って初めて豊後に下向した。（蒙古襲来により）守護大名としての大友氏の発展は、六代貞宗の頃からであり冷静に時勢の推移を洞察し、足利尊氏を武家政権の受け皿として、その軍勢催促に応じ鎮西探題・北条英時を壊滅させた。そして家督を継いだ貞宗七男の氏時は足利尊氏の子・義詮の信頼を受け、北条（鎮西）探題館で大友、少弐氏により憤死させられた菊池武時の子・武光（南朝方）との宿命的な戦いを展開し、九州において北朝勢力（武家方）の孤塁を死守したのである。（戦国大名出自事典から抜粋・・・日本女子大・西村圭子著）

能直は源頼朝の有力な御家人となり豊後、筑後守護職、鎮西奉行となり、三代頼泰の頃豊後に赴任、以後豊後を中心に肥前、豊前、筑後に栄えた。室町期守護大名に成長し大友（義鎮）宗麟のとき全盛を迎える。やがて島津氏に敗れて昔日の勢威を失うが、子孫は徳川幕府の※高家になった。家紋は北九州の名紋杏葉紋なお総領家だけが「大友」を称した。

弘安4年蒙古が再来したが、石築地に阻まれ、一部が志賀島（しかのしま）に上陸し大友軍と交戦し進行を阻止され、海上で台風にあい全滅した。戦後恩賞問題が続出し、幕府は御家人の鎌倉出訴を止めるため、弘安7年特殊合議訴訟機関を博多に設け、同9年鎮西談議所（ちんぜいだんぎしょ）とした。少弐大友宇都宮渋谷が任命され、永仁元年（1293）鎮西探題（たんだい）設置まで続く。恩賞は弘安9年から徳治2年（1307）まで回実施が確認され、大友少弐がこれを奉行している。大友氏は豊後国の守護大名である。

初代能直（よしなお）は、源頼朝の落胤といわれる。実際には、相模国大住郡古庄郷司近藤能成の子である。建久元年（1190）当時、『吾妻鏡』に三か所にわたって「古庄左近将監能直」とあるのが、その証拠である。母は同じ相模の足下郡大友郷の郷司で、藤原秀郷の後裔波多野経家の娘であり、その姉の夫は京都の下級公家で、京都から下って頼朝に仕え、天野遠景に代って鎮西奉行となった中原親能である。能直はこの親能の猶子（ゆうし）となり、やがて頼朝の有力な御家人となった。『吾妻鏡』には、頼朝の「無双寵仁、殊に近仕をなし、常に御左右に候す」とある。能直は本領の大友郷を母から譲られ、長じて豊後・筑後の守護職と、鎮西奉行に任ぜられて、これを子孫に伝えた。大友氏の豊後国への下向は、蒙古襲来により、幕府から鎮西所領への下向が、東国の御家人に命ぜられた文永年間（1264-74）、三代頼泰の時と考えられる。二代親秀・三代頼泰の頃は、惣領制のもとに庶子が九州各地の所領と分割譲与されたときで、詫磨・志賀・田原・一万田・戸次をはじめとして、元吉・鷹尾・狭間などの庶子家が分出し、一族は豊後を中心に、肥前・豊前・筑後にまで広がった。南北朝期、大友氏では庶子の「大友貞順（さだきよ）」だけが南朝方についたほか一貫して足利氏に属し、動乱に乗じて寺社領をあわせ、少弐・菊池氏などの諸豪族と戦って勢力をのびし、北九州の有力な守護大名に成長した。延文四年（1359）足利義詮は、大友氏の惣領権を保証し、大友名字は能直以来、惣領の号であるから、庶子がかつてに自称することは甚だ理由がない。早く自由の儀をとどめて、先例に任すべしと申し渡している（立花家蔵大友文書）。こうして大友宗家は、領国内においてしだいに一族を家臣として統御し、有力土豪を被官化して領国支配の体制を整えていったが、のち両流に分れ、交代で家督を継ぐことになった。

これに中国地方の大内氏がかがらみ、一族間の争いが続いた。しかし大友二十代の義鑑（よしあき）が出て、大内義隆とも和議が成立し、その子義鎮（宗麟）のときには、大友氏の全盛期を迎えた。永禄二年（1559）には、豊前・筑前両国の守護にも補任され、九州九か国守講中六か国を兼有、さらに九州探題にも補任され、龍造寺氏・島津氏と九州を三分する覇権を確立した。彼はキリシタンに帰依し、天正十年（1582）、有馬・大

# 松田家の歴史

村両氏とともに、わが国最初の遣欧使節を派遣した。宗麟は晩年、子の義統（よしむね）に家督を譲り、なお攻務をみたが、やがて保護したキリシタンと仏教徒との対立や、一族家臣の離反などにあい、その力はいよいよ衰えはじめ、本国豊後を島津氏に奪われ、不遇のうちに没した。義統は天正十五年、豊臣秀吉の九州征伐に従い、豊後一国を安堵されたが、文禄二年（1593）朝鮮在陣中の失敗が秀吉の怒りにふれて改易された。関ヶ原の戦い（1600）では豊臣方に属して豊後で挙兵したが、黒田氏に敗れ、義統は江戸に幽閉された。しかしその子孫は江戸幕府に仕えて、高家に列せられ、明治維新に及んだ。

立花氏は大友氏の一族で、大友氏泰の庶兄貞載（さだとし）が、南北朝期に筑前国粕星郡立花城に拠ったのに始まる。豊臣氏の時、宗茂（むねしげ）が出て、大名として筑後国柳川を領し、小田原征伐や文禄・慶長の役に活躍、関ヶ原の戦いで豊臣氏についてたため、陸奥棚倉に滅封されたが、元和六年（1620）柳川に復活、十二万石を領した。ついで、島原の乱（1637）に活躍し、徳川將軍の相伴衆となった。

大友氏の分流：田原・堤・戸吹・滋賀・入田・宅磨・臼杵・田北・吉弘・  
立花・木付・一万田・戸次・元吉・鷹尾・狭間

**大槻氏** 波多野義通の次男が大槻次郎高義を名乗った。

大槻高義―成高―盛家の子成家が松田（相模松田家初代）を称した。

大槻氏の分流：松田・小磯・岩田

**小磯氏** 大槻次郎高義の子の八郎義秀が小磯姓を名乗った

大槻次郎高義―小磯八郎義秀―彦次郎義郷―秀経―義貞―二郎義資

「雑学」 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 「城の形体」

「平城」：大昔からある城の形態で、平野部のひらけた土地につくられた城郭。

領主の居館を要塞化させたもの。

江戸城・大坂城・松本城・名古屋城・二条城・上田城

「平山城（丘城）」：平野部に独立した小高い丘陵を丸ごと城郭として取りこんでいる。

小田原城・金沢城・岡山城・安土城・姫路城・松山城・犬山城

「山城」：武士の抗争が激しくなる鎌倉時代末期～戦国時代に用いられた形式。

山城はだいたい「比高100m以上の山上に築かれた城」

平時においては平野部の居館で生活する武士が、合戦時のみ険しい

山間部に籠って敵と戦った。

松田城・山中城・八王子城・河村城・津久井城・竹田城・七尾城・岡城

「水城」：平城の一形態であるが、海・湖・川などに隣接しこの水利を水濠として

取りこんでいる。

高島城・高松城・小浜城・今治城・中津城

**根小屋式山城**：城には築かれた場所によって、山城・丘城・平城・水城などがあり、独立した山や尾根上などに築かれたものが山城であり、根小屋式とは山麓に屋敷地を設けた山城で、戦う時は詰城部（主郭）に登る。

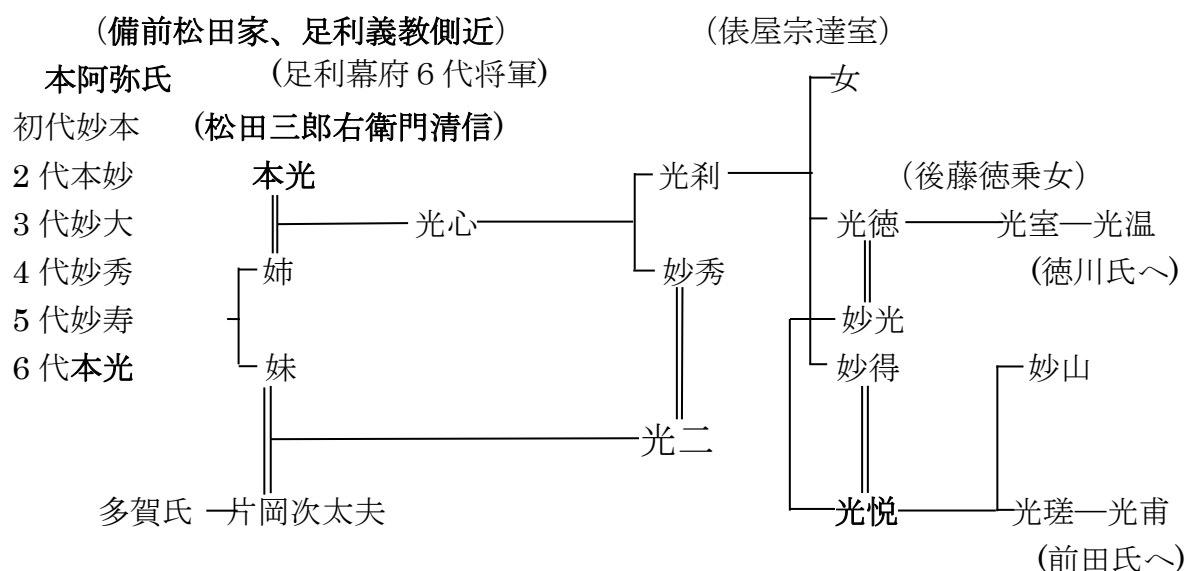
**根小屋**：山城は曲輪の面積が狭いために城主や家臣の屋敷などは山麓に置いた。それらの屋敷地一帯を根小屋（別に根古屋など）という。

# 松田家の歴史

## 本阿弥氏と松田家

本阿弥氏は代々、刀剣のとき(磨研)・ぬぐい(浄拭)・めきき(鑑定)の三業を家職とした。初代本阿弥妙本は足利尊氏に仕え、御用をつとめながら、商人として経済活動にも従事。本阿弥氏六代の**本光**は松田家から養子に入った人物である。**松田三郎右衛門清信**は足利幕府の刀の鑑定奉行で、第6代将軍足利義教の側近の一人であったが、刀剣の鑑定に関して抜群の才能をもっているのをみて、本阿弥妙本が長女に娶せて養子にした。これが**本阿弥中興の祖**といわれる**本光**である。**本光**以降本阿弥氏は「光」を通字としている。天文3年(1534)2月14日没。又、本阿弥氏では次男以下は松田姓を名乗ったとも言われる。永禄元年(1558=弘治四年)、光二と妙秀の嫡男に生まれたのが、有名な本阿弥光悦である。刀剣の製作工程には木工、金工、漆工、皮細工、蒔絵、染織、螺鈿などの様々な工芸技術が注ぎ込まれており、いわゆる工芸の総合芸術といった側面を有していた。光悦は父光二のもとで、幼い時からあらゆる工芸に対する高い見識眼を鍛えぬかれていった。さらに、父が分家となり家業から自由になったことと、京都の三長者(後藤、茶屋、角倉)に比肩する富を背景として、和学の教養と独自の書風を身につけるなどして美術工芸面に金字塔をうち立てることになるのである。

そして、刀剣の備前とそのおりがみを付ける本阿弥氏が備前刀の価値を高めた。第8代将軍足利義政が亡くなると、日野富子が抗争に破れ京都から都落ちする。幕府と関係の深い、本阿弥氏の斡旋もあり、富子の近習に松田尚郷がいた関係で日野富子は、松田家の領地に避難する。その地が、岡山県赤磐市沢原(金川城から約10km)と言われている。光悦の死後、家督を継いだ光瑳は前田氏から二百石、その子光甫の代に三百石を与えられ、子孫は幕末におよんだ。



### 松田三郎右衛門清信 (本阿弥本光)

「妙寿の門下に足利六世の将軍普廣院義教昵懇の士、松田右衛門三郎清信あり、鑑刀を好み其業にすぐれたり、妙寿子なかりしかば長女にめあはせて継子とす、これ六世本光にして本阿弥中興と称す、凡そ此時代より本阿弥家は刀剣鑑定、研磨、浄拭を以て其特有の家業となすに至れり」



# 松田家の歴史

## 松田家と古文書

吾妻鏡：省略本編参照 125か所

吾妻鑑は鎌倉幕府の初代将軍・源頼朝から第6代将軍・宗尊親王まで6代の将軍記という構成で、治承4年(1180)から文永3年(1266)までの鎌倉幕府の事績を記したものである。

吾妻鏡には松田家と一族(波多野氏・河村氏・大友氏・廣澤氏・沼田氏)が125か所に掲載されている

太平記：省略本編参照 14か所

「太平記」とは、後醍醐天皇が倒幕運動を開始した正中の変(1324)から、足利義満の將軍職就任(1367)まで、約40年間の戦乱を書いた日本の代表的な軍記物である。14か所に掲載。

戦国時代古文書：省略本編参照 160枚

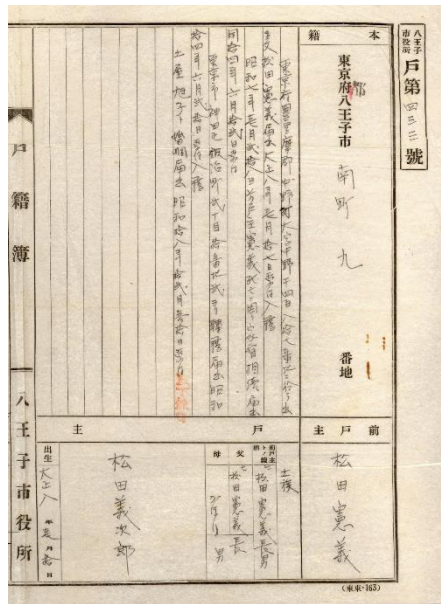
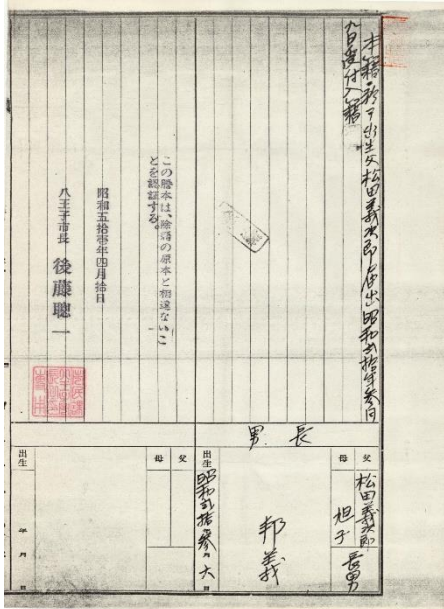
加賀藩侍帳：省略本編参照 10か所 5ページ

松田家先祖由緒并一類附帳：省略本編参照 65ページ

戸籍謄本・徐籍謄本(憲信・憲成・憲義・義次郎・邦義)

(義次郎・邦義)

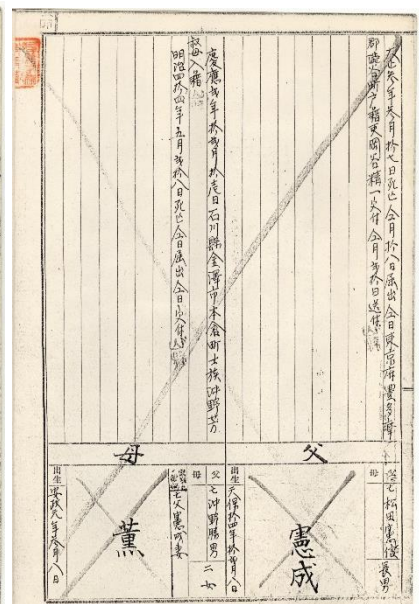
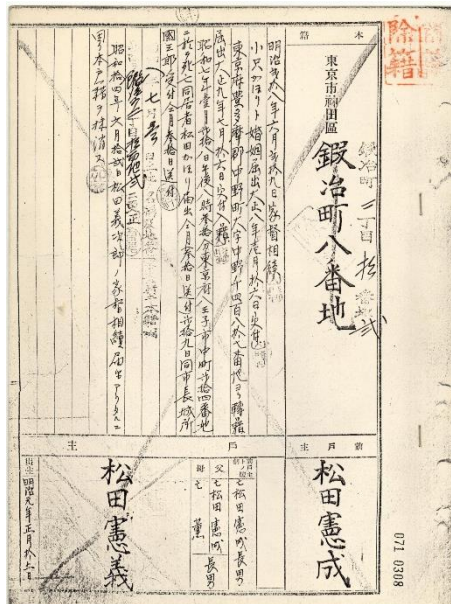
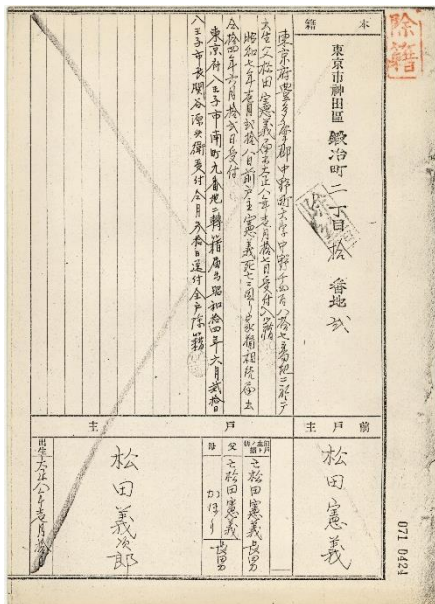
(憲義・義次郎)



(憲義・義次郎)

(憲成・憲義)

(憲信・憲成)



# 松田家の歴史

松田町教育委員会主催松田町町民大学

平成 27 年(2015)11 月 14 日

松田町・松田町教育委員会主催、寄村と松田町の合併 60 周年の記念事業として松田町町立公民館(町民文化センター)展示ホールで、平成 27 年(2015)11 月 14 日(土)に開催された。当日は雨の中を百名を超える参加者があった。

演題は「松田家の歴史」、アンケートの結果後日 3 回の講座を開設した。

平成27年度 町民大学 第4回

## 松田氏について

～松田氏の子孫が語る松田氏の歴史～



松田町の歴史を学習する上で欠かすことができないのが「松田氏の歴史」です。  
講師の松田邦義氏は「松田家の歴史」としてホームページを開設するなど、松田氏について深く研究されている方です。

松田家の歴史  
松田家は誰氏？ 平家？  
松田 源で結ばれた人々  
松田 源と家紋 等

100 ページにおよぶ資料をもとにお話しいたげます。松田氏の歴史を知りたく学習する方も大歓迎です。多くの方の参加をお待ちしています。



日時 平成27年11月14日(土) 10時00分～11時30分  
会場 松田町立公民館(町民文化センター) 1階 展示ホール  
主催 松田町教育委員会  
講師 松田氏子孫 松田邦義氏  
申込先 11月11日(水)までに生涯学習係(町民文化センター内)  
TEL 83-7021



熱心に受講される町民の皆様

町民大学準備委員の皆様



後列

前列

三浦良二氏 社会教育指導員

教育委員会事務担当 加藤繁男氏

文化財保護委員

小田隆氏

教育委員会教育課長 鈴木良三氏

教育長

鈴木氏

文化財保護委員

松田邦義

草門隆氏

文化財保護委員

小澤啓司氏

小川氏

ガイド会員

議員・委員長

藪田開作氏

ガイド会員

岩本氏

ガイド会員

高橋氏

ガイド会員



# 松田家の歴史

松田町町民大学

「松田家の歴史」講演 松田邦義



松田町町立公民館(町民文化センター)展示ホール



小田隆氏  
教育委員会  
鈴木良三氏  
教育課長  
松田邦義  
教育長  
本山博幸氏  
松田町町長  
安藤文一氏  
教育委員長



全国松田サミット、松田勝徳氏・小沢啓司氏  
神奈川県 松田町・委員長



松田充弘氏・松田孝也氏  
香川県 北海道

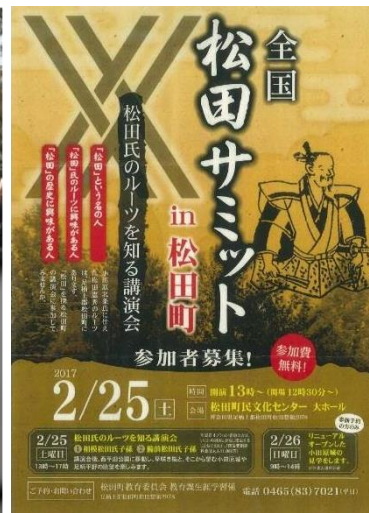


# 松田家の歴史

全国松田サミット

平成 29 年(2017)2 月 25 日

松田町・教育委員会、共催。松田姓の発祥の地とされる松田町で平成 29 年(2017)2 月 25 日(土)開催。松田町民文化センター大ホールで初めて「全国松田サミット」が開かれ、北海道から島根県まで 9 都道府県に住む松田家の子孫と松田町町民の皆さんが参加した。第 1 部「松田氏史考」松田勝徳氏、第 2 部「備前松田氏の足跡を訪ねて」大村祐章氏、第 3 部「小田原北条氏重臣・松田憲秀のこと」松田邦義、が講演を行った。翌日は松田城跡、松田山、寒田神社、小田原城を訪問した。「寒田神社にて宮司藪田拓司氏を囲んで」





# 松田家の歴史

全国松田サミット 平成 29 年(2017)2 月 25 日

## 第 1 部「松田氏史考」

松田勝徳氏、勝徳氏は備前松田家最後の 13 代城主元賢の弟、元脩が讃岐松田家祖となり、その末裔にあたる。

- (1) 松田氏のおこり
- (2) 鎌倉時代の松田氏
- (3) 南北朝時代の松田氏
- (4) 室町時代～戦国時代の松田氏



## 第 2 部「備前松田氏の足跡を訪ねて」

大村祐章氏、大村氏は備前松田元成に仕えた重臣大村盛恒の末裔にあたり、末裔の中には国務大臣や神奈川県知事・防衛庁長官などを輩出している。



## 第 3 部「小田原北条氏重臣・松田憲秀のこと」

松田邦義、邦義は足利義政の命で相模に下向し、将軍の下で、同じ奉公衆だった北条早雲に味方し活躍した頼重を始め、頼秀・盛秀・憲秀・直秀の末裔にあたる。



# 松田家の歴史

全国松田サミットにて 平成 29 年(2017)2 月 25 日



松田邦義・大村祐章氏  
神奈川県 岡山県



松田善徳氏・大村瑄(ひかる)氏  
香川県 岡山県



松田憲二氏・松田昌子氏・松田栄次氏・飯塚由美氏(旧姓松田)・狩野佳代氏(旧姓松田)  
岩手県 岩手県 島根県 千葉県 群馬県



松田勝徳氏・小沢啓司氏  
神奈川県 松田町・委員長



松田充弘氏・松田孝也氏  
香川県 北海道

# 松田家の歴史

## あとがき

「松田家の歴史」を纏めようと思いついたのは、小学生の時に見た父（義次郎）の形見の日記を思い出したからである。父の日記には邦義は松田家 16 代となっていたが、長い間何故 16 代なのか疑問に思っていた。系図を調べているうちに、京都にいた 7 代目の頼重は備前松田家より将軍足利義政の命で関東に来て相模松田家の宗家を家督し、子の頼秀と共に足利幕府の奉公衆として同僚であった北条早雲公に味方し、小田原城を奪取した。

江戸時代の先祖達は京都から下向した頼重を松田家初代と見ており、邦義は 16 代との父の日記にも納得がいったのである。また父の母（かほり）の話も記憶に残っていた。

松田家の先祖は「家老」で、神奈川県松田町の出身だ、お寺が金沢にもある。等々を、断片的に覚えていたのである。思い起こせば東京都文京区本郷「浄心寺」の老御住職は父もいない小倅を「若さま」と呼び、可笑しなお坊さんだと思っていた事も思い出した。「松田家の歴史」を纏め出したころは自分達が何処から来たのか、先祖は何をしてきたのかルーツを知りたいと考えた。子孫の為にも今残しておかないと個人情報重要視されて来ているので調査は益々困難になると考え、調査を始めた。当初四十頁程纏めた頃完成したと考えていたが、次から次へと古文書など情報が集まり、とうとう五百頁を超えてしまった。

先祖達の御蔭で今の我々の生活が成り立っているのであり、先祖達は現代の様な平和な時代をどんなに夢見ていただろうかと思うと、先祖達の気持ちに報い、先祖達を敬い、自分達の人生を大切に過ごす事で先祖達に感謝したいと思った。

松田家の歴史を思い起こしてみると、幾たびかの危機があった。其のたびに幸運と、一族をはじめ松田家を盛り立てて下さった方々のお陰で松田家は今まで存続して来たのである。

つわもの達の頑張りも勿論であるが、11 代憲郷(直秀)の室の様に 1590 年に主家は倒れ、父親は亡くなり、生活環境も全く変わり、暖かい小田原から冬の寒い金沢に移転し、間もなく五人の子供達を残し、夫も病没、長男も 16 歳で病没し、口では言い表せない御苦勞があったと思う。また、私の母旭子も若くして夫を亡くし、二人の子供と姑を残され、美容室を経営しながら頑張り、松田家の危機を乗り越えた。松田家が危機を乗り越えられたのはこのように系図に見られない多くの女性達やつわもの達のお陰でもある。今後生きる者達はこれらの事をよく噛みしめて生きて欲しいと思った。また、歴史を纏め出してから自分がこの世に存在する不思議さをより一層感じるようになった。この歴史の何処か少しでも変われば自分の存在は無かったのである。例えば、全然関係の無いと思われる「本能寺の変」が、あの時に無かったなら私は生まれてこなかったのである。本能寺の変が無ければ豊臣秀吉が 1590 年には小田原城を攻めなかったであろうし、金沢にも行かなかったであろうし、先祖達も違う人と結婚しており、自分は生まれてこなかったのである。こう見ると松田家にとってはにつつき仇である筈の秀吉も私個人にとっては恩人(?) と思う事さえある。歴史とは全く不思議で興味深いものである。一つ残念な事は 10 代以前の墳墓が発見出来ない事であるが、今後も調査して行きたいと考えている。「松田家の歴史」を纏めるにあたって、「戦国時代年表・戦国遺文」等の記述でご高名な下山治久先生と東京大学史料編纂所所長教授榎原雅治先生には何度も問い合わせに答えて頂き、又、静岡大学名誉教授小和田哲男先生には指針を頂きました。心より感謝しております。但し、先生方は「松田家の歴史」に就いて考察をして頂いてはおりませんので、内容は全て編著者の責任で記述しております。

松田邦義

# 松田家の歴史

## 松田家と雑学の関連したことが記載されている書物と著者

「古事記」、「日本書紀」、「吾妻鑑」、「平治物語」、「太平記」、「承久記」、「正法眼蔵」、「尊卑分脈」、「源平盛衰記」、「梅松論」、「波多野義重添状案」、「永平三祖行業記」、「健治三年記」、「光明寺文書」、「六波羅御教書案」、「波多野某施行状案」、「波多野義重添状案」、「道元禪師行録」、「新日吉小臯月流鏑馬定文案」、「管領記」、「松田氏系図（秀郷流系図松田氏の部）」、「佐野松田氏系図」、「新編相模風土記」、「御評定着次第」、「永享以来御番張」、「松田城址」、「松田の史話（松田町教育委員会）」、「松田の興亡と松田郷（中野敬次郎氏）」、「神奈川県史概略-上（松田の歴史）」、「北条記」、「北条五代記」、「文安年中御番帳」、「相州兵乱記」、「関侍伝記」、「長倉追罰記」、「異本小田原記」、「小田原衆所領役帳」、「小田原旧記（小田原秘鑑）」、「北条役帳」、「関八州古戦録」、「加賀藩侍帳」、「諸士系譜（津田信成氏）」、「寛政重修諸家譜」、「群書類従」、「続群書類従」、「後北条氏家臣団（下山治久氏）」、「武田勝頼（新田次郎氏）」、「川村掃部氏著書」、「波多野氏と波多野庄（湯山学氏）」、「執権北条家と波多野氏（湯山学氏）」、「フリー百科事典ウィキペディア」、作家 伊東潤氏、山梨県立大学名誉教授両角倉一先生、東京大学史料編纂所所長教授榎原雅治先生、下山治久先生「後北条氏家臣団人名辞典（下山治久氏）」、「戦国時代年表（下山治久氏）」、「戦国遺文（下山治久氏）」、静岡大学名誉教授小和田哲男先生、本因寺 相澤一龍氏、「神奈河戦国史稿（前田右勝氏）」、林秀貞氏（台湾）、松田勝徳氏（備前松田家子孫）、松田一夫氏（埼玉松田家子孫）、松田賢二氏（備前松田家子孫）、松田充弘氏（備前松田家子孫・玉松会会長）、大村祐章氏（備前松田家重臣子孫・玉松会副会長）、大村瑄氏（備前松田家重臣子孫・玉松会事務局長）、松田達男氏（安芸松田家子孫）、八千草薫氏（備前松田家子孫、旧姓松田瞳氏、終企画）、飯塚由美氏（群馬松田家子孫）、金沢市立玉川図書館近代資料館、石川県立図書館、南足柄市郷土資料館館長 笠間吉高氏、南足柄市史編集委員会「松田氏関係文書集」、「足柄の歴史（本多秀雄氏）」、筑波大学付属図書館、「吾妻鏡（五味文彦氏・本郷和人氏）」、「武士の支配地と朝廷側支配地図（玉川大学多賀譲治氏）」、「歴散加藤塾」、「徐福王国相模（前田豊氏）」、日野市教育委員会、松田町郷土史研究者松田町町長島村俊介氏、松田町郷土史研究者藪田開作氏、寒田神社宮司藪田拓司氏、「平清盛と東国（多賀宗隼氏）」、「清盛も来るはずだった相模の松田亭（山内玄人氏）」、「平清盛と東国武士-富士・鹿島参詣計画を中心に-（野口実氏）」、「ホームページさむらいたましい」、「ホームページ古代史の扉（八木 敦氏）」、「余湖くんのホームページ（余湖浩一氏）」、「ホームページ八丁堀（原 明利氏）」、「歴探（高村不期氏）」、「葛城と古代国家（門脇禎二氏）」、「古代葛城とヤマト政権（網干善教氏）」、「女王卑弥呼の国・大いなる邪馬台国」（鳥越憲三郎氏）」、「帝紀からみた葛城氏（井上光貞氏）」、「葛城襲津彦と弓月の民渡来伝承（大和岩雄氏）」、「邪馬台国と大和朝廷（倉橋日出夫氏）」、坂元正壽氏の歴史年表、「日韓がタブーにする半島の歴史（室谷克実氏）」、岡村道雄氏著書、山岸良二氏著書、「考古学キーマン（安蒜政夫氏）」、湘南徐福会レポート、日中友好協会レポート、横須賀集客促進実行委員会、みやざこ郷土史調査室、上記の書物及び著者その他諸先生の方々より参考、引用、ご指導を頂きました。